

SITE OF HITOTUYA



March, 2014

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division

一ツヤ遺跡Ⅱ

彦根市立平田幼稚園運動場拡張工事に伴う発掘調査

平成二十六年三月

彦根市教育委員会

一ツヤ遺跡Ⅱ

— 平田幼稚園運動場拡張工事に伴う発掘調査 —



平成26年 3月

彦根市教育委員会

一ツヤ遺跡Ⅱ

－平田幼稚園運動場拡張工事に伴う発掘調査－

平成26年3月

彦根市教育委員会



西調査区全景〔南西より〕



東調査区全景〔北東より〕



掘立柱建物（SB1）〔南東より〕



調査地より佐和山を望む〔南より〕

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が、彦根市立平田幼稚園運動場拡張工事に伴い、平成24年10月17日から平成25年3月29日にかけて実施した、一ツヤ遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。整理調査については、平成25年4月1日から平成26年3月28日にかけて行った。
2. 本調査の調査地は、彦根市平田町字一ツ屋302番1および303番1に位置する。
3. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の体制は下記のとおりである。

平成24年度（現地調査）

教育長：前川 恒廣	
文化財部長：谷口 徹	文化財部次長（兼文化財課長）：寺田 修
課長補佐（兼文化財係長）：久保達彦	
史跡整備係長：北川恭子	副主査：深谷 覚
副主査：辻 嘉光	副主査：池田隼人
主任：三尾次郎	主任：森下雅子
主任：林 昭男	主任：戸塚洋輔
主任：下高大輔	技師：田中良輔
臨時職員：佃 昌幸	

平成25年度（整理調査・報告書作成）

教育長：前川 恒廣	
文化財部長：入江明生	文化財部次長（兼文化財課長）：西田哲雄
課長補佐：久保達彦	
史跡整備係長：北川恭子	文化財係長：木戸洋平
主査：深谷 覚	主査：池田隼人
副主査：三尾次郎	主任：森下雅子
主任：林 昭男	主任：戸塚洋輔
主任：下高大輔	技師：田中良輔
臨時職員：佃 昌幸	
4. 現地調査・整理調査は林が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：青山康男 安藤良一 池端 清 上田定男 内堀善正 北村富男 清水啓邦 辻 節夫
友田 勇 野村惣三郎 藤本博之 久木正弘 森 義信 吉田輝一（作業員）
久保亮二（調査補助員） 中川 永（滋賀県立大学大学院生）

整理調査：佃 昌幸（臨時職員）
飯島由紀子 市田政子 今井由美子 川崎浄子 森 和代（作業員）
平田美咲（滋賀県立大学学生）
5. 本書で使用した遺構実測図は、久保、中川、林が作成し、遺物実測図については、佃、林が作成した。遺構と遺物（一字一石経除く）の写真撮影は、調査担当者が行った。
6. 現地調査及び本書の作成にあたり、以下の方々からの助言・協力を得た。

福西貴彦
7. 調査後の一字一石経の釈読・整理において独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 山本崇氏にご教授いただいた。また、一字一石経の赤外線写真撮影については同研究所 栗山雅夫氏にご協力いただいた。
8. 本書の執筆及び編集は、林が行った。また、土壌分析については株式会社古環境研究所に分析委託し、その結果を第3章に掲載した。
9. 本書で使用した方位は、平面直角座標第IV系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。
10. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

目 次

巻頭図版
例言

第1章 序 論

第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 地理的・歴史的環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	2
(3) 一ツヤ遺跡周辺の概要	4

第2章 発掘調査の成果

第1節 基本土層	5
第2節 検出遺構と遺物	5
(1) 概 要	5
(2) 掘立柱建物	5
(3) 柵	9
(4) 溝	12
(5) 井 戸	16
(6) 土 坑	16
(7) 小 穴	20
(8) その他	30
(9) 小 結	30

第3章 科学分析・同定の結果

第1節 SK146とSK174の土壌分析	31
(1) はじめに	31
(2) 試 料	31
(3) 寄生虫卵分析	31
(4) 花粉分析	32
(5) 種実同定	34
(6) 考 察	36
(7) まとめ	38

第4章 総括

第1節 一ツヤ遺跡における中世集落	45
(1) 近江の中世集落の変遷	45
(2) 彦根の中世集落の様相	45
(3) 一ツヤ遺跡の中世集落の意義付け	47

遺構一覧

掘立柱建物一覧

掘立柱建物・柵柱穴一覧

出土遺物観察表

図版

報告書抄録

第1章 序 論

第1節 調査に至る経緯と経過

一ツヤ遺跡は彦根市平田町に位置し、本発掘調査としては今回の調査が2次調査となる。調査地は芹川と犬上川の間、雨壺山の西側にあたり、河川によって形成された自然堤防の微高地上に立地している。周辺地域一帯は宅地開発が進んでおり、調査地の隣接地も宅地となっている。今回の発掘調査は、彦根市立平田幼稚園運動場拡張工事に先立ち提出された文化財保護法94条の届出及び調査依頼にもとづくものである。平成24年3月8日に、開発面積1,546㎡を対象として、遺構の有無を確認するために試掘トレンチ12箇所を設定して試掘調査を行った。その結果、開発対象地全域で遺構と遺物が確認されたため、市の開発担当部局と協議を行った。協議の結果、工事に伴う遺構の現状保存が不可能と判断されたため、開発予定地全域に関して記録保存を目的とする本発掘調査の対象範囲とした。発掘調査は、平成24年10月17日に着手し、平成25年3月29日に終了した。調査面積は1,546㎡である。表土を重機（バックホー）により除去した後、人力により遺構の検出・掘削を行った。調査で発生した排土は開発予定地内でおさめる必要があったため、排土置き場を確保しながら、調査区



表1 一ツヤ遺跡発掘調査一覧

調査番号	調査地／調査面積（㎡）／調査原因	調査期間	調査主体	主な検出遺構・遺物
1	平田町地先 42（調査面積） 個人住宅建設	2011年5月 ～ 2011年6月	彦根市教育委員会	溝、井戸、小穴群 土師器、瓦質土器
2	平田町地先 1,546（調査面積） 運動場拡張工事	2012年10月 ～ 2013年3月	彦根市教育委員会	掘立柱建物、溝、柱穴、土坑、井戸、柵 瀬戸美濃、越前、信楽、土師器、瓦質土器、青磁、 白磁、木製品、石製品

を3区画に分けて随時反転しながら調査を進めた。調査地は湧水の激しい地域であることに加え、冬季で降雪にもみまわれたため、排水作業が困難であった。遺構平面図の作成は、グリッドを基準に縮尺20分の1を基本に、適宜縮尺10分の1で人力によって行った。試掘調査の段階では、中世後期の遺構を検出していたが、本発掘調査でも概ね試掘成果に合致する中世後期の集落・耕作地を確認するに至った。その後、平成25年4月1日～平成26年3月28日にかけて整理調査を行ない、本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、関係者各位にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

第2節 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

調査地である一ツや遺跡は、彦根市北部の平田町に所在する。今回の調査地周辺は、河川により形成されたと考えられる砂礫および粘質土からなる堆積層を基盤層としている。現在、芹川は雨壺山の北側を南東から北西方向へと流れているが、今回の調査地の南方約100mの地点では、試掘時に河川の旧流路と思われる堆積層を検出しており、いつの時代かは不明であるが、かつての芹川もしくは平田川などが、雨壺山の南側に大きな流れを形成していたものと推定される。

こうした環境からか、周辺では湧水が多く見られ、明治4年頃に製作された『犬上郡平田村耕地絵図』においても、沼沢地の描写が見られる。また、周辺の字名には「大沢」・「月沢」・「湯でん」などの湧水に関わる地名が多く見られ、この土地の性状をよく示している。

また、古くからの屋敷地については、そうした低地部分よりも一段高い、雨壺山寄りの微高地上に形成されている。こうした状況は、前述の『犬上郡平田村耕地絵図』に描かれた状況とも一致しており、往時の状況を現在でも良好に伝えている。

調査地周辺は宅地化が進んでいるものの、条里地割が残存しており、条里関連地名も存在している。調査地は、平田幼稚園に隣接する耕作地で、条里方向の規制を受けた地割となっており、地名は「十八」という条里関連地名である。

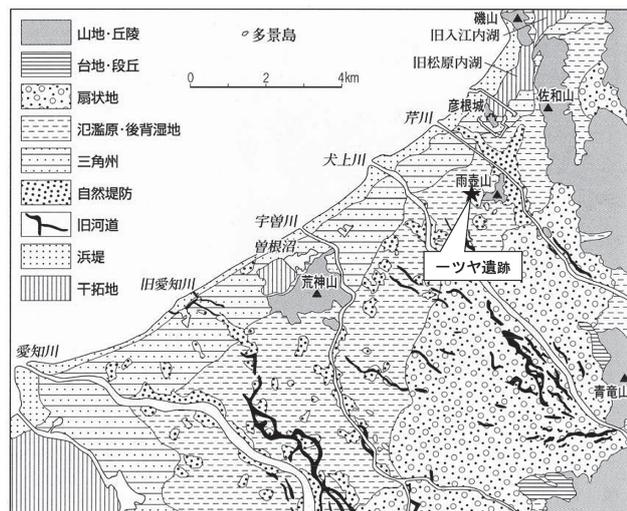


図2 彦根の自然地形（『新修彦根市史』第1巻より）

(2) 歴史的環境

縄文時代 屋中寺廃寺で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡・敏満寺

遺跡（多賀町）・小川原遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などが当該期に当る。土田遺跡・小川原遺跡では、甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

弥生時代 前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大岡遺跡（多賀町）や犬上川流域の尼子遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などの扇状地で土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが、これ以降継続するものではない。市域では竹ヶ鼻廃寺や稲里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。中期以降は、琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曾川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で堅穴建物を伴った福満遺跡がある。このように、中期以降宇曾川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。

古墳時代 古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段の東遺跡・木曾遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳が築造されるようになる。竹ヶ鼻廃寺周辺でも、JR東海道線の南彦根駅と犬上川橋梁の中間に「椿塚」という藪があり、鉄道敷設の際の土取で石室が発見され須恵器の出土が伝わることから後期古墳が存在した可能性が高い。また、犬上川河口に位置する八坂東遺跡からは後期の埴輪が出土している。これらより、犬上川中・下流域には埋没古墳が存在する可能性がある。

白鳳～奈良時代 7世紀後半になると、新しく伝来した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が6箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺・下岡部廃寺・普光寺廃寺である。白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていないが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺・福満遺跡・法士南遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらのなかに前代の遺構が含まれている可能性がある。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺の南東2km付近に、畿内と東国を結ぶ推定古代東山道が通過しており、交通・流通面において重要な立地にあったといえる。この時期、竹ヶ鼻廃寺や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物群や、硯・石帯・銅匙などの官衙的遺構・遺物が確認されており、これらより現在のJR南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となっており、古代犬上郡における中心地であったと考えられている。また、前述の古代寺院への瓦の供給が想定される、瓦陶兼業窯の鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡などの生産遺跡も確認されている。

中世 中世では、平安後期から鎌倉時代にかけての集落が国領遺跡、普光寺廃寺遺跡、市遺

跡で営まれる。また、湖上交通が活発化し、市域では松原・薩摩・柳川・三津屋・石寺・須越・八坂が営まれる。そのような中であって、宇曾川下流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15世紀末から16世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、琵琶湖と宇曾川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空間であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曾川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置する。道路や土塁で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと考えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋敷遺跡では道路や土塁で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

中世後半期では、北の京極氏・浅井氏と南の六角氏の軍事的衝突が活発化し、市域一帯はちょうど両勢力がぶつかり合う地理的関係上、佐和山城や肥田城などの城館が活発に営まれ、佐和山城に関してはその地理的・軍事的重要性より、その後も織田勢力、豊臣勢力へと引き継がれていく。

(3) 一ツヤ遺跡周辺の概要

平田町については、東に朝鮮人街道、西には巡礼街道が南北に並走しており、交通上有利な立地となっている。また、朝鮮人街道の東側に位置する雨壺山の山麓には、長久寺や新神社などをはじめ、複数の寺院や神社が点在するなど、宗教施設が多く集まる地域でもある。

現在では平田町の中南部に位置している明照寺についても、延徳二年（1490年）に現在の多賀町後谷から雨壺山南麓の山之脇町へと移転してきており、以降江戸時代中期、元禄十四年（1701年）に現在地へと移転するまで、約200年に渡り同地に位置していた。

現在、明照寺の寺域内には寺中寺院として、眞成寺、一妙寺、得法寺などの三ヶ寺が存在している。明照寺が山之脇にあった当時の状況については不明な点が多いが、雨壺山南麓に位置する薬師堂の通称に、「しんじょっさん」という「眞成寺（しんじょうじ）さん」が訛ったものと思われる呼び名が見られることから、あるいは現在と同様、複数の塔頭を擁する、規模の大きな寺院であった可能性が考えられる。戦国期の明照寺については、近江国内有数の本願寺方の拠点として、多数の門徒を擁していたとも伝わることから、そうした可能性は比較的高いものと思われる。



写真1 第1次調査全景

第2章 発掘調査の成果

第1節 基本土層（図3）

一ツヤ遺跡は、芹川と犬上川の間、雨壺山の西側にあたり、河川によって形成された自然堤防の微高地上に立地している。調査地周辺は宅地化が進んでいるものの、現在も犬上郡条里地割を踏襲した地割が残存しており、条里関連地名も存在している。今回の調査地は平田幼稚園に隣接する耕作地で、条里方向の規制を受けた地割となっており、地名は「十八」という条里関連地名となっている。

調査の結果、地表面から60～70cm掘り下げたところで遺構面を検出した。基本土層は、1層は灰黄褐色粘質土（近現代耕作土）、2層は青灰色粘質土（床土）、3層は灰黄色砂混じり粘質土（旧耕作土）、4層はオリブ灰色粘質土（包含層）、5層は明黄褐色粘質土（基盤層）の5層を確認し、5層上面で遺構を検出した。遺構検出高は90.0m前後である。

第2節 検出遺構と遺物

（1）概要（図4）

今回の調査では、調査区全域で中世後期の集落関連遺構を検出した。とりわけ屋敷地と耕作地をセットで検出したことが特筆される。検出遺構の概要は、2条の平行する溝により区画された屋敷地が調査区東側で、区画溝より西側で耕作地がひろがっていた。また、これら検出された区画溝・屋敷地内の掘立柱建物や柵の諸施設、耕作地に伴う素掘り溝などはいずれも犬上郡条里地割に軸を揃えている状況が確認された。

主な検出遺構は、掘立柱建物2棟、柵4条、区画溝や耕作地に伴う素掘り溝など多数の溝、井戸1基、多数の土坑や小穴などである。

（2）掘立柱建物

SB1（図5・13）

調査区中央南東よりで検出された掘立柱建物である。SD3の南東側屋敷地内に位置する。梁行2間（約4m）×桁行3間（約6m）の南北棟建物で、棟の方位はN-34°-Eを示し、犬上郡条里地割に乗っている。柱間は梁側では約1.7～2.2m、桁側では約1.9～2.1mで床面積は約24.0㎡を測る。柱穴は、SP221・SP227・SP238・SP240・SP244・SP247・SP253・SP256・SP260・SP265・SP270で構成され、掘り方の平面形は円形で直径約0.35～1.01m、残存深度は約0.11～0.48mを測る。柱痕は、平面円形で直径約0.2～0.35mを測る。

南東側の身舎内に屋内土坑SK241が備わる。SB1はSK241を完全に覆い、主軸方位もほぼ一致することより、SB1とSK241は一体で機能していたと考えられる。

SP221とSP244、SP265からは、土師器皿（74・78・81）が出土した。いずれも底部が欠損していて形態は不明だが、内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収める。内・外面とも不

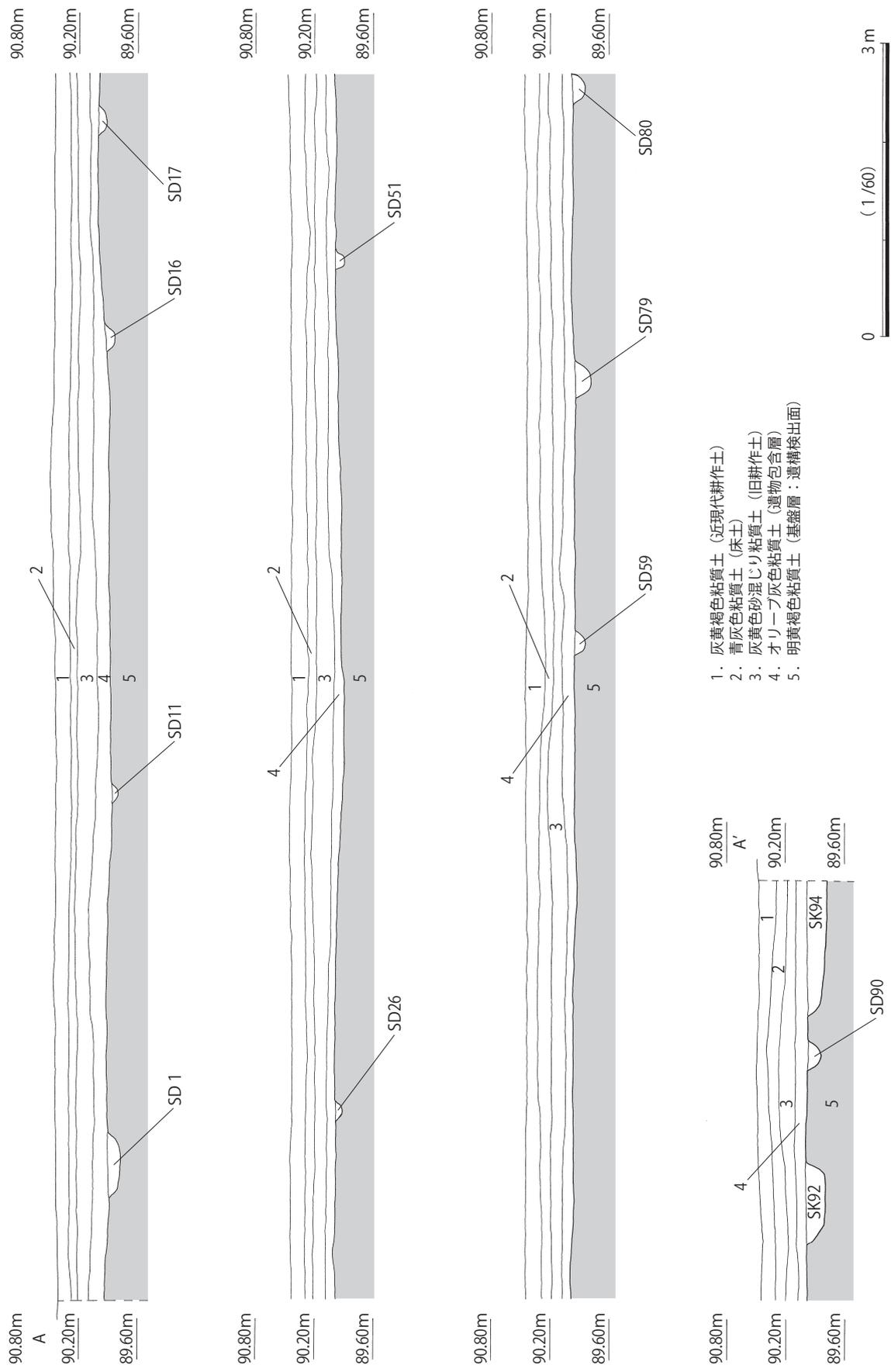


図3 調査区北西壁土層断面図



図4 遺構全図
- 7 · 8 -

定方向のナデが施されている。

SB 2 (図 6)

耕作地が広がる調査区の北西側で検出された掘立柱建物である。梁行 2 間 (約 2.9m) × 桁行 2 間 (約 4.0~4.6m) の南北棟建物で、棟の方位は N - 35° - E を示し、ほぼ犬上郡条里地割に乗っている。柱間は梁側では約 1.3~1.7m、桁側では約 1.9~2.4m で、床面積は約 12.5 m²を測る。柱穴は、SP63・SP65・SP66・SP67・SP70・SP77・SP78 で構成され、掘り方の平面形は円形で直径約 0.19~0.42m、残存深度は約 0.06~0.25m を測る。柱痕は、平面円形で直径約 14~22m を測る。

(3) 柵

SA 1 (図 7)

SB 1 の北西側に平行する 2 条の南北方向の柵が位置するが、その北西側が SA 1 である。軸方向は N - 34° - E を示し、SB 1 の軸方向にほぼ一致するとともに、犬上郡条里地割にも乗っている。5 間の柵で、柱間は約 1.9~2.6m を測る。柱穴は、SP150・SP153・SP154・SP158・SP163・SP166 で構成され、掘り方の平面形は円形で直径約 0.13~0.67m、残存深度は約 0.04~0.26m を測る。その位置関係から屋敷地内を区画するための施設と考えられる。

SA 2 (図 7)

SB 1 の北西側に平行する 2 条の南北方向の柵が位置するが、その南東側が SA 2 である。軸方向は N - 34° - E を示し、SB 1 の軸方向にほぼ一致するとともに、犬上郡条里地割にも乗っている。5 間の柵で、柱間は約 2.1~2.3m を測る。柱穴は、SP147・SP149・SP152・SP155・SP161・SP173 で構成され、掘り方の平面形は円形で直径約 0.17~0.40m、残存深度は約 0.09~0.32m を測る。柱痕は、平面円形で直径約 0.16~0.18m を測る。その位置関係から屋敷地内を区画するための施設と考えられる。

SA 3 (図 6)

SB 1 の北東側に位置する東西方向の柵で軸方向は N - 55° - W を示し、SB 1 の軸方向にほぼ直交し、犬上郡条里地割にも乗っている。5 間の柵で、柱間は約 2.7~3.2m を測る。柱穴は、SP263・SP267・SP290・SP292・SP299 で構成され、掘り方の平面形は円形で直径約 0.17~0.55m、残存深度は約 0.04~0.27m を測る。その位置関係から屋敷地内を区画するための施設と考えられる。

SA 4 (図 6・13)

SB 1 の南側に位置する柵で、L 字に折れるが軸方向は N - 35° - E と N - 55° - W を示し、SA 3 の軸方向にほぼ一致し、犬上郡条里地割にもほぼ乗っている。4 間の柵で、柱間は約 0.9~1.4 を測る。柱穴は、SP188・SP189・SP209・SP210・SP212・SP215 で構成され、掘り方の平面形は円形で直径約 0.23~0.59m、残存深度は約 0.08~0.46m を測る。柱痕は、平面円形で直径約 0.16~0.20m を測る。その位置関係から屋敷地内を区画するための施設と考えられ

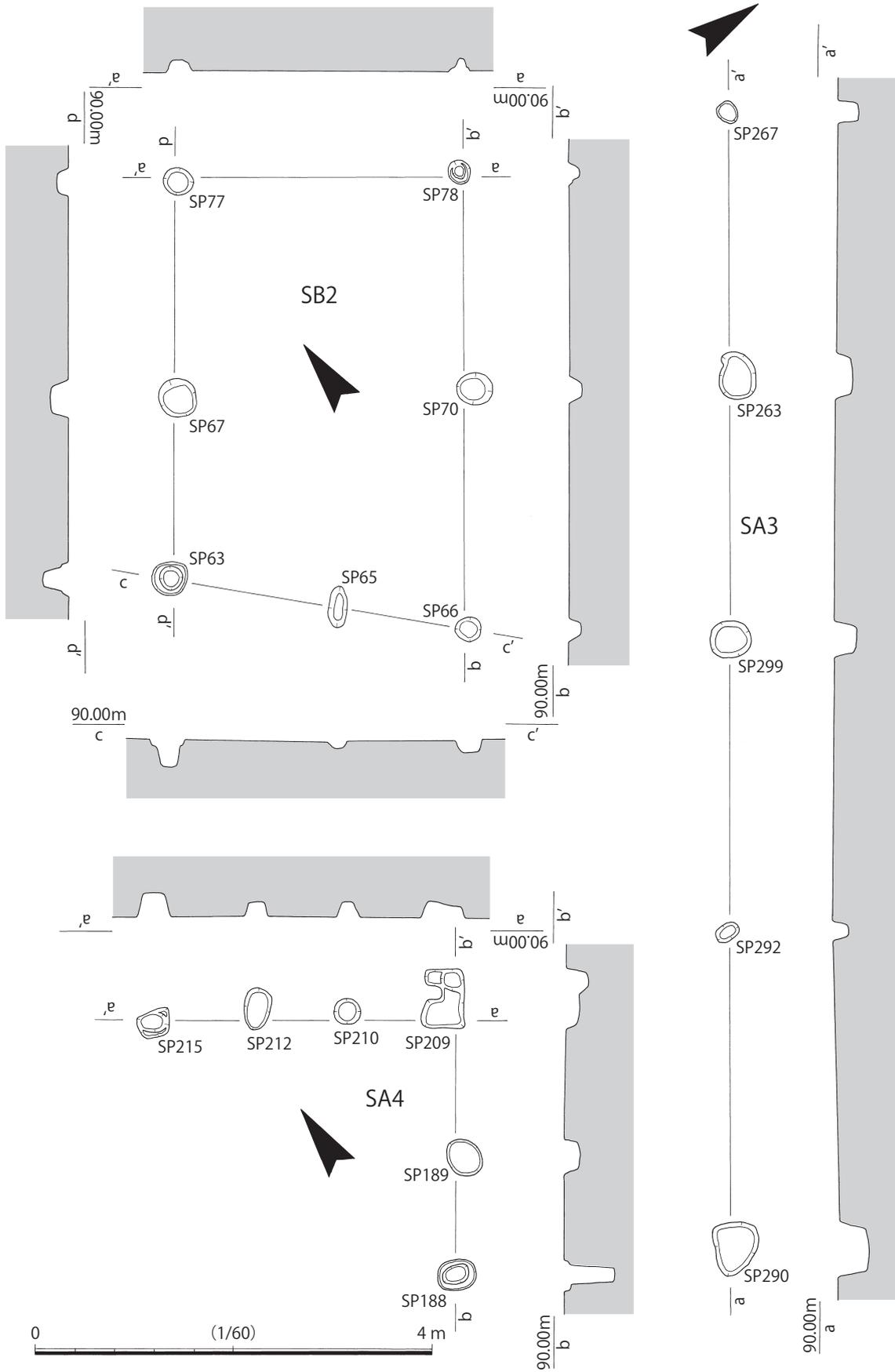


图6 掘立柱建物 (SB2)、柵 (SA3·SA4) 平面図・断面図

る。

SP189からは、越前焼の播鉢（71）が出土した。播鉢の胴部から口縁部にかけてで、内傾して切られた口縁直下に段がつく。8条1単位の播目が施されている。

遺構の時期は、柱穴の出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

（4）溝

SD1（図7・10）

調査区南西際で検出された東西方向の溝。直線に伸びており、SD2・SD3と直角に交わる。東西方向の軸方位がN-56°-Wで犬上郡条里地割に乗っている。幅約0.7m、深さ約0.1mで断面U字状を呈する。埋土は1層が黄灰色粘質土、2層がオリーブ黒色粘質土（有機質を20%含む、粘性強い）の2層である。

遺物は、土師器皿（1～3）、瀬戸美濃焼の播鉢（4）、白磁の碗（5）、瓦質土器の羽釜（6）が出土した。土師器皿（1～3）はいずれも底部が欠損していて形態は不明である。1は、内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収める。内・外面とも不定方向のナデが施されている。2・3は、立ち上がり部からそのまま大きく外反する口縁部をもっている。内・外面ともヨコナデが施されている。瀬戸美濃焼の播鉢は口縁部片（4）で、口縁端部内面に段ができる。白磁の碗（5）は、体部下位が若干膨らみ、口縁端部が外反する。瓦質土器の羽釜（6）は、口縁部は短く僅かに内傾し、端部内側をつまみ出している。端部より2cm下に断面三角形の鏝をやや上向きに貼り巡らせている。内外面ともナデしており、全面に煤が付着する。

遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

SD2（図7・10・11）

調査区中央付近で検出された区画溝である。SD3と芯々距離で4.6mの間隔を保って平行し、いずれも南東方向に向かってコの字に折れる。南北方向の軸方位がN-34°-Eで犬上郡条里地割に乗っている。幅約0.9m、深さ約0.5～0.7mで断面U字状を呈する。埋土は1層が黄灰色粘質土、2層がオリーブ黒色粘質土（有機質を10%含む、粘性強い）である。

遺物は、土師器皿（7～9）、瀬戸美濃の平碗（10）・天目茶碗（11・12）・播鉢（14・15）・直縁大皿（16）・折縁深皿（17）、青磁の椀（13）、越前の播鉢（18～22）、信楽の播鉢（23）・壺（甕）（25）、瓦質土器の仏華瓶（26）、器種・用途ともに不明の木製品（27）・金属製品（28）、産地不明陶器の壺（甕）（24）が出土した。土師器皿（7～9）の7は直線的な口縁部の端部を丸く収めている。8は内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収め平底である。内・外面とも不定方向のナデが施されている。9は、底部が欠損していて形態は不明だが、内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収める。内・外面とも不定方向のナデが施されている。瀬戸美濃の平碗（10）は体部から口縁部にかけての破片である。体部は緩やかに内湾し、口縁端部でわずかに外反する。内外面とも灰釉が施される。天目茶碗（11・12）はいずれも底部片で、11は削り出し輪高台で外面に濃い錆釉が施されている。内面は小石が付着しているが、鉄釉

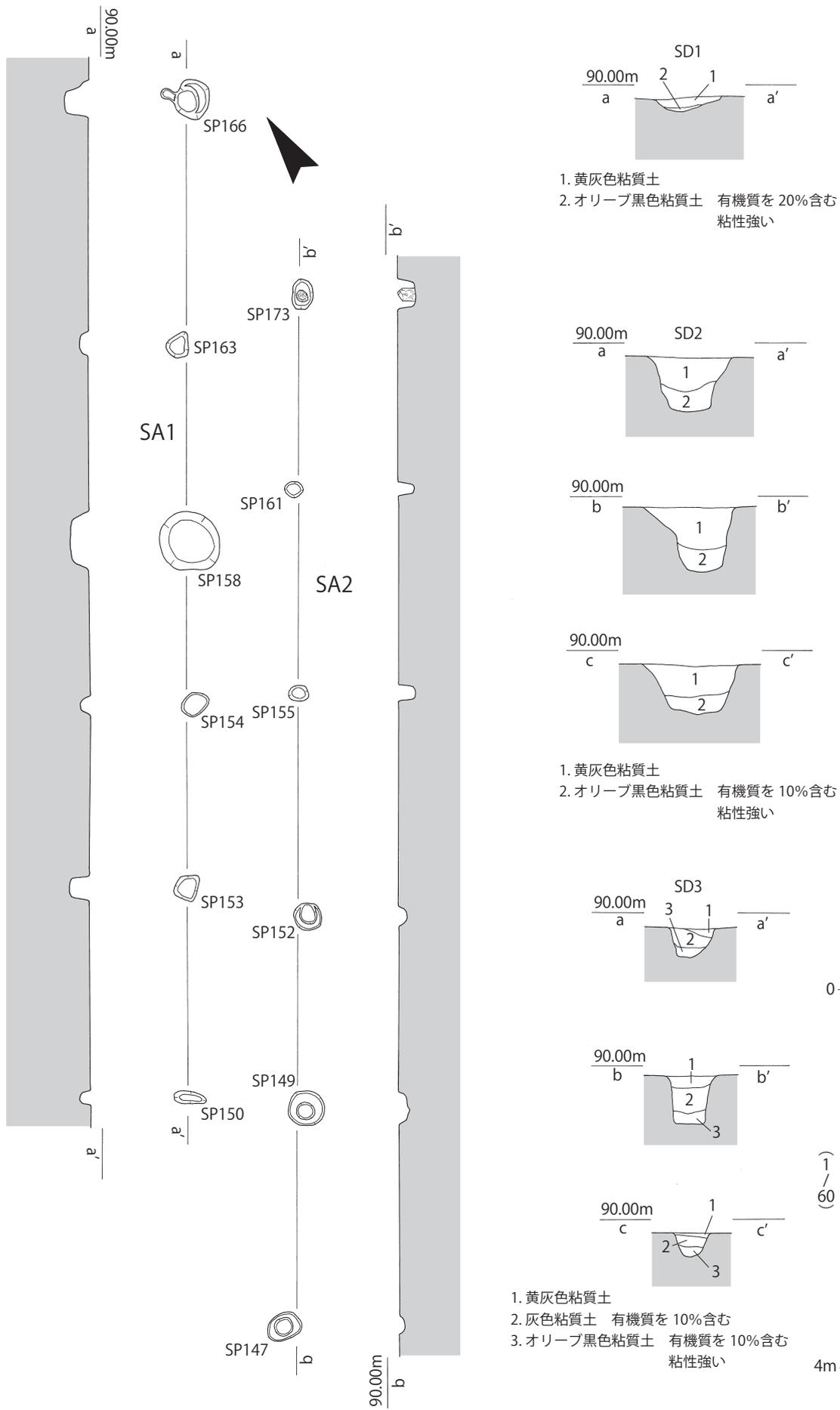


図7 柵 (SA1・SA2)、溝 (SD1・SD2・SD3) 平面図・断面図

が施されている。12は削り出し輪高台で外面に錆釉が、内面には鉄釉が施されている。播鉢（14・15）はいずれも体部から底部にかけての破片で、14は内面に13条1単位の播目が、底部外面には糸切りの痕跡が確認される。内外面とも鉄釉が施されている。15は8条1単位の播目で、内外面とも鉄釉が施されている。直縁大皿（16）は体部から口縁部にかけての破片で、内湾する体部に受け口状の口縁部を持つ。内外面とも灰釉を施す。折縁深皿（17）は体部から口縁部にかけての破片で、口縁が外側に折れ、上面に蓋受状の段をもつ。外面にはロクロ目を残す。内外面に灰釉が施されているが、外面は胴部までで、胴部以下は露胎である。青磁の碗（13）は、線描き蓮弁文碗である。釉調は青みを帯びた緑色を呈す。越前の播鉢（18～22）はいずれも播鉢の口縁部で、内傾して切られた口縁直下に段がつく。18は片口を有し、播目は8条1単位である。19・21は7条1単位、20は小片のため判然としないが、1単位6条以上の播目が施されている。22の播目の条数は不明である。信楽の播鉢（23）は、体部はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部端部は外方へつまみ出す。内外面とも磨耗が非常に激しいため、播目の条数は確認できない。瓦質土器の仏華瓶（26）は完形で前面に燻が確認される。27は棒状の木製品、28は針金状の金属製品だがいずれも器種・用途は不明である。27は表面に面取りがされている。

遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

SD 3（図7・12）

調査区中央付近で検出された区画溝である。SD 2と芯々距離で4.6mの間隔を保って平行し、いずれも南東方向に向かってコの字に折れる。南北方向の軸方位がN-34°-Eで犬上郡条里地割に乗っている。SB 1を中心とする長方形の屋敷地を確保する為の区画溝で、その範囲は33.0m×15.8mで面積は約521.4㎡を測る。幅約0.4m、深さ約0.1～0.5mで断面U字状を呈する。溝は東から西に向かって深くなっており、南北方向の溝の中間あたり、ちょうど「b-b」の土層断面の位置辺りで一段下がり、最も深くなる。この形態よりSD 3は、区画溝であるとともに、水の排水と貯水の機能をあわせ持っていたと考えられる。埋土は1層が黄灰色粘質土、2層が灰色粘質土（有機質を10%含む）、3層がオリーブ黒色粘質土（有機質を10%含む、粘性強い）である。

遺物は、土師器皿（29～33）、瀬戸美濃の丸碗（34）が出土した。土師器皿（29～33）だが、29・30は内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収め平底である。内・外面とも不定方向のナデが施されている。31～33はいずれも底部が欠損して形態は不明だが、立ち上がり部からそのまま大きく外反する口縁部を持っている。内・外面ともヨコナデが施されている。瀬戸美濃の灰釉丸碗（34）の灰釉は内外面ともに施されている。

遺構の時期は、出土遺物から15世紀～16世紀初頭と考えられる。

SD 5（図9）

調査区北西側、SB 2の南側に隣接する位置で検出された溝である。幅約0.3m、深さ約0.03～0.15mで断面U字状を呈する。埋土は黄灰色粘質土の1層のみの堆積である。SK 4と接

続しており、両遺構が接続する境には竹や木で組まれたしがらみ遺構が確認されており、SK 4 と SD 5 は一体で機能していたと考えられる。

SD 9 (図12)

SD 2 の南西側に位置し、SD 2 と芯々で0.9mの間隔を保って平行する南北溝である。長さ約16.5m、幅約0.35m、深さ約0.08mで断面U字状を呈する。埋土は黄灰色粘質土の単層である。耕作に伴う素掘り溝と考える。

出土遺物は、土師器皿(43)で、上げ底の底部から体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口縁部内外面はヨコナデが施されており、煤が付着している。

遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

SD50 (図12)

SK 4 南西側で検出された溝である。耕作に伴う素掘り溝と考える。幅約0.3m、深さ約0.09mで断面U字状を呈する。埋土は黄灰色粘質土の1層である。犬上群条里地割りに乗っている他の素掘り溝に比べて、わずかに軸が北にふっており、同様の軸を持つ素掘り溝が少数確認される。構築時期の違いに起因すると考える。

出土遺物は土師器皿(47)で、底部が欠損していて形態は不明だが、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。内・外面ともヨコナデが施されている。

SD343 (図15)

SE328の東側で検出された溝である。幅約0.27m、深さ約0.07mで断面U字状を呈する。埋土は灰黄褐色の単層である。

遺物は信楽の壺(甕)(95)が出土した。

SD345 (図9)

調査区東側で検出された溝である。幅約0.41m、深さ約0.12mで断面U字状を呈する。埋土は1層が黄灰色粘質土の単層である。SK344、SD362に切られている。犬上郡条里地割に乗っている他の区画溝や素掘り溝に比べて軸が僅かに北に振っており、構築時期の違いに起因すると考える。

SD349 (図15)

調査区東側で検出された溝である。SD348と芯々で1.0mの間隔を保って平行する南北溝である。幅約0.28m、深さ約0.07mで断面U字状を呈する。埋土は1層が褐灰色粘質土、2層が黒褐色粘質土である。

遺物は、土師器皿(96～98)、木製品の箸(99)が出土した。土師器皿(96～98)はいずれも底部が欠損していて形態は不明だが、96は内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収める。内・外面とも不定方向のナデが施されている。97は強いヨコナデで口縁が外反している。98は直線的な口縁部の端部を丸く収めている。内外面ともヨコナデが施されている。木製品の箸は、長さ17.9cmで、厚さ5～6mmである。不整形ながら4面に面取りをしている。

SD362 (図9)

調査区東側で検出された溝である。幅約0.39m、深さ約0.05mで断面U字状を呈する。埋土は1層が灰色粘質土の単層である。SD345、SK344を切っている。非常に浅い溝だが、SK344を切った影響で、僅かにSK344の一字一石経が埋土に混入している。犬上郡条里地割に乗っている他の区画溝や素掘り溝に比べて軸が僅かに北に振っているが、SD345などと同じように構築時期の違いに起因すると考える。

(5) 井戸

SE328 (図8・14)

屋敷地の北東側で検出された井戸である。約1.6m四方の平面隅丸方形の素掘りの井戸で、深さは約2mで湧水層である褐灰色砂礫層に達している。

遺物は、土師器皿(86~89)、土師質の焙烙(90)、山茶碗(91)、石器の磨製石斧(92)、木製品の板材(93・94)が出土した。土師器皿(86~89)だが、86は、底部が欠損していて形態は不明だが、直線的な口縁部の端部を丸く収めている。内・外面ともヨコナデが施されている。87は、底部が欠損していて形態は不明だが、内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収める。内・外面ともヨコナデが施されている。88は、底部が欠損していて形態は不明だが、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。内・外面ともヨコナデが施されている。89は、底部が欠損していて形態は不明だが、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。内・外面ともヨコナデが施されている。土師質の焙烙(90)は口縁部片で、内湾しながら立ち上がる。外面はヨコナデ、内面はハケにより成形されている。山茶碗(91)は底部片である。磨製石斧(92)は平滑に仕上げられた刃部が確認された。刃部以外の3面には、石材を割った際に使用されたと考えられる工具痕が認められる。木製品の板材(93・94)だが、93は長方形の板材で、隅に4つの小穴が確認される。おそらく釘穴で箱状容器の部材と考えられる。94は円形の板の一部で曲物の蓋板と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半~16世紀初頭と考えられる。

(6) 土坑

SK4 (図9・12)

調査区北西側の耕作地付近で検出された土坑である。長辺約2.65m、短辺約1.8mで平面隅丸長方形を呈し、深さは約0.26mを測り、底部は平坦である。埋土は1層が褐灰色粘質土、2層が黒褐色粘質土が堆積する。SD5と接続しており、両遺構が接続する境には竹や木で組まれたしがらみ遺構が確認されており、SK4とSD5は一体で機能していたと考えられる。

遺物は、土師器皿(35~38)、土師質の焙烙(39)、染付の椀(40)、木製品の下駄(41)・板材(42)が出土した。土師器皿(35~38)だが、35は底部が欠損していて形態は不明だが、内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収める。内・外面とも不定方向のナデが施されている。

36は、底部が欠損していて形態は不明だが、外反する口縁部の端部を丸く収めている。内・外面ともヨコナデが施されている。37・38は、底部が欠損していて形態は不明だが、立ち上がり部からそのまま大きく外反する口縁部を持っている。内・外面ともヨコナデが施されている。土師質の焙烙（39）は口縁部片で、内外面ヨコナデが施されている。染付（40）は底部辺である。木製品の下駄（41）は長さ約20cmを測る長方形のものである。花緒の穴が3箇所認められる。歯は削り出したものであるが、使い込まれ摩滅しており低い。

遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

SK82（図8・13）

SB2の北側で検出された土坑である。長辺約0.89m、短辺約0.85mで平面隅丸方形を呈する。深さは約0.62mで、垂直に掘り込まれており底部は平坦である。埋土は灰色粘質土単層である。

出土遺物は漆器の皿（49）で、底部片である。内外面黒色漆で、見込みにわずかに赤色漆で文様を描いた痕跡が確認された。

SK92（図13）

調査区北側、SK93に西側で検出された土坑である。平面楕円形で深さ約0.16mを測る。

出土遺物は山茶碗（50）で口縁部片である。

SK93（図8）

調査区北側、SK92の東側で検出された土坑である。長辺約0.98m、短辺約0.85mで平面隅丸方形を呈するが、東側に1段のテラスを有す。深さは約0.83mで、垂直に掘り込まれており底部は平坦である。埋土は1層が灰色粘質土、2層が緑灰色粘質土、3層が灰色粘質土、4層がオリーブ黒色である。

SK94（図13）

調査区北側際で検出された土坑である。遺構は調査区の外にまで広がるが、概ね平面形は円形である。

出土遺物は山茶碗（51）である。底部には糸切り痕が確認でき断面三角形の高台がつく。

SK114（図13）

SD2とSD3の間で検出された土坑である。平面不整形で、深さは約0.19mを測る。

出土遺物は土師器皿（56）で、底部が欠損していて形態は不明だが、外反する口縁部の端部を丸く収めている。内・外面ともヨコナデが施されている。

SK126（図13）

調査区中央付近で検出された土坑である。平面隅丸方形の土坑だがSD2に切られている。

出土遺物は信楽の播鉢（57）で、底部片である。小片のため播目は確認できない。

SK143（図9・13）

SB1の北側で検出された土坑である。長辺約3.3m、短辺約2.42m、深さは約0.14mを測り、底部は平坦である。埋土は灰色砂礫混じり粘質土1層の単層である。南西側が突出しており、

平坦な礫が据えられている。

出土遺物は土師器皿（58・59）で、58は底部が欠損していて形態は不明だが、外反する口縁部の端部を丸く収めている。内・外面ともヨコナデが施されている。59は、底部が欠損していて形態は不明だが、立ち上がり部からそのまま大きく外反する口縁部を持っている。内・外面ともヨコナデが施されており、煤が付着している。

SK146（図8・13）

SK92の南東側で検出された土坑である。長辺約1.13m、短辺約1.07mで平面隅丸方形を呈する。深さは約1.6mで、垂直に掘り込まれており底部は平坦である。埋土は1層がオリーブ黒色粘質土、2層がオリーブ灰色粘質土、3層が暗オリーブ灰色粘質土、4層が灰色粘質土、5層がオリーブ灰色粘質土である。

遺物は、土師器皿（60～64）、瀬戸美濃の直縁大皿（65）、器種・用途不明のヘラ状の木製品（66）、鉄製品の火打金（67）が出土した。土師器皿（60～64）だが、60・62はゆるやかに外反する口縁部をもつ。内・外面ともヨコナデが施されている。61は直線的な口縁部で端部を丸く収めている。内・外面ともヨコナデが施されている。63は底部が欠損していて形態は不明だが、直線的な口縁部で端部を丸く収めている。内・外面ともヨコナデが施されている。64は底部が欠損していて形態は不明だが、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。内・外面ともヨコナデが施されている。瀬戸美濃の直縁大皿（65）は口縁部片で、受け口状の口縁部を持つ。内外面とも灰釉を施す。

遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

SK172（図8・13）

屋敷地内の北側で検出された土坑である。長辺約0.79m、短辺約0.77mで平面隅丸方形を呈する。深さは約0.26mで、断面逆台形状で底部には3～5cm代の川原石が充填されている。充填されている川原石に墨書などは確認されなかった。埋土はオリーブ黒色粘質土の単層である。

遺物は、土師器皿（68）、瀬戸美濃の皿（69）が出土した。土師器皿（68）は、直線的な口縁部で端部を丸く収めている。内・外面ともヨコナデが施されている。瀬戸美濃の皿（69）は、底部片で糸切り痕が確認でき露胎、内面には鉄釉が施されている。

SK174（図8・13）

屋敷地内の南西側で、SK174とSK175が並列する形で検出された。長辺約0.94m、短辺約0.92mで平面隅丸方形を呈する。深さは約0.83mで、垂直に掘り込まれており底部は平坦である。埋土は1層が緑灰色粘質土、2層が青灰色粘質土、3層が緑灰色粘質土である。

出土遺物は骨角器の筭（70）だが、上部が欠損している。

SK175（図8）

屋敷地内の南西側で、SK174とSK175が並列する形で検出された。長辺約1.26m、短辺約1.24mで平面隅丸方形を呈する。深さは約0.82mで、垂直に掘り込まれており底部は平坦で

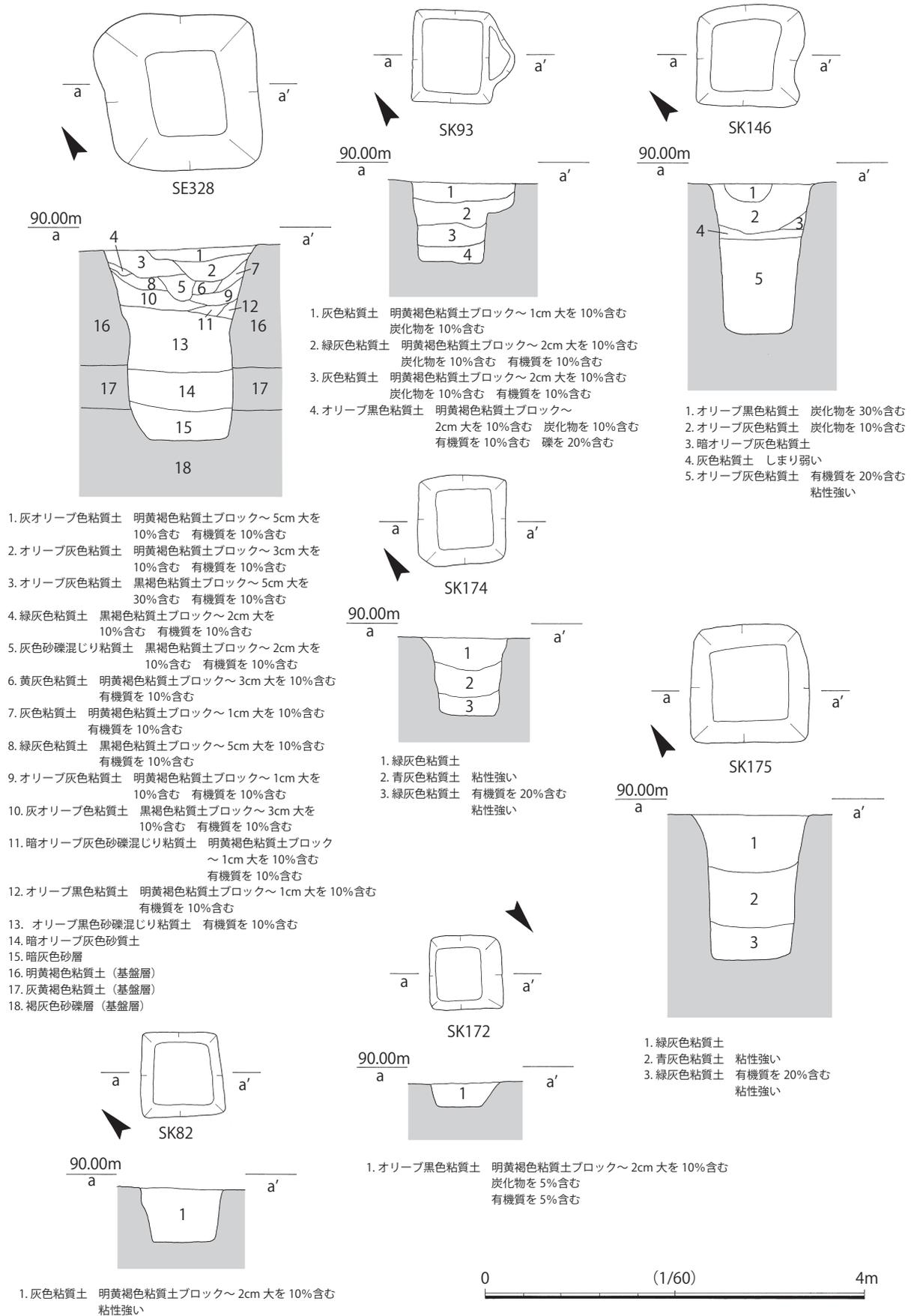


図8 各遺構 (SK82・SK93・SK146・SK172・SK174・SK175・SE328) 平面図・断面図

ある。埋土はSK174と同じで、1層が緑灰色粘質土、2層が青灰色粘質土、3層が緑灰色粘質土である。

SK241 (図5・13)

SB1の身舎内に位置する土坑である。長辺約2.53m、短辺1.87mで平面隅丸長方形を呈し、深さは約0.18mを測り、底部は平坦である。埋土は褐灰色砂混じり粘質土の単層である。

出土遺物は土師器皿(76・77)で、いずれも底部が欠損していて形態は不明だが、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。内・外面ともヨコナデが施されている。

SK344 (図9・16)

調査区の西側で検出した経塚である。SD345を切り、SD362に切られる。SD362に切られたことにより、僅かにSD362の埋土に一字一石経が混入した。長辺約1.41m、短辺約0.89mの平面楕円形を呈す。深さは約0.34mを測り、舟底形の断面を呈す。埋土は1層が灰色礫混じり粘質土、2層が黄灰色粘質土である。

遺物は一字一石経が出土した。礫は約3.5cm×2.0cmのものが大半を占める。経石は河原石で加工されたものはなく、色調は灰色やオリーブ灰色のものが多く、上層である1層に充填される形で出土し、下層である2層からは出土しなかった。経石の出土総数は約1316点である。その中から墨書の痕跡が確認できたもの55点を写真で掲載し、さらに文字の判読もできたもの32点を図化した。

それぞれの釈読案は、「厭」、「不」、「薩」、「由」、「所」、「九」、「毎」、「量」、「見」、「羅」、「得」、「各」、「轉」、「坐」、「得」、「袂」、「濟」、「王」、「出」、「生」、「利」、「經」、「藏」、「幢」、「無」、「阿」、「知」、「羊」、「數」、「卒」、「及」となった。

上記釈読案のうち、妙法蓮華経に含まれる字は以下のとおりである。

「厭」、「不」、「薩」、「所」、「毎」、「量」、「見」、「羅」、「各」、「坐」、「袂」、「出」、「生」、「無」、「阿」、「知」、「羊」

また、無量義経・仏説観普賢菩薩行法経のいずれかに含まれる字は以下のとおりである。

「由」、「九」、「得」、「轉」、「濟」、「王」、「利」、「經」、「藏」、「幢」、「及」

上記いずれにも含まれない字は以下のとおりである。

「卒」

統計的にこれだけの数で断定はできないが、当経塚の一字一石経は法華三部経の一字書写を中心に、一部他の書写も行われている可能性がある。

(7) 小穴

SP33 (図12)

調査区北西側の耕作地付近で検出された小穴である。長径0.58m、短径0.51m、深さ0.33mの平面円形の小穴である。

遺物は、土師器皿(44)、越前の播鉢(45)が出土した。土師器皿(44)は、底部が欠損

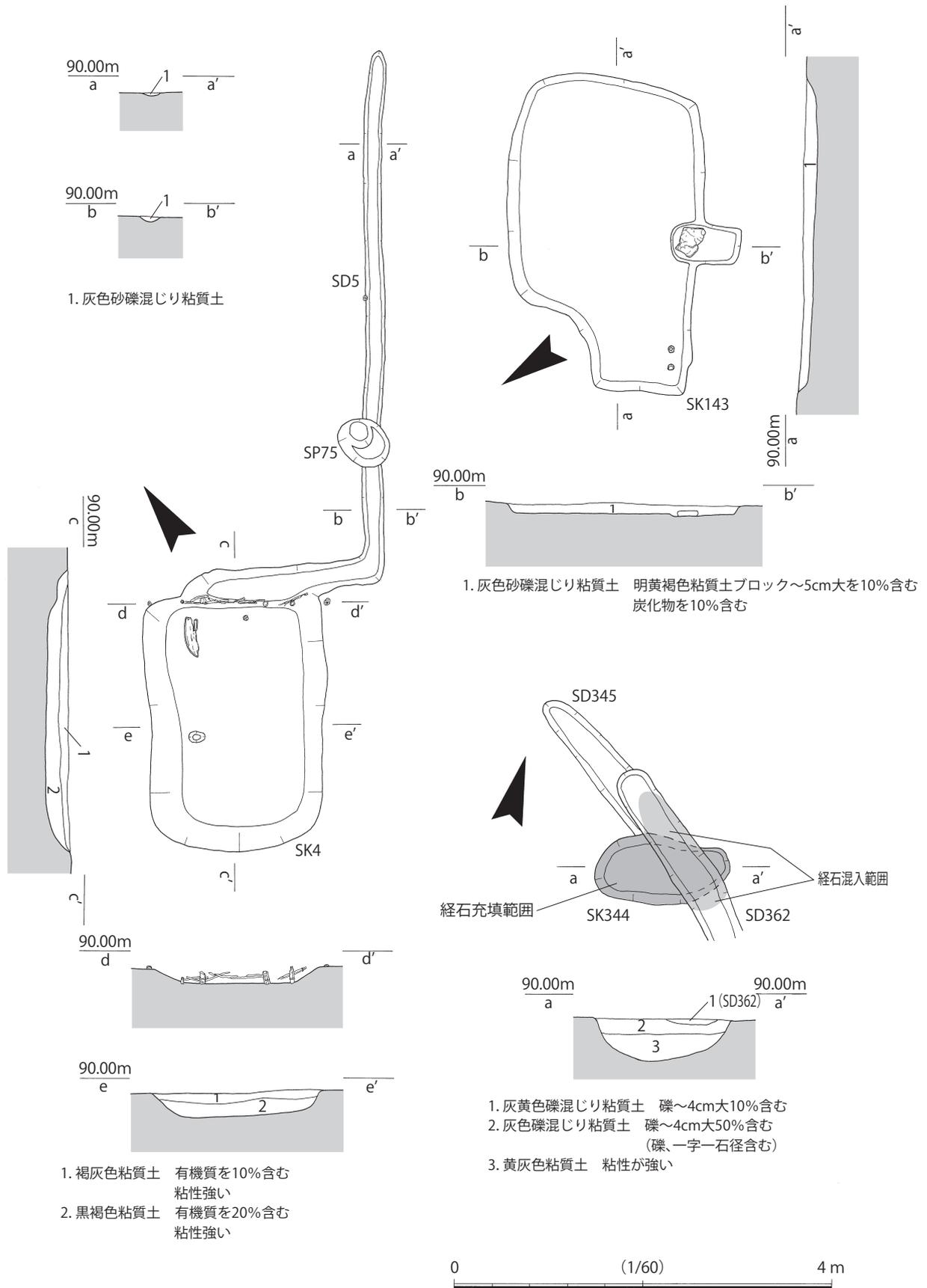


図9 各遺構 (SD5・SK4・SK143・SK344) 平面図・断面図

して形態は不明だが、直線的な口縁部の端部を丸く収めている。内外面ともヨコナデが施されている。越前の播鉢（45）は、口縁部片のため播目の条数などは不明である。

SP34（図12）

調査区北西側の耕作地付近で検出された小穴である。長径0.16m、短径0.15m、深さ0.05mの平面円形の小穴である。

出土遺物は漆器碗（46）で、体部から口縁部にかけての破片である。内外面黒色漆である。

SP56（図13）

SK4の南側で検出された小穴である。長径0.50m、短径0.32m、深さ0.21mの平面楕円形の小穴である。

出土遺物は土師器皿（48）で、内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収め平底である。内・外面とも不定方向のナデが施されている。

SP105（図13）

調査区北側の耕作地付近で検出された小穴である。長径0.21m、短径0.19m、深さ0.31mの平面円形の小穴である。

出土遺物は土師器皿（52～55）で、52は、内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収め平底である。内・外面とも不定方向のナデが施されている。53は、底部が欠損していて形態は不明だが、内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収める。内・外面とも不定方向のナデが施されている。54は底部が欠損していて形態は不明だが、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。内・外面ともヨコナデが施されている。55は、底部が欠損していて形態は不明だが、口縁部は内湾しながら立ち上がり端部で強く外反する。内・外面ともヨコナデが施されている。

SP220（図13）

屋敷地内、SB1の南東側で検出された小穴である。長径0.65m、短径0.57m、深さ0.20mの平面円形の小穴である。

出土遺物は土師器皿（72・73）で、いずれも底部が欠損していて形態は不明だが、内湾する口縁部の端部はそのまま丸く収める。内・外面とも不定方向のナデが施されている。

SP231（図14）

屋敷地内、SB1の南東側で検出された小穴である。長径0.41m、短径0.37m、深さ0.14mの平面円形の小穴である。

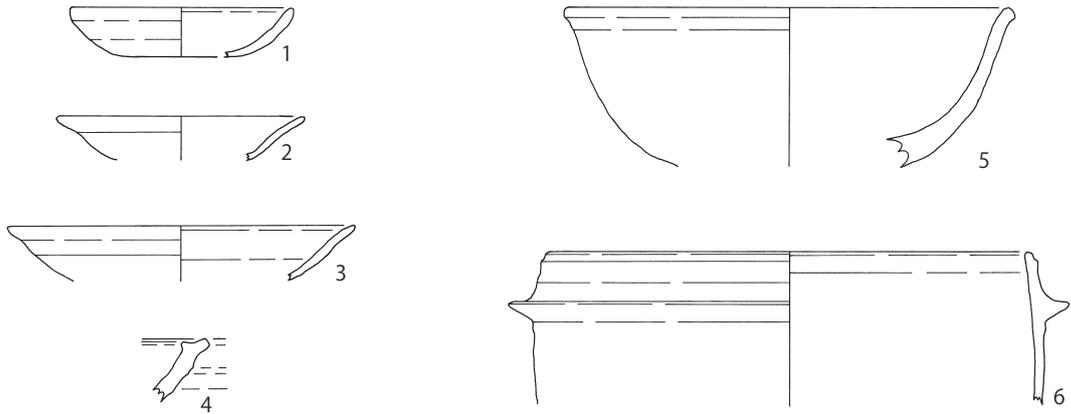
出土遺物は、木製品の建築部材（85）である。

SP239（図13）

SK241の西側で検出された小穴である。SK241を切っている。長径0.66m、短径0.48m、深さ0.32mの平面円形の小穴である。

出土遺物は土師器皿（75）で、底部が欠損していて形態は不明だが、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。内・外面ともヨコナデが施されている。

【SD 1】



【SD 2】

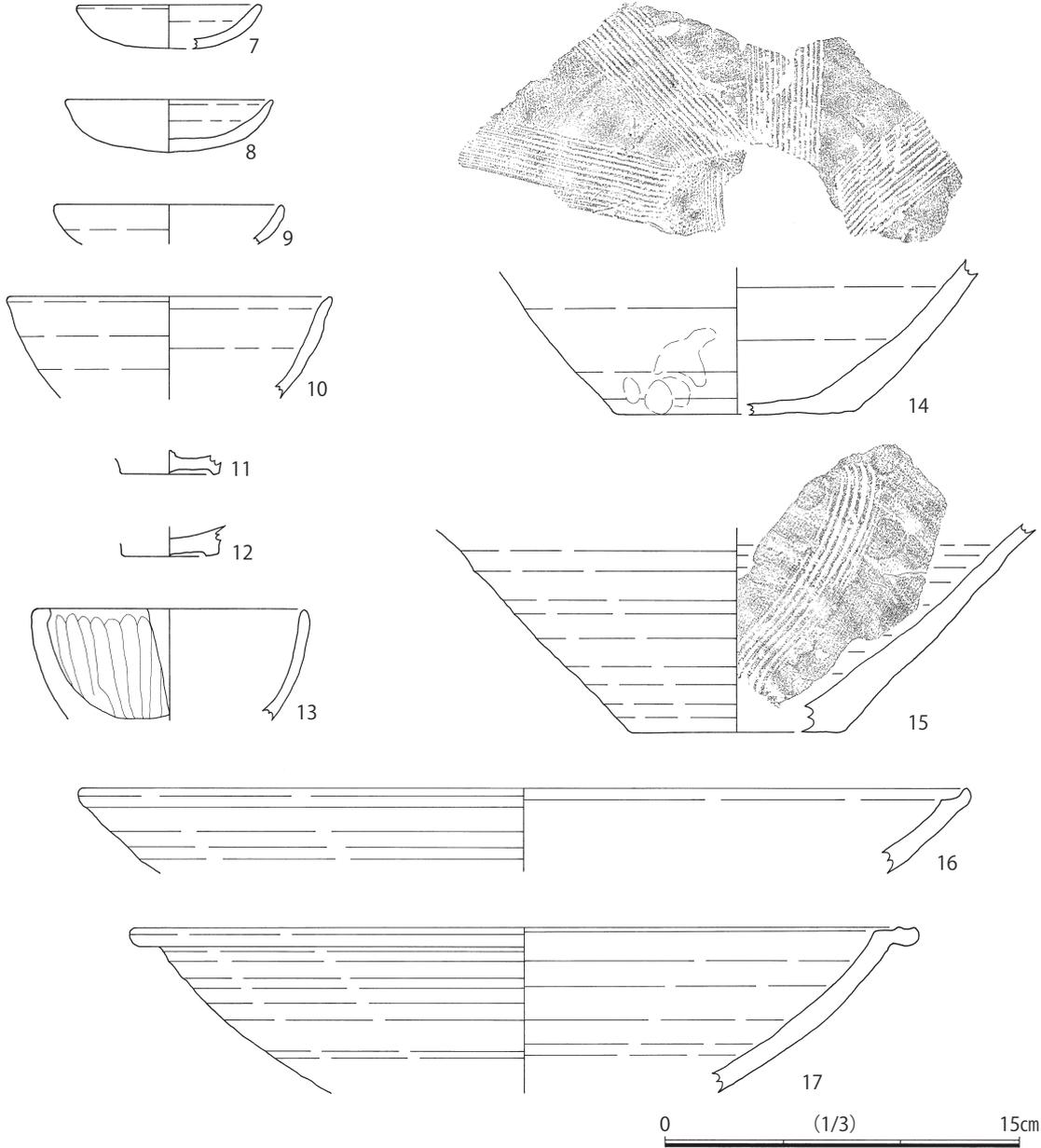


图10 出土遺物実測図（1）

【SD2】

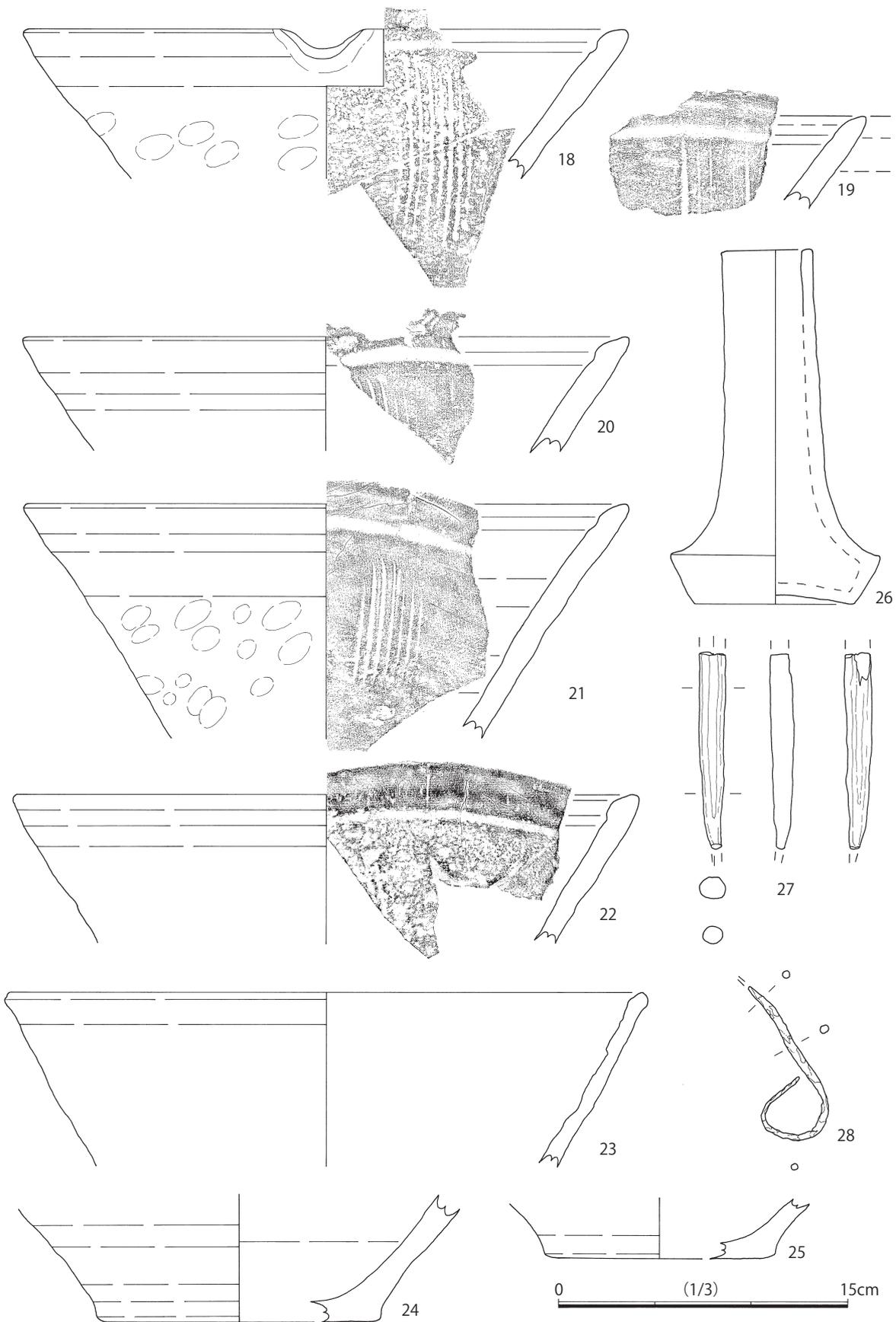
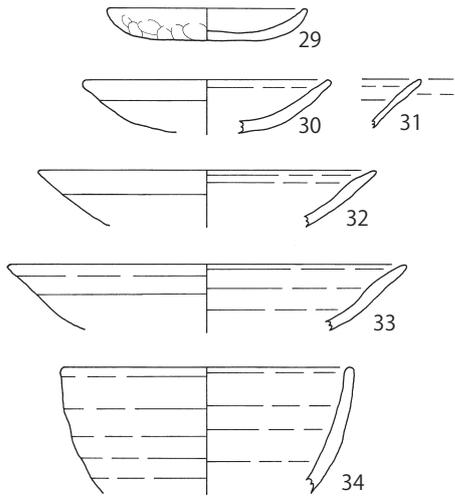
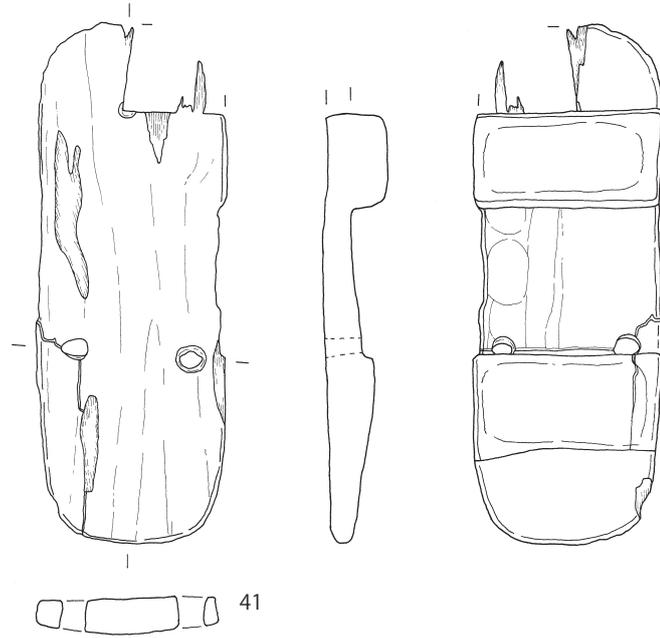


图11 出土遺物実測図(2)

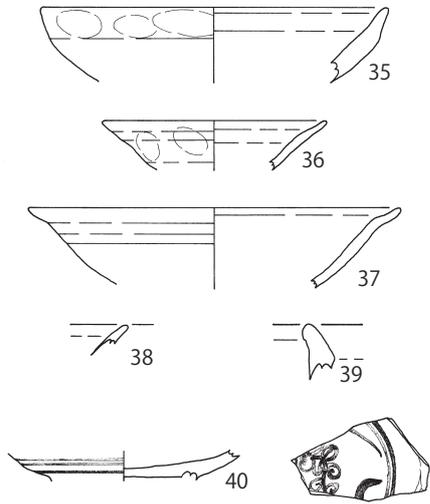
【SD 3】



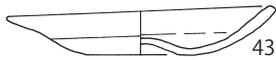
【SK 4】



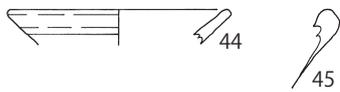
【SK 4】



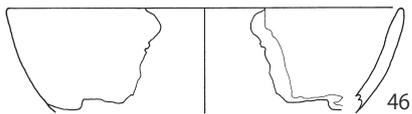
【SD 9】



【SP33】



【SP34】



【SP50】

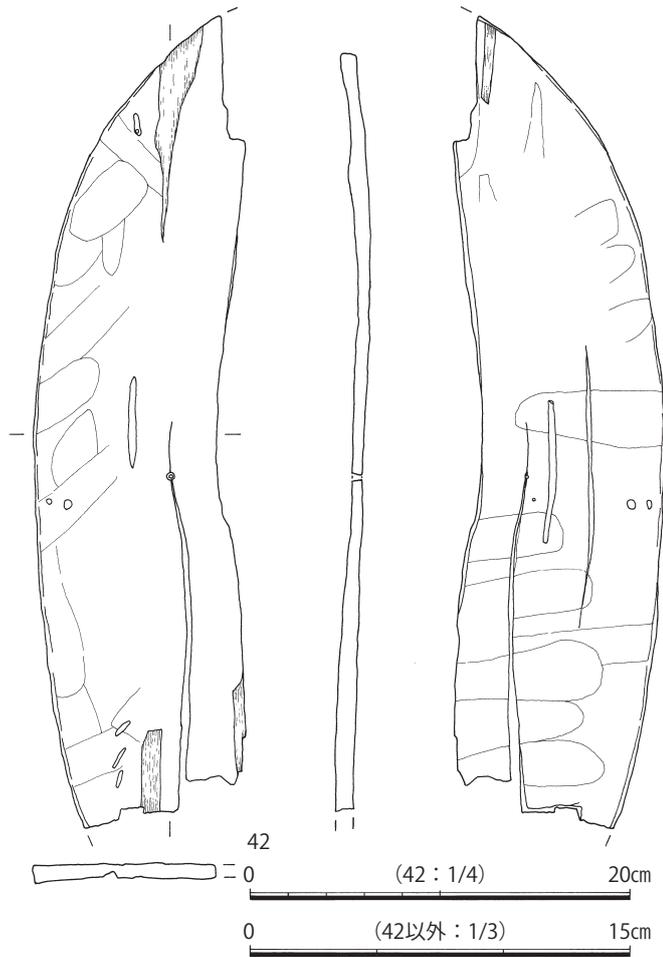
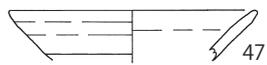


图12 出土遺物実測図(3)

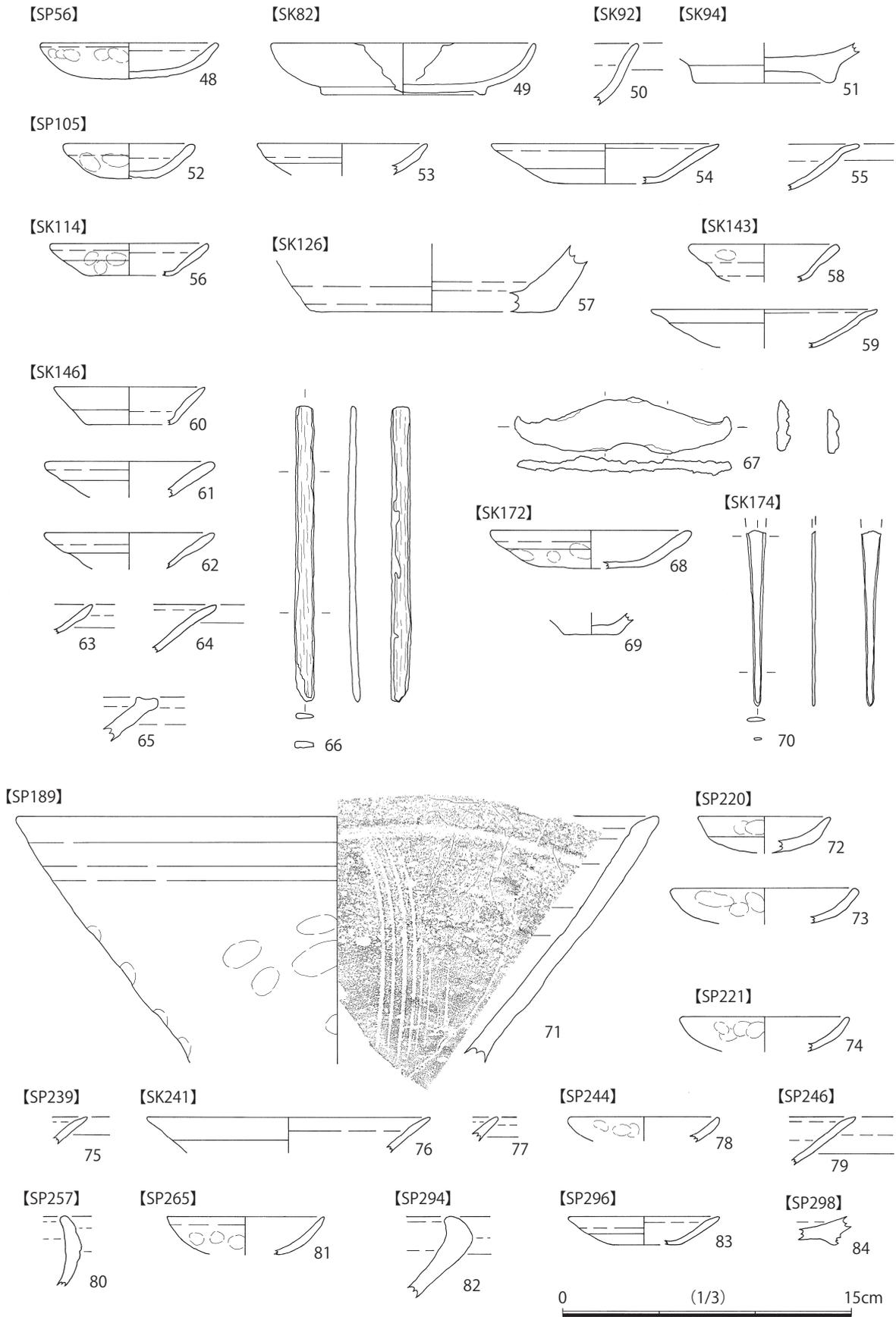
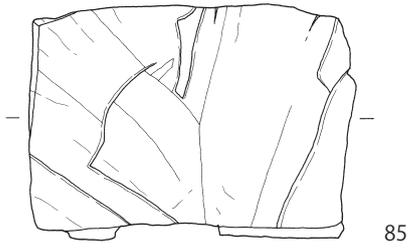
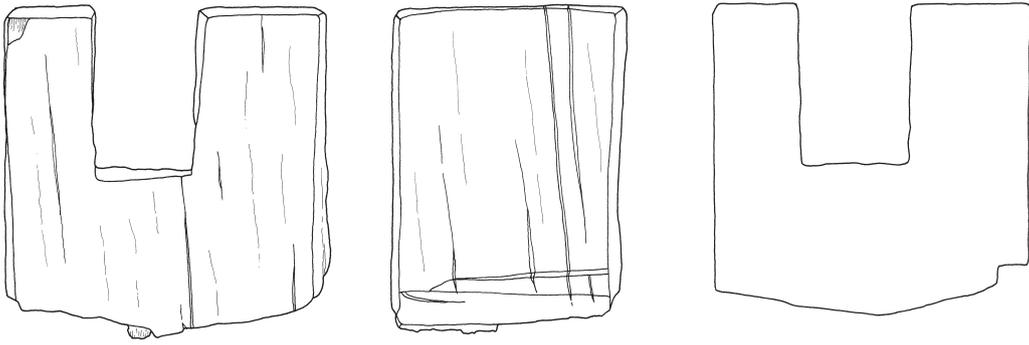


图13 出土遺物実測図（4）

【SP231】



【SE328】

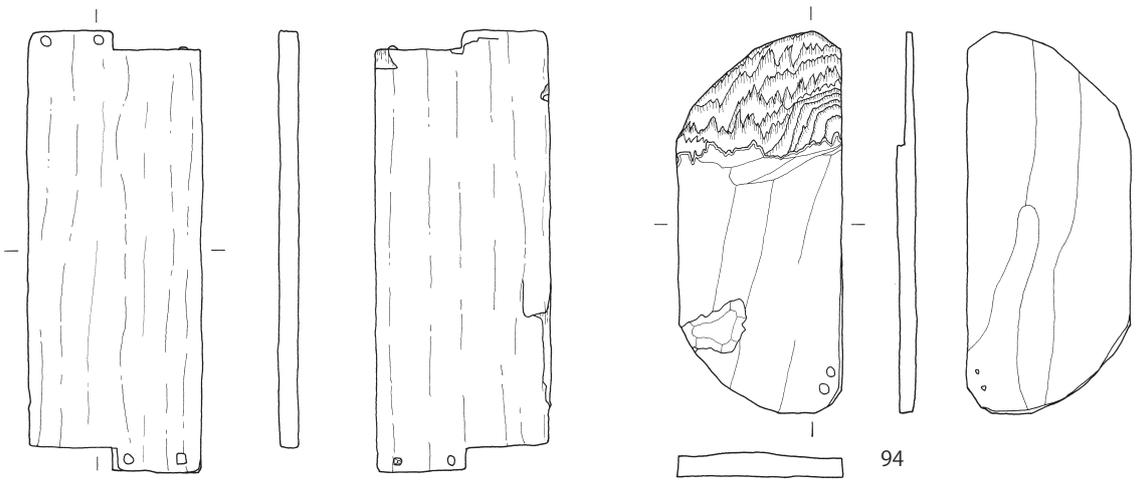
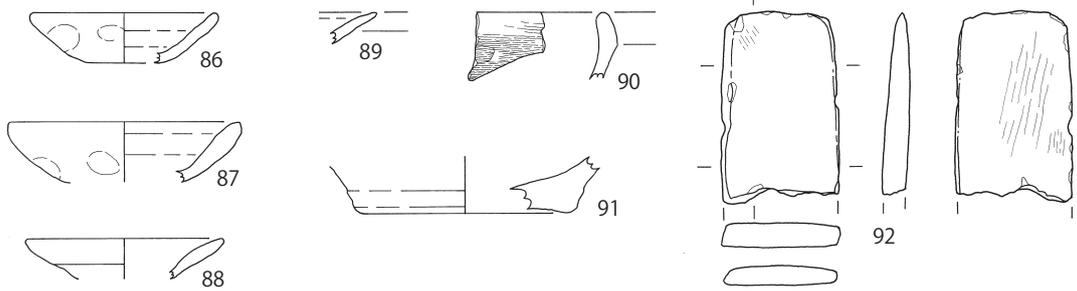


图14 出土遺物実測図 (5)

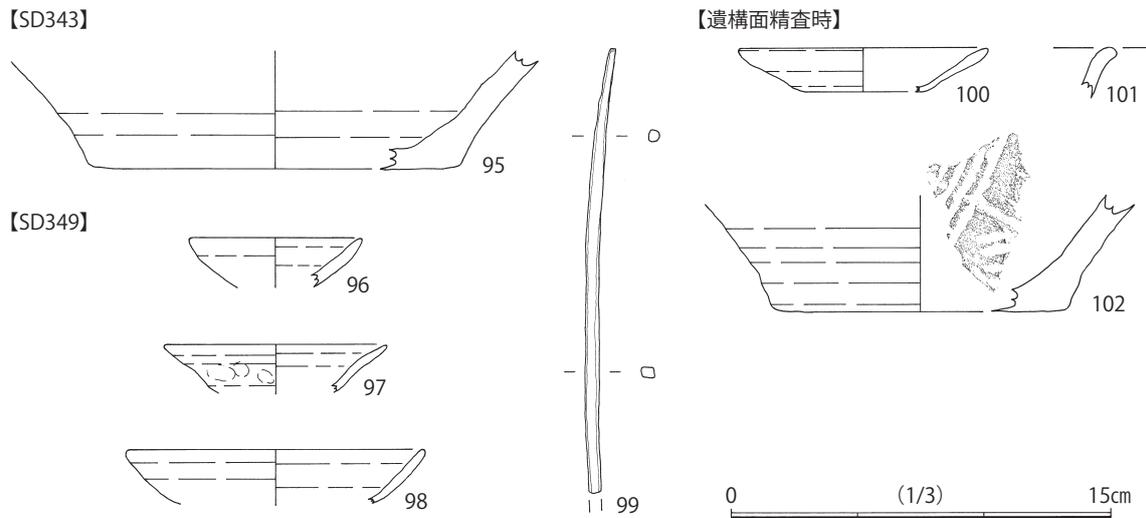


図15 出土遺物実測図(6)

SP246 (図13)

SK 4の北西側に隣接する位置で検出された小穴である。長径0.42m、短径0.38m、深さ0.13mの平面円形の小穴である。

出土遺物は土師器皿(79)で、底部が欠損していて形態は不明だが、直線的な口縁部の端部をシャープに収めている。内・外面ともヨコナデが施されている。

SP257 (図13)

屋敷地内、SB 1の東側で検出された小穴である。長径0.90m、短径0.55m、深さ0.61mの平面円形の小穴である。

出土遺物は土師質の焙烙(80)で、口縁部片である。外面ヨコナデ、内面ハケで成形されており、内外面ともに煤が付着する。

遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

SP294 (図13)

屋敷地内、SA 3の北東側で検出された小穴である。長径0.67m、短径0.41m、深さ0.03mの平面隅丸方形の小穴である。

出土遺物は土師質の焙烙(82)で、口縁部片である。内外面ヨコナデで成形されている。

遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

SP296 (図13)

屋敷地内、SA 3の北東側で検出された小穴である。長径0.35m、短径0.32m、深さ0.37mの平面円形の小穴である。

出土遺物は土師器皿(83)で、底部が欠損していて形態は不明だが、直線的な口縁部の端部を丸く収めている。内・外面ともヨコナデが施されている。

【SK344】

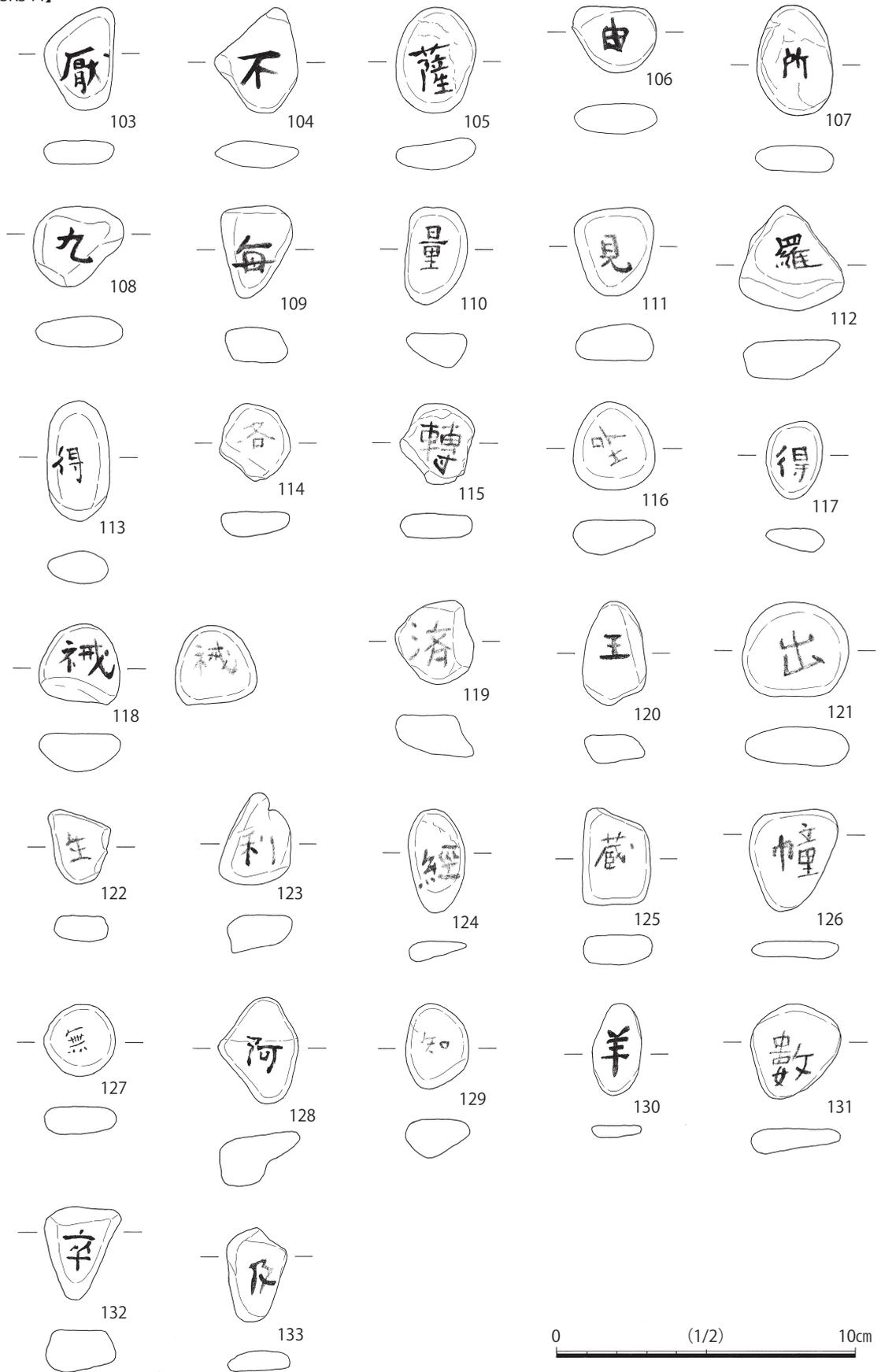


图16 出土遺物実測図（7）

SP298 (図13)

屋敷地内、SE328の南側で検出された小穴である。長径0.48m、短径0.38m、深さ0.31mの平面円形の小穴である。

出土遺物は山茶碗(84)で、底部片である。

(8) その他

遺構面精査時出土遺物(図15)

遺構面精査時に、土師器皿(100)、青磁碗(101)、越前の播鉢(102)が出土した。土師器皿(100)は、底部が欠損していて形態は不明だが、外反する口縁部の端部を丸く収めている。内・外面ともヨコナデが施されている。青磁の碗(101)は、口縁端部が外反する。釉調は緑灰色を呈する。越前の播鉢(102)は、底部片である。小片のため条数は不明である。

(9) 小結

調査区の南東側で屋敷地、北西側で耕作地をセットで検出した。屋敷地はコの字状に折れる2条の平行する区画溝SD2・3により区画されており、屋敷地内は、掘立柱建物SB1と井戸SE328、柵SA1・2・3などの諸施設で形成されている。区画溝・屋敷地内の掘立柱建物や柵の諸施設、耕作地に伴う素掘り溝などはいずれも犬上郡条里地割に軸を揃えていることより、これらは概ね同時期に機能していたと考える。その機能していた時期だが、一般的な出土遺物の状況より、15世紀後半から16世紀初頭と考える。ただし、耕作地に関しては、耕作に伴う素掘り溝と区画溝SD2・3との切り合い関係より、その機能した期間は屋敷地形成以前から屋敷地機能時、屋敷地廃絶後と継続して利用されていたと考える。なお、SD2・3は区画溝としての機能だけでなく、その一定の間隔によって形成された空間は、道として利用された可能性も指摘しておきたい。

参考文献

岡本直久 2005「山茶碗編年の現状について」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年」実行委員会

木戸雅寿 1989「近江における15～16世紀の土器について」『中近世土器の基礎研究』V日本中世土器研究会

田中照久・木村宏一郎 2005「越前窯」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年」実行委員会

畑中英二 2005「信楽における技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年」実行委員会

藤沢良祐 2005「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年」実行委員会

第3章 科学分析・同定の結果

第1節 SK146とSK174の土壌分析

(1) はじめに

一ツヤ遺跡第2次発掘調査では、15世紀後半～16世紀初頭の集落関連遺構として、屋敷地と耕作地がセットで検出された。ここでは、土坑の堆積物の分析を行い、土坑が便所遺構であるか等の遺構の性格および分析データから環境の解析を行う。

便所遺構などの糞便堆積の場合、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において特異性を示し、これらの特徴から他の堆積物と区別することができ、便所遺構を識別することができる。また、その遺体群集から今まで以上に食べた食物を直接的に探ることができ、環境も知ることができる。なお、本遺跡は、古墳時代から中世にかけての複合遺跡で、遺跡の所在する平田は犬上川と芹川の間位置する平野で、東部には独立丘陵である雨壺山が所在する。

(2) 試料

分析試料は、15世紀後半～16世紀初頭の集落関連遺構が検出され、屋敷地と耕作地がセットになっており、その屋敷地と耕作地それぞれで検出した土坑2基の堆積物が対象試料である。これらの土坑は0.9m四方の隅丸方形を示す。試料は以下の4点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。(図8)

- ・試料1 SK146 ②層
- ・試料2 〃 ⑤層
- ・試料3 SK174 ①層
- ・試料4 〃 ③層

(3) 寄生虫卵分析

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、便所遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができ便所遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。近年研究の始まった分析であり、研究歴はまだ浅く分析例も少ない。

1. 方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を実施

- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置（2・3度混和）
- 5) 水洗後サンプルを2分
- 6) 2分したサンプルの一方にアセトリシス処理を実施
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
- 8) 検鏡

各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。

2. 結果

出現した寄生虫卵は2分類群であった。これらの学名と和名および粒数を表2に示し、1cm²中の寄生虫卵数を示す。出現した分類群は顕微鏡写真に示す。以下に出現した寄生虫卵の特徴を示す。

①回虫 *Ascaris (lumbricoides)*

比較的大きな虫卵で、およそ80×60μmあり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。回虫は世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。

②鞭虫 *Trichuris (trichiura)*

卵の大きさは、50×30μmでレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。鞭虫は世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。糞便とともに外界に出た虫卵は、3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

3. 寄生虫卵群集の特徴

1) SK146：②層、⑤層（図17）

⑤層から回虫卵と鞭虫卵、②層からは回虫卵がわずかに検出された。明らかな消化残渣は検出されなかった。

2) SK174：①層、③層（図18）

③層から鞭虫卵がわずかに検出されたが、①層からは検出されなかった。明らかな消化残渣も検出されなかった。

(4) 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試み

られている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

1. 方法

寄生虫卵分析の試料処理において2分し、アセトリシス処理を施した沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製し、検鏡・計数を行った。

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

2. 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉18、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉22、シダ植物孢子2形態の計44である。これらの学名と和名および粒数を表2に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図17、18に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、スベリヒユ属、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、キカシグサ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、キュウリ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

それぞれの地点ごとに花粉構成と花粉組成の特徴を記載する。

① SK146：②層、⑤層（図17）

花粉構成、組成とも類似した出現傾向を示す。草本花粉の占める割合が高く、66%から68%を占める。草本花粉のイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、カヤツリグサ科が伴われる。アブラナ科、ヨモギ属、ナデシコ科、タンポポ亜科などが低率に出現し、⑤層ではソバ属がみられる。樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科も比較的多い。樹木花粉では、スギ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、ハンノキ属、マツ属単維管束亜属などが出現する。

② SK174：①層、③層（図18）

花粉構成、組成とも類似した出現傾向を示し、草本花粉の占める割合が高く、草本花粉が68%から75%を占める。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が卓越し、イネ属型の割合も高い。他にカヤツリグサ科、タンポポ亜科、アブラナ科、ヨモギ属などが低率に出現し、①層では、キュウリ属が特徴的に出現する。樹木花粉では、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、スギなどが出現し、樹木・草本花粉では、クワ科－イラクサ科が出現する。

（5）種実同定

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

1. 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

- 1) 試料200cm³に水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

2. 結果

1) 分類群

草本18分類群が同定された。学名、和名および粒数を表3に示し、200cm³中の種実数を図19、20に示す。主要な分類群を顕微鏡写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔草本〕

イバラモ属 *Najas* 種子（完形・破片） イバラモ科 長さ×幅：2.13mm×0.59mm

黄褐色～灰褐色で長楕円形を呈す。表面には大きい網目模様がある。

イネ *Oryza sativa* L. 穎（破片）・果実（破片） イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実（完形・破片） カヤツリグサ科 長さ×幅：2.10mm×1.73mm

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実 長さ×幅：1.19mm×0.52mm

黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms Laub. 種子 ミズアオイ科
長さ×幅：1.09mm×0.57mm

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に7～9本程度の隆起があり、その間を横方向の密な隆線が走る。

タデ属 *Polygonum* 果実（完形・破片） タデ科 長さ×幅：2.13mm×1.16mm

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

タデ属サナエタデ節 *Polygonum* sect. *Persicaria* 果実 タデ科 長さ×幅：2.34mm×1.86mm

黒褐色で頂端が尖る広卵形を呈す。表面は滑らかで光沢があり、断面は扁平で中央がややくぼむ。

ギシギシ属 *Rumex* 果実 タデ科 長さ×幅：4.31mm×2.03mm

茶褐色で頂端が尖る卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。翼状の花被の残るものもある。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科 長さ×幅：1.33mm×1.41mm

黒色で光沢があり円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子（完形・破片） ヒユ科 長さ×幅：1.20mm×1.24mm

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、へそがある。断面は両凸レンズ形である。

ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子（完形・破片） 長さ×幅：1.30mm×1.35mm、0.97mm×1.05mm

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

タガラシ *Ranunculus scleratus* L. 果実 キンポウゲ科 長さ×幅：1.02mm×1.23mm

黄褐色、扁平、ややレンズ状。側面にしわはないが、滑らかではない。

キジムシロ属 *Potentill* 種子 バラ科 長さ×幅：1.86mm×1.36mm

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 (完形・破片) カタバミ科 長さ×幅：1.57mm×1.11mm

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。

チドメグサ属 *Hydrocotyle* 果実 セリ科 長さ×幅：1.14mm×0.87mm

黄褐色～赤褐色で半円形を呈す。隆条は細い線条状をなし、背面、側面、縁にそれぞれみられる。

アブラナ科 *Cruciferae* 種子 長さ×幅：1.10mm×0.74mm

茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には長方形の網目がある。

エゴマ *Perilla frutescens* var. *japonica* Hara 果実 (完形・破片) シソ科 長さ×幅：1.47mm×1.32mm

黒褐色～灰褐色で球形を呈し、下端はわずかに突出する。表面に大きい網目模様がある。径2.2～2.4mm。径2.2mm以上をエゴマとし、2.0mm以下をシソ属とした。

シャジクモ属 *Chara* 卵胞子 シャジクモ科 長さ×幅：0.52mm×0.32mm

黒色で楕円形を呈す。断面は円形で、表面は右下がりの螺旋状の隆起がある。

2) 種実群集の特徴

① SK146：②層、⑤層 (図19)

⑤層では、草本種実のナデシコ科108が多く、次にカタバミ属21、イネ類11、カヤツリグサ科4、コナギ2、ヒユ属2、エゴマ2、シャジクモ属2、タデ属1、タデ属サナエタデ節1、ギシギシ属1、アカザ属1、チドメグサ属1が検出された。②層では、草本種実のナデシコ科36が多く次にコナギ11、カタバミ属5、イバラモ属2、イネ類1、炭化果実1、ホタルイ属2、カヤツリグサ科2、ヒユ属2、チドメグサ属2、タデ属1、タガラシ1、シャジクモ属1が検出された。

② SK174：①層、③層 (図20)

③層では、草本種実のナデシコ科36、カタバミ属36が多く、次にコナギ14、イバラモ属11、アブラナ科2、エゴマ2、シャジクモ属2、ホタルイ属1が検出された。①層では、草本種実のナデシコ科42が多く、次にイバラモ属13、カヤツリグサ科3、コナギ2、アブラナ科2、シャジクモ属2、キジムシロ属1、カタバミ属1、チドメグサ属1が検出された。

(6) 考察

1. 遺構の環境、性格

SK146の②層、⑤層およびSK174の①層、③層から回虫卵、鞭虫卵が検出されたが、いずれも生活汚染程度の密度であり消化残渣も検出されなかった。回虫卵、鞭虫卵ともに中間宿主を必要とせず、寄生虫は汚染された生水、野草、生野菜などから蔓延する。堆積地周辺に人がある程度密集して居住していたか、人糞施肥などの影響が考えられる。花粉群集は草本のイネ科やカヤツリグサ科の雑草類となる風媒花植物が多い。樹木ではスギ、ハンノキ属、

コナラ属コナラ亜属、樹木と草本を含む分類群ではクワ科－イラクサ科が多く、いずれも風媒花植物である。食用になる植物としては全体にアブラナ科がやや多く、SK174ではイネ属型がやや多い。SK146⑤層ではソバ属、SK174①層ではキュウリ属が検出されるが、花粉構成および組成全体の中では小さい要素である。種実群集では、各試料ともナデシコ科、カタバミ属が多く、いずれも人里の雑草であり、他にコナギやイバラモ属の水生草本が検出される。食物に関連する種実としては、SK146からイネ（穎）、エゴマ、SK174からエゴマが検出される。また、種実ではコナギ、花粉ではミズアオイ属が検出され、古代では野菜として食される。

図21に試料となった堆積物の粒度組成、有機物含有量、微細有機遺体含有量をまとめ示した。有機物含有量は多い試料で約15%程度であり、試料となった堆積物は鉱物等の無機質の粒子で構成される。粒度組成では、泥（シルト・粘土）を主とする堆積物であり、各遺体は残存し保存もよく水成の堆積物である。

糞便の内容を示す寄生虫卵、食用となる花粉や種実は含まれているが少ない。寄生虫卵は汚染の範囲であり、食用となる花粉や種実も周囲からもたらされたともみなすのが妥当と考えられる。

なお、SK146、SK174からはコナギ、イバラモ属、シャジクモ属の水生植物の種実ないし卵孢子が検出されており、土坑にはこれら水生草本が生育していた。したがって、試料である堆積物が堆積した時期は水が溜まる土坑であったと推定される。なお、土坑146にはイネ穎が検出され、土坑174からはイネ属型花粉が多く、周囲での農耕を反映しているとみなされる。

2. 周囲の堆積環境

SK146では、イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、ナデシコ科、ヨモギ属、タンポポ亜科の草本花粉が多い。また、花粉では反映されにくい虫媒花植物のナデシコ科やカタバミ属の草本の種実が多く検出されている。いずれもやや乾燥した人為環境に生育することから、周囲はこれらの草本が生育するやや乾燥した環境であった。なお、アブラナ科のほかに少ないがソバ属が検出されており、周囲で畑作が行われていたと推定される。

SK174も花粉、種実の双方とも類似した内容であり、SK146とほぼ同じ植生と環境の分布が推定される。イネ属型が多く、上部の①層でキュウリ属の花粉が検出されることから、近隣に水田や畑の分布が示唆され、またその影響を受けて堆積したと考えられる。周辺には樹木は少なく、やや遠方にスギやコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属が主に分布していた。なお、各試料でやや多いクワ科－イラクサ科は樹木と草本が含まれるが、カナムグラやイラクサなどの人里に多い草本が考えられる。

(7) まとめ

一ツヤ遺跡で検出されたSK146とSK174の2基の土坑の堆積物について寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定を行い、堆積物の構成と組成から試料となった堆積物の形成要因と環境を検討した。その結果、これら土坑は滞水し、水生植物が生育し、周囲から入り込んだ細粒堆積物によって生成された。寄生虫卵は汚染の範囲で糞便堆積が直接的に堆積した様相はなかった。植生としては周辺に水田や畑が分布し、土坑の周囲は草本の生育するやや乾燥した環境であった。

参考文献

- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Jounal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.
- 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物. *医動物学*, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊一, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.
- 金原正明 (1999) 寄生虫. *考古学と動物学*, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.
- 金原正明・福富恵津子・金原正子 (2005) 糞石の基礎的研究, 日本文化財科学会, 第22回, p.118-119.
- 中村純 (1967) 花粉分析. 古今書院, p.82-102.
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 鳥倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純 (1967) 花粉分析. 古今書院, p.82-102.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. *第四紀研究*, 13, p.187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. *考古学と自然科学*, 第10号, p.21-30.
- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.
- 笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.
- 土質工学会編 (1979) 土質試験法, p.2-5-1~2-5-23, 4-2-1~4-3-11.
- 金原正明・金原正子 (2013) 植生と農耕における土壌層分析の実証的研究, 日本文化財科学会第30回大会研究発表会要旨集, p.112-113.

(株式会社古環境研究所)

表2 一ツヤ遺跡第2次発掘調査における花粉分析・寄生虫卵分析結果

学名	分類群 和名	SK146		SK174	
		②層	⑤層	①層	③層
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Podocarpus</i>	マキ属				1
<i>Abies</i>	モミ属		1		
<i>Picea</i>	トウヒ属		1		
<i>Tsuga</i>	ツガ属		1		1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	4	5	1	6
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	19	21	9	5
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	4	1	2	2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	5	8	3	22
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	1	1	1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1	1		
<i>Castanea crenata</i>	クリ			1	
<i>Castanopsis</i>	シイ属	3	7	1	
<i>Fagus</i>	ブナ属			1	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	8	9	2	11
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	8	5	2	2
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1	2		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ			1	1
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		1	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	20	53	9	21
Leguminosae	マメ科		1		
Nonarboreal pollen	草本花粉				
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属		1		
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属		1	1	2
Gramineae	イネ科	87	164	41	89
<i>Oryza type</i>	イネ属型	10	12	32	32
Cyperaceae	カヤツリグサ科	27	67	19	16
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	1			1
<i>Polygonum</i>	タデ属		2		
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		2		1
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属		1		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2	4	1	1
<i>Portulaca oleracea</i>	スベリヒユ属				1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	6	6	6	5
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属		2		1
Cruciferae	アブラナ科	16	20	5	5
<i>Rotala</i>	キカシグサ属			1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1			1
Apiioideae	セリ亜科		4		1
<i>Plantago</i>	オオバコ属		1		5
<i>Cucumis</i>	キュウリ属			4	
Lactuoidaeae	タンポポ亜科	8	2	3	7
Asteroideae	キク亜科	1	4		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	8	6	1	4
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	6	7		2
Trilate type spore	三条溝胞子	6	15	4	4
Arboreal pollen	樹木花粉	54	65	26	54
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	20	54	9	21
Nonarboreal pollen	草本花粉	167	299	114	172
Total pollen	花粉総数	241	418	149	247
Pollen frequencies of 1 cm ³	試料 1 cm ³ 中の花粉密度	1.7 ×10 ³	8.7 ×10 ³	1.1 ×10 ³	1.8 ×10 ³
Unknown pollen	未同定花粉	4	7	4	3
Fern spore	シダ植物胞子	12	22	4	6
Helminth eggs	寄生虫卵				
<i>Ascaris (lumbricoides)</i>	回虫卵	1	1		
<i>Trichuris (trichiura)</i>	鞭虫卵		1		1
Total	計	1	2	0	1
Helminth eggs frequencies of 1 cm ³	試料 1 cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.7 ×10	1.4 ×10		0.7 ×10
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(< +)	(< +)

表3 一ツヤ遺跡第2次発掘調査における種実同定結果

学名	分類群	和名	部位	SK146		SK174	
				②層	⑤層	①層	③層
Herb		草本					
<i>Najas</i>		イバラモ属	種子 (破片)	2		8 5	6 5
<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	穎 (破片)	1	11		
<i>Scirpus</i>		ホタルイ属	炭化果実 (破片)	1	3		1
Cyperaceae		カヤツリグサ科	果実	1	1		
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl var. <i>plantaginea</i> Solms-Laub.		コナギ	種子	2	4	3	
<i>Polygonum</i>		タデ属	果実 (破片)	11	2	2	14
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	果実	1	1		
<i>Rumex</i>		ギシギシ属	果実		1		
<i>Chenopodium</i>		アカザ属	種子		1		
<i>Amaranthus</i>		ヒユ属	種子 (破片)	1	2		
Caryophyllaceae		ナデシコ科	種子 (破片)	28 8	97 11	22 20	29 7
<i>Ranunculus scleratus</i> L.		タガラシ	果実	1			
<i>Potentilla</i>		キジムシロ属	種子			1	
<i>Oxalis</i>		カタバミ属	種子 (破片)	5	16		3
<i>Hydrocotyle</i>		チドメグサ属	果実	2	5	1	33
Cruciferae		アブラナ科	種子		1	1	
<i>Perilla frutescens</i> var. <i>japonica</i> Hara		エゴマ	果実 (破片)	1	1	2	2
<i>Chara</i>		シャジクモ属	卵胞子	1	2	2	2
Total		合計		67	161	67	104

(200cm³中0.25mm篩)

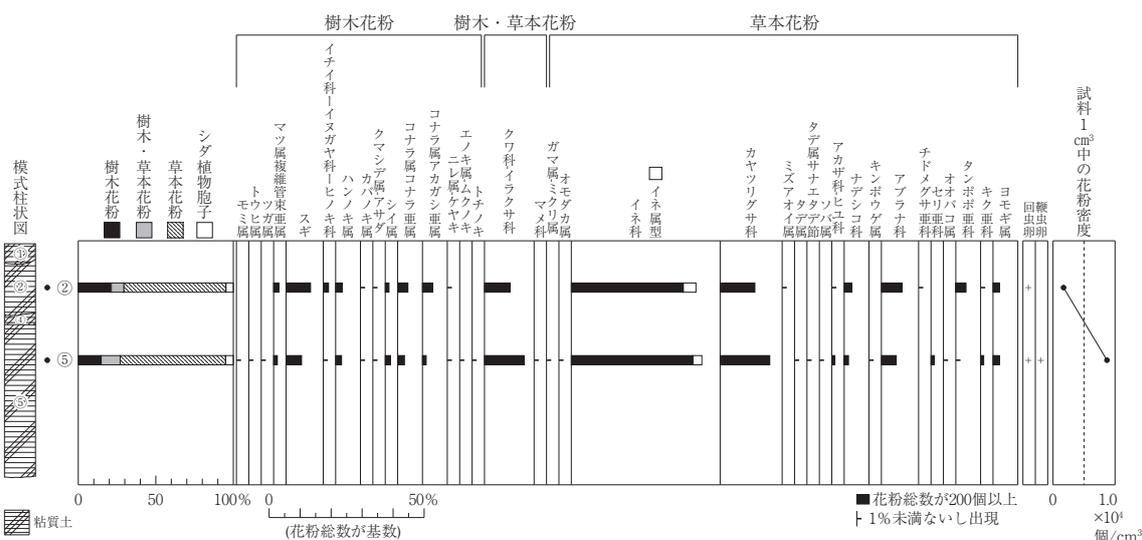


図17 一ツヤ遺跡第2次発掘調査：SK146における花粉・寄生虫卵ダイアグラム

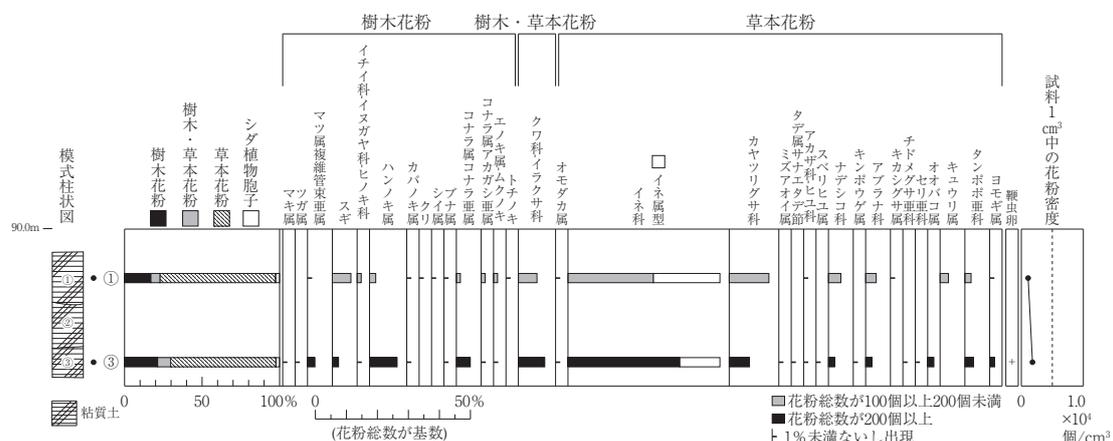


図18 一ツヤ遺跡第2次発掘調査：SK174における花粉・寄生虫卵ダイアグラム

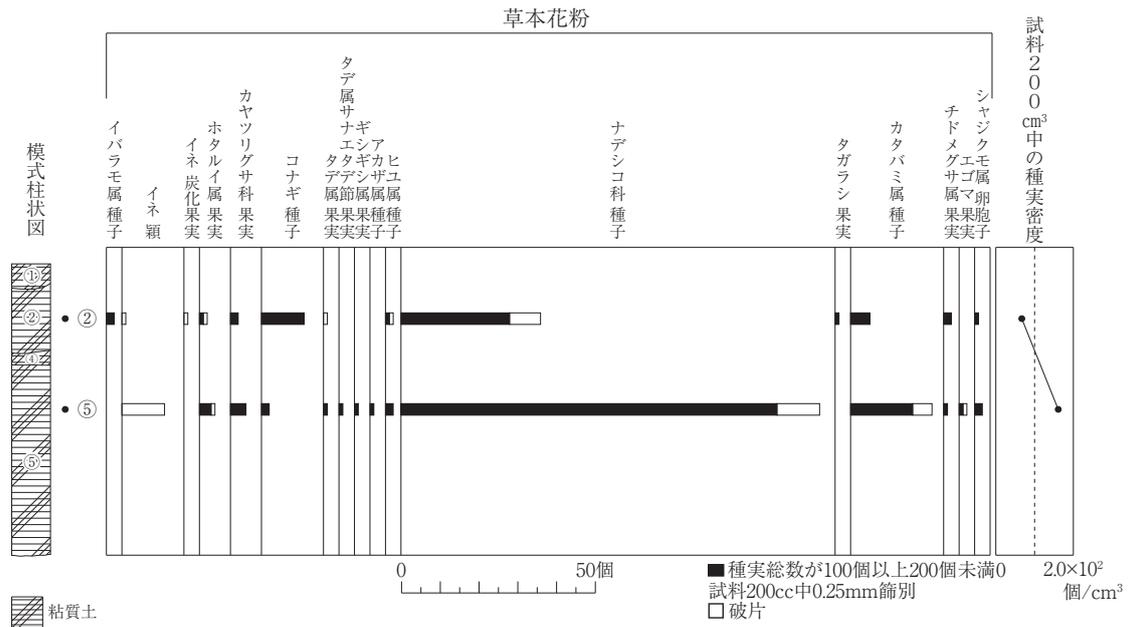


図19 一ツヤ遺跡第2次発掘調査：SK146における種実ダイアグラム

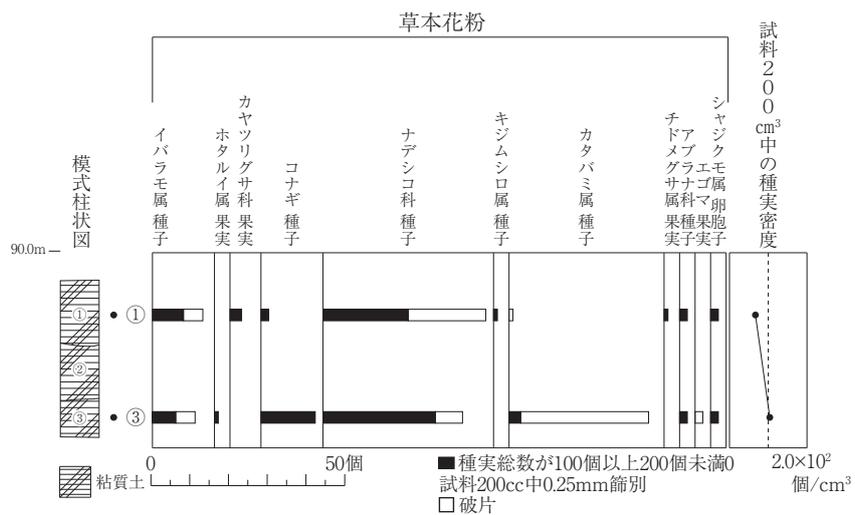
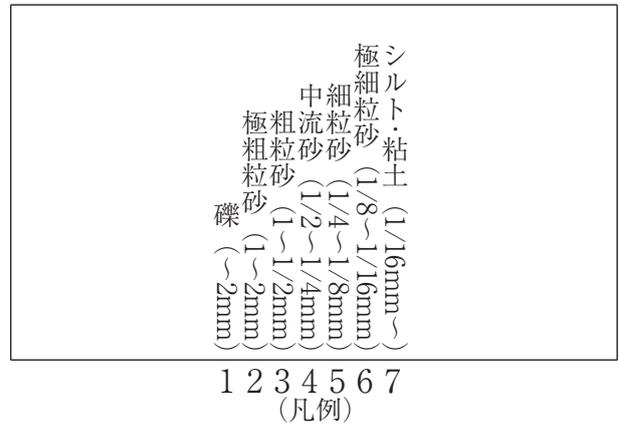
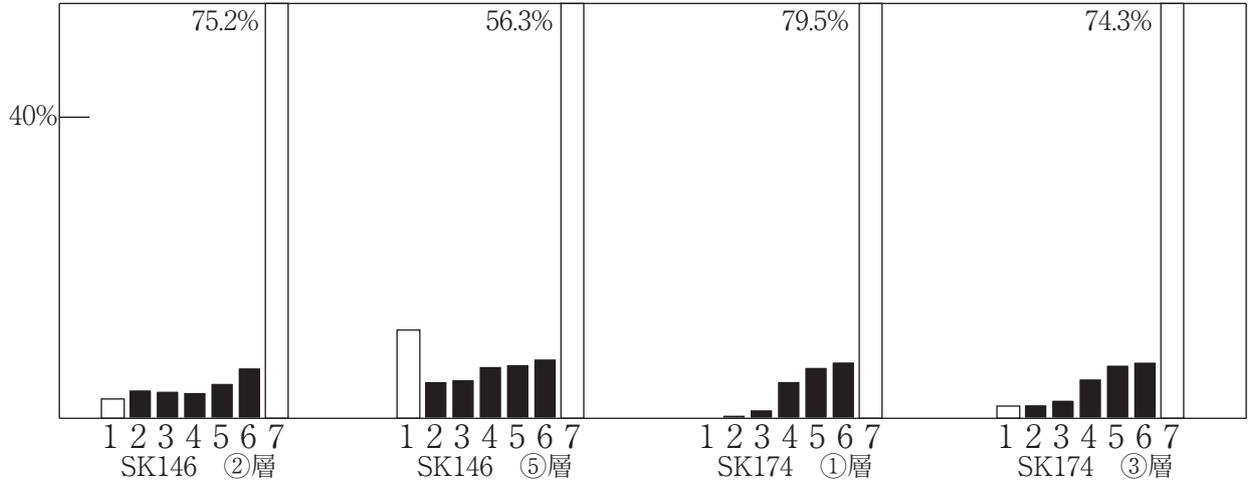


図20 一ツヤ遺跡第2次発掘調査：SK174における種実ダイアグラム

(1) 粒度組成

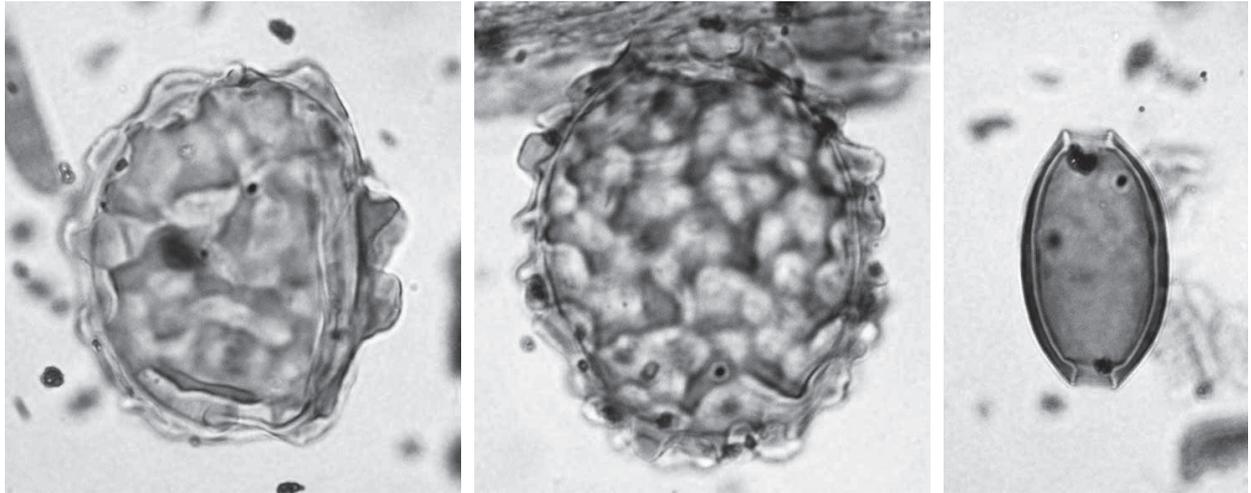


(2) 有機遺体の含有量

試料	有機物含有量 (%)	微細植物遺体片 ($\times 10^5$ grains/cm ³)		花粉 ($\times 10^4$ grains/cm ³)	種実 ($\times 10^2$ grains/100cm ³)	寄生虫卵
		炭片および分解質	未分解			
SK146 ②層	~1	~5	~1	~1	~1	(+)
SK146 ⑤層	~1	~10	~6	~1	~1	(+)
SK174 ①層	~5	~8	~1	~1	~1	(-)
SK174 ③層	~15	~8	~1	~1	~1	(+)

図21 粒度組成、有機物、有機遺体含有量

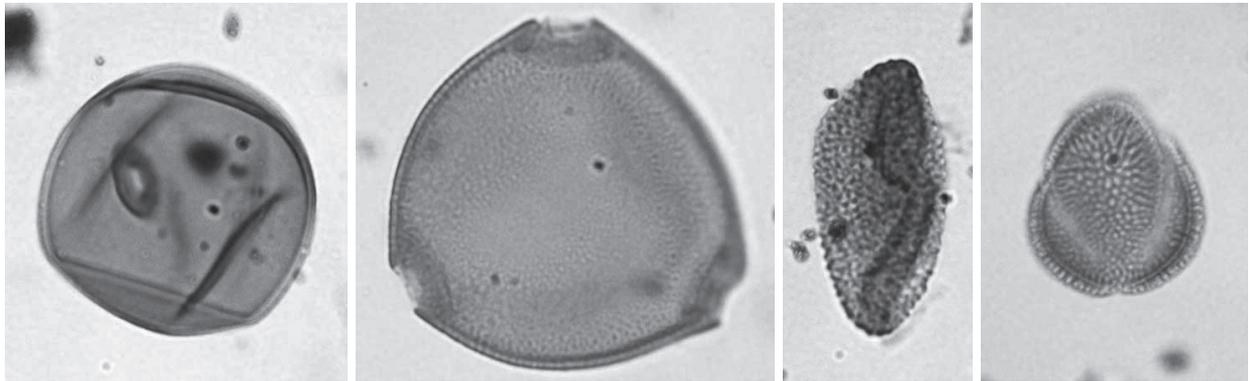
写真2 ツツヤ遺跡第2次発掘調査の寄生虫卵・花粉



1 回虫卵 (SK146⑤)

2 回虫卵 (SK146②)

3 鞭虫卵 (SK174③)

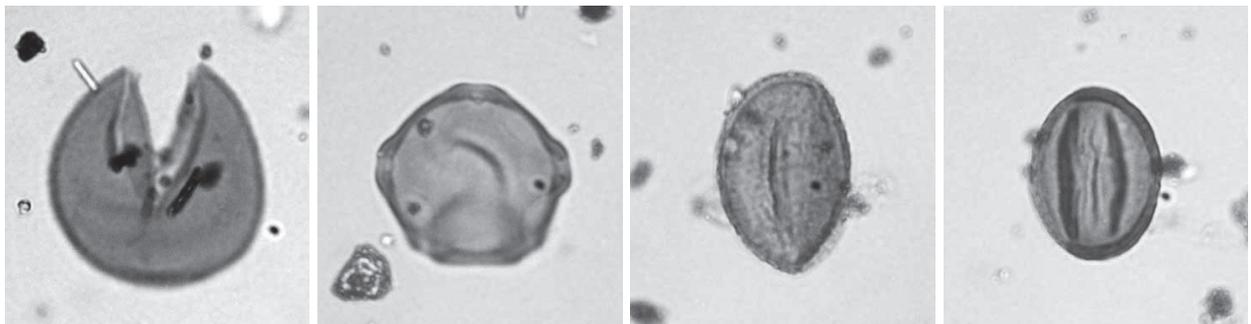


4 イネ属型 (SK174①)

5 キュウリ属 (SK174①)

6 ソバ属 (SK146⑤)

7 アブラナ科 (SK174③)



8 スギ (SK174①)

9 ハンノキ属 (SK174③)

10 コナラ属コナラ亜属 (SK174③)

11 コナラ属アカガシ亜属 (SK174③)



12 クワ科-ラクサ科 (SK174③)

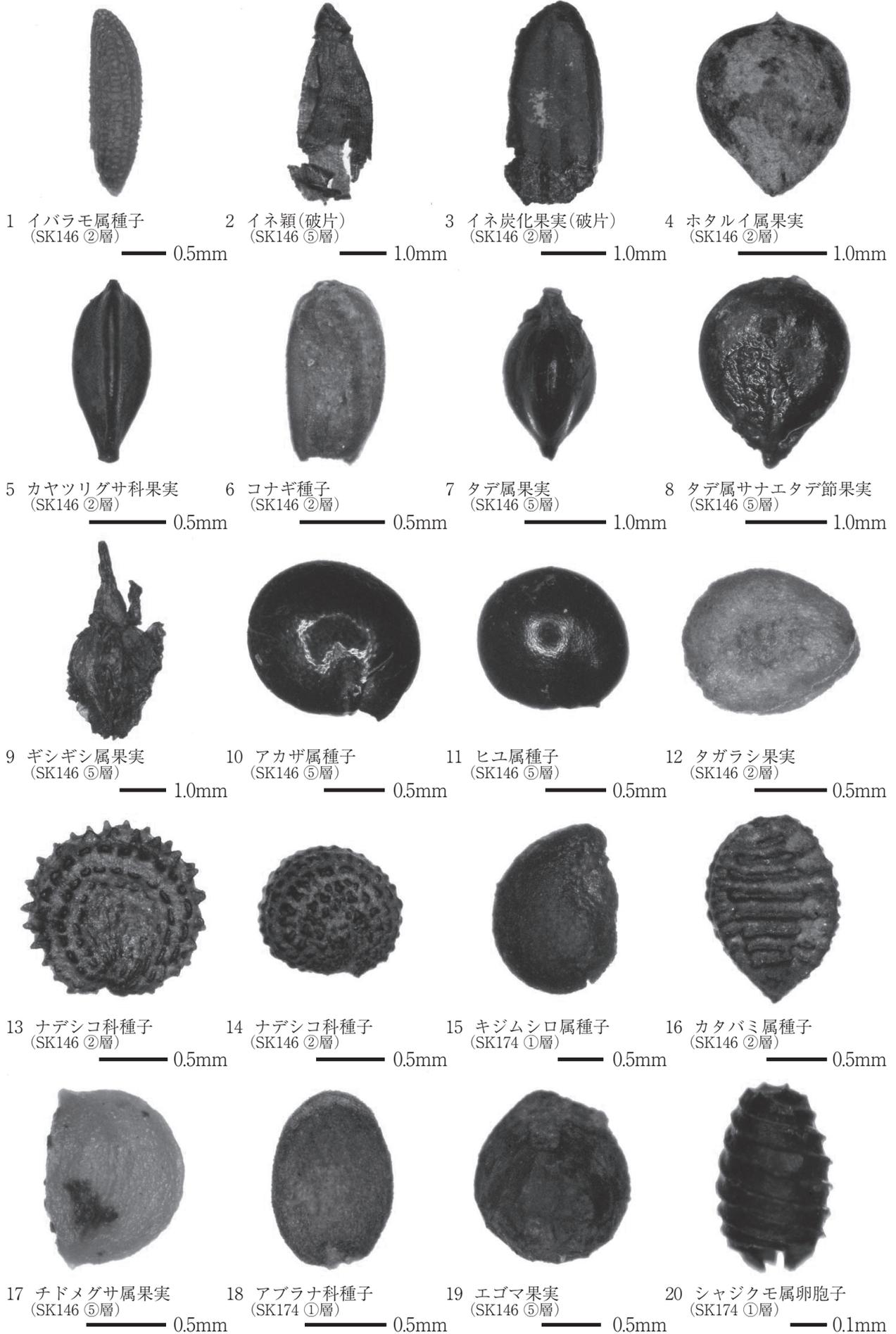
13 カヤツリグサ科 (SK146②)

14 ミズアオイ属 (SK174③)

15 タンポポ亜科 (SK146②)

— 10 μm

写真3 一ツヤ遺跡第2次発掘調査の種実



第4章 総括

第1節 一ツヤ遺跡における中世集落

報告の章で述べたように、今回の調査では15世紀後半から16世紀初頭にわたる集落関連遺構を確認した。2条の区画溝で形成された屋敷地と耕作地をセットで検出し、屋敷地内は掘立柱建物と柵、井戸などで構成されており、それらはいずれも犬上群条里に軸をそろえている状況が確認された。ここでは県内の中世集落の変遷・様相と比較しながら、今回の調査成果について若干の検討を行いたい。

(1) 近江の中世集落の変遷

ここでは、先学によりながら、近江の中世集落の変遷・概要とともに調査事例について簡単に触れたい。(木戸1992・1994)

近江の中世集落の変遷は大きく3つの画期に分かれるとされる。

- ①一つ目は、11世紀末から12世紀初頭で、この頃集落の数は飛躍的に増加する。古代から続く条里地割の制約を受けつつ、条里地割の溝と小さな溝で各屋敷地と耕作地の境界を画するようになる。これらは土地の所有関係を明示するために掘られたと考えられる。
- ②二つ目は、13世紀後半から14世紀前半で、この頃屋敷地の境界がよりはっきり明示されるようになり、幅が広く深い溝・堀で集落内を区画していくようになる。また、集落は方形や長方形で区画された屋敷地の集合体で形成されるようになるが、街区や道はないとされる。
- ③三つ目は、15世紀末から16世紀前半で、溝や堀、井戸などに石積みが見られるようになる。また溝や堀による集落の区画は道を伴った長方形街区のような整然とした区画を持つようになる。

(2) 彦根の中世集落の様相

①国領遺跡(田附町)

市内の最南端、愛知川右岸の田附町に位置する遺跡で、平成15年度に滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し、11世紀から12世紀にわたる中世集落の存在を明らかにした。検出遺構は、本線・支線に機能分けされた溝などで、建物遺構は検出されていない。黒色土器が出土しており、中世に近畿地方で主流を占める黒色土器文化圏の北限地に相当すると考えられる。また、15世紀中期以降の製作と考えられる妙法蓮華経の柿経の出土も注目される。(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会2006)。

②八坂東遺跡(八坂町)

犬上川河口左岸八坂町に位置する遺跡で、平成14・15年度に滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査実施し、12世紀前半から13世紀前半にわたる中世集落の存在を明らかにした。検出遺構は区画溝や掘立柱建物、井戸などである。溝による方形区画とともに、

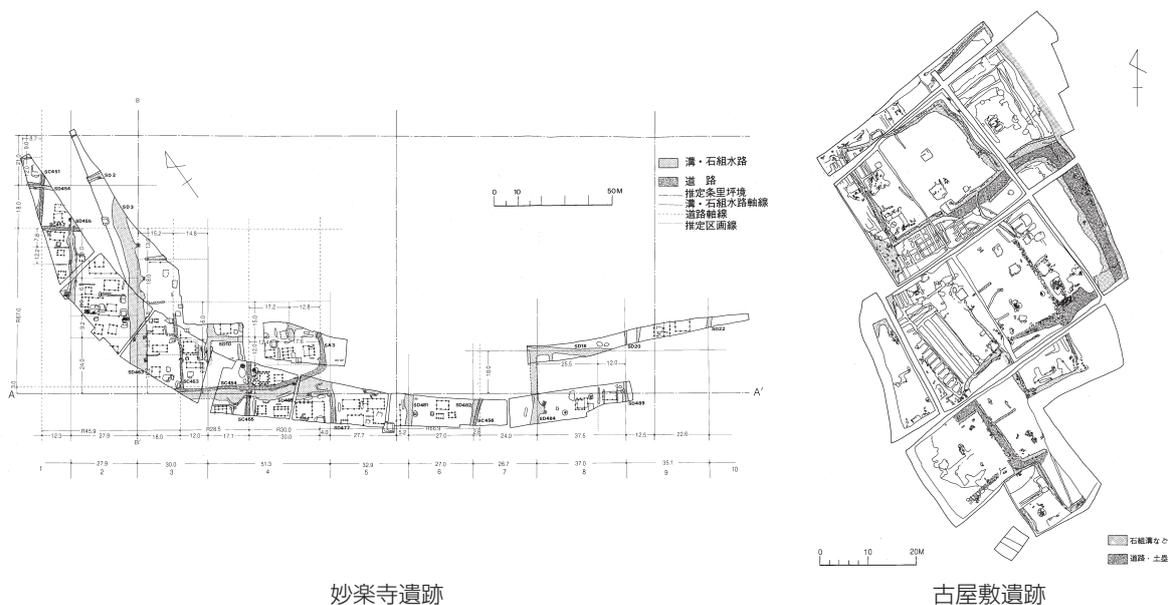
その区画ごとに各遺構の分布が異なっていることより、集落は計画的に営まれていたと考えられる。出土遺物に山茶碗が含まれており、東海地方の山茶碗文化圏の最南端地域と考えられる。また、土錘の出土量も多く、これは当集落が単に農業だけでなく、漁業も主な生業であったことを示している。(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会2006)。

③妙楽寺遺跡 (日夏町)

荒神山の北東山麓を流れる宇曾川右岸の日夏町に位置する遺跡で、昭和62年度に滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し、12世紀から16世紀にかけての3期にわたる中世集落の存在を明らかにした。12世紀後半から14世紀には南部に3ヵ所の屋敷地しかない小さな集落であった。15世紀になると条里の坪境に面して間口の狭い短冊形の屋敷地が多数形成され、それらが連なり長方形の街区を形成し、水路には各屋敷地毎に石の階段が造られ、水運が発達した川港の町であった。出土遺物には多数の貿易陶磁や茶道具が含まれており、これは商業を生業とする集落であったことを示している(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1989)。

④古屋敷遺跡 (日夏町)

荒神山の北東山麓、妙楽寺遺跡の対岸の日夏町に位置する遺跡で、昭和59・60年度に彦根市教育委員会が発掘調査を実施し、14世紀から16世紀中頃にわたる中世集落の存在を明らかにした。中央に溝と土塁で囲まれたやや大きな屋敷地があり、その周囲には小規模の長方形の屋敷地が7ヵ所ある。屋敷地内には建物跡と想定される多数のピットや井戸、カマド、石組枡などがあり、各屋敷地の周囲には道が確認された。出土遺物は妙楽寺遺跡に比べると日常雑器の占める割合が高い(彦根市教育委員会1987)。



妙楽寺遺跡

古屋敷遺跡

図22 彦根市内の中世集落

(3) ツヤ遺跡の中世集落の意義付け

集落の形成過程だが、耕作地の素掘り溝と屋敷地の区画溝の切り合い関係より、耕作地は屋敷地形成以前・機能時・廃絶後と連綿と続いている状況が確認された。このことより、まず当地に条里地割りの規制を受ける形で耕作地が広がり、その後15世紀後半にその地割を踏襲しながら屋敷地が形成された状況が想定される。この一連の形成過程で重要な働きをなしたのがSD1で、この直線の溝は条里地割の軸に乗っており、南東方向に真っ直ぐ伸びていくと、平田川にぶつかる位置関係にある。恐らく、遺構機能時には平田川より水を引き込む機能を果たしていたと考えられる。さらに、このSD1を軸に直交する形で素掘り溝や区画溝が延びているとともに、それらの遺構はSD1より北東側のみ広がっており、南西側には全く広がっていない状況が確認される。遺構の広がりが明らかにSD1を基準にしているのである。なお、耕作地などを分ける区画は、明治期の地籍図に描かれた区画とほぼ一致し、中世から近世へと踏襲されているとみられる。

次に、屋敷地についてだが、屋敷地の機能していた時期は15世紀後半から16世紀初頭であり、県内の中世集落の変遷を見ると3つ目の画期にあたる。検出された屋敷地の区画は小規模な長方形を呈しており、市内の古屋敷遺跡の小規模屋敷地群の状況と合致する。これらより、今回検出した屋敷地は15世紀後半に当地の集村化の過程で形成された屋敷地群の一角で集落の縁辺部と考えられ、集落の中心となる区画（屋敷地）は、周辺の地形や既存の試掘調査などの成果を勘案すると南東方向に広がっていたと推定される。

最後に集落の性格についても少し検討したい。市内の他事例のように、ひとくちに中世の集落といっても実際には集落自身が持つ機能や性格には様々なものがある。上述したように今回の調査地は耕作地とセット関係で検出されていることより、農業を生業とする集落であることに疑いの余地はない。しかし、瓦質土器の仏華瓶や一字一石経などの寺院関連の遺物がわずかに出土しており、想像をたくましくすれば、調査地は寺を中心とした集落であった可能性が推察される。現在の集落の南辺には浄土真宗明照寺の寺地があり、15世紀末には調査地の南東側に位置する山之脇にあったとされる。今回の調査成果との関連が気になるところであるが、それは今後の課題である。

参考文献

- 木戸雅寿 1992「水辺の集落の原風景」『湖の国の歴史を読む』新人物往来社
- 木戸雅寿 1994「考古学からみた中近世集落の発展と都市・町の成立とその問題点」『中世都市研究1 都市空間』中世都市研究会
- 滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1989『妙楽寺遺跡Ⅲ』
- 滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 2006『八坂東遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護境界 2006『国領遺跡』
- 彦根市教育委員会 1987『古屋敷遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第12集
- 彦根市史編集委員会 2002『彦根 明治の古地図2』彦根市

表4-1 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SD 1	—	(33.32)	0.72	0.10	土師器 (1~3)、瀬戸美濃 (4)、白磁 (5)、瓦質土器 (6)	SD176を切っている。 SD2・6・7・9に切られている。	7	
SD 2	—	65.18	0.89	0.63	土師器 (7~9)、瀬戸美濃 (10~12、14~17)、青磁 (中国) (13)、越前 (18~22)、信楽 (23・25)、産地不明陶器 (24)、瓦質土器 (26)、木製品 (27)、鉄製品 (28)	SD26・50・51・59・79・80・90・348・349、SK126を切っている。 SD10・11・16・17、SK95・144・145に切られている。		2・7
SD 3	—	69.10	0.39	0.24	土師器 (29~33)、瀬戸美濃 (34)	SD51・59・79・139・348・349を切っている。 SD16・17に切られている。		2・7
SK 4	隅丸方	2.65	1.80	0.26	土師器 (35~39)、染付 (中国) (40)、木製品 (41・42)	SD5と一体。 SD51を切っている。	9	5
SD 5	—	(14.92)	0.30	0.03		SK4と一体。 SD59・79、SP75に切られている。	9	5
SD 6	—	15.79	0.26	0.06		SD1・11・26を切っている。 SD16・17に切られている。		
SD 7	—	15.68	0.28	0.05		SD1・10・11・26を切っている。 SD16・17に切られている。		
SD 8	—	10.42	0.26	0.05		SD17・26を切っている。 SD16、SP130に切られている。		
SD 9	—	17.60	0.35	0.08	土師器 (43)	SD1・10・11・26を切っている。 SD4・16・17、SK126、SP140に切られている。		7
SD10	—	9.39	0.26	0.05		SD2を切っている。 SD7・9に切られている。		
SD11	—	(9.16)	0.26	0.03		SD2を切っている。 SD6・7・9に切られている。		
SP12	円	0.30	0.20	0.19				
SP13	円	0.21	0.20	0.15				
SP14	円	0.26	0.25	0.15				
SP15	円	0.26	0.21	0.15				
SD16	—	(15.19)	0.30	0.05		SD2・3・6・7・8・9を切っている。		
SD17	—	(14.89)	0.26	0.06		SD2・3・6・7・9を切っている。 SD8、SP19に切られている。		
SP18	楕円	0.25	0.11	0.14				
SP19	円	0.28	0.26	0.09		SD17を切っている。		
SP20	円	0.16	0.13	0.16				
SP21	円	0.23	0.20	0.08				
SP22	円	0.17	0.15	0.17				
SP23	不成形	0.65	0.19	0.23				
SP24	円	0.44	0.38	0.05				
SP25	楕円	0.19	0.10	0.07				
SD26	—	(5.76)	0.28	0.03		SP40を切っている。 SD2・6・7・8・9に切られている。		
SD27	—	4.20	0.30	0.10		SP47に切られている。		
SD28	—	1.80	0.23	0.03				
SP29	円	0.16	0.15	0.12		SD26を切っている。		
SP30	円	0.26	0.25	0.03				
SP31	円	0.31	0.27	0.13				
SP32	円	0.30	0.29	0.19				

() 内は残存長、又は復元数値

表4-2 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SP33	円	0.58	0.51	0.33	土師器 (44)、越前 (45)			
SP34	円	0.16	0.15	0.04	漆器 (46)			
SP35	円	0.26	0.23	0.07				
SP36	不成形	0.73	0.61	0.03				
SP37	不成形	0.64	0.23	0.19				
SP38	円	0.36	0.31	0.09				
SP39	円	0.21	0.20	0.09				
SP40	円	0.38	0.35	0.20		SD26に切られている。		
SP41	円	0.28	0.25	0.17				
SP42	橢円	0.43	0.33	0.30				
SP43	橢円	0.16	0.11	0.15				
SP44	円	0.16	0.15	0.23				
SK45	円	0.68	0.54	0.48				
SP46	円	0.22	0.20	0.14				
SP47	円	0.18	0.17	0.22		SD27を切っている。		
SP48	円	0.10	0.09	0.05				
SP49	円	0.26	0.24	0.26				
SD50	—	7.31	0.30	0.09	土師器 (47)	SD 2に切られている。		
SD51	—	(14.84)	0.18	0.03		SD 2・3、SK 4に切られて いる。		
SP52	橢円	0.42	0.15	0.11				
SP53	円	0.31	0.29	0.29				
SP54	円	0.33	0.30	0.12				
SP55	円	0.35	0.32	0.15				
SP56	橢円	0.50	0.32	0.21	土師器 (48)			7
SP57	円	0.33	0.31	0.19				
SD58	—	0.93	0.30	0.04				
SD59	—	(16.80)	0.23	0.04		SD60を切っている。 SD 2・3、SP 77・78、 SK114に切られてる。		
SD60	—	8.50	0.24	12.80		SD59・79、SP76に切られて いる。		
SP61	橢円	0.75	0.33	0.41				
SP62	円	0.20	0.18	0.17				
SP63	円	0.38	0.35	0.25		SB 2を構成する柱穴。	6	
SP64	橢円	0.37	0.23	0.07				
SP65	橢円	0.42	0.19	0.06		SB 2を構成する柱穴。	6	
SP66	円	0.27	0.25	0.14		SB 2を構成する柱穴。	6	
SP67	円	0.40	0.38	0.15		SB 2を構成する柱穴。	6	
SP68	円	0.46	0.38	0.30				
SP69	円	0.19	0.18	0.22				
SP70	円	0.38	0.32	0.13		SB 2を構成する柱穴。	6	
SP71	円	0.18	0.14	0.07				
SP72	円	0.23	0.21	0.15				
SP73	円	0.26	0.23	0.06				
SP74	円	0.28	0.22	0.14				
SP75	円	0.57	0.46	0.56		SD 5を切っている。		
SP76	橢円	0.48	0.31	0.12		SD60を切っている。		
SP77	円	0.37	0.30	0.11		SB 2を構成する柱穴。 SD59を切っている。	6	
SP78	円	0.25	0.23	0.12		SB 2を構成する柱穴。 SD59を切っている。	6	

() 内は残存長、又は復元数値

表4-3 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SD79	—	12.10	0.39	0.03		SD 5・60、SP363を切っている。 SD 2・3、SP341に切られている。		
SD80	—	(19.58)	0.35	8.50		SD81を切っている。 SD 2に切られている。		
SD81	—	3.52	0.34	0.07		SD80に切られている。		
SK82	隅丸方	0.89	0.85	0.62	漆器 (49)	SP360を切っている。	8	
SP83	円	0.30	0.29	0.08				
SP84	円	0.20	0.16	0.15				
SP85	円	0.32	0.29	0.10				
SP86	円	0.31	0.30	0.15				
SP87	不成形	0.39	0.15	0.05				
SP88	不成形	0.27	0.09	0.05				
SP89	楕円	0.37	0.24	0.03				
SD90	—	(20.95)	0.30	0.02		SD 2・5、SK93に切られている。		
SD91	—	(7.14)	0.36	0.12				
SK92	楕円	(0.82)	0.79	0.16	山茶碗 (50)			
SK93	隅丸方	0.98	0.85	0.83		SD90を切っている。	8	
SK94	—	(1.25)	(1.00)	0.08	山茶碗 (51)			
SK95	円	1.56	0.88	0.36				
SD96	—	11.08	0.48	0.06		SD117を切っている。		
SP97	楕円	0.23	0.15	0.16				
SP98	不成形	0.76	0.27	0.09				
SP99	円	0.31	0.20	0.20				
SP100	円	0.10	0.09	0.04				
SP101	円	0.11	0.10	0.03				
SK102	不成形	0.30	0.20	0.04				
SP103	不成形	0.22	0.17	0.02				
SP104	円	0.21	0.20	0.08				
SP105	円	0.21	0.19	0.31	土師器 (52~55)			
SP106	円	0.19	0.14	0.32				
SP107	円	0.18	0.17	0.06				
SP108	楕円	0.33	0.14	0.03				
SP109	楕円	0.67	0.10	0.04				
SP110	隅丸方	0.27	0.26	0.23				
SP111	円	0.24	0.23	0.20				
SD112	—	1.80	0.30	0.07				
SD113	—	1.82	0.22	0.04				
SK114	不成形	1.40	0.21	0.19	土師器 (56)	SD59を切っている。		
SP115	楕円	0.30	0.21	0.05				
SP116	不成形	0.60	0.18	0.08				
SD117	—	2.48	0.35	0.04		SD96に切られている。		
SP118	楕円	0.21	0.15	0.13				
SP119	円	0.48	0.43	0.51				
SP120	円	0.32	0.31	0.39				
SP121	円	0.31	0.25	0.32				
SP122	不成形	0.41	0.23	0.03				
SP123	円	0.17	0.16	0.02				
SP124	円	0.20	0.19	0.03				
SP125	—	1.72	0.31	0.16				

() 内は残存長、又は復元数値

表 4-4 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SK126	隅丸方	(2.33)	(2.25)	0.09	信楽 (57)	SD 9 を切っている。 SD 2 に切られている。		
SP127	楕円	0.33	0.21	0.25				
SP128	隅丸方	0.20	0.14	0.22				
SP129	不成形	0.15	0.08	0.18				
SP130	不成形	0.80	0.36	0.17		SD 8 を切っている。		
SP131	円	0.29	0.24	0.16				
SP132	円	0.20	0.16	0.07				
SP133	隅丸方	0.20	0.17	0.18				
SP134	隅丸方	0.29	0.25	0.27				
SP135	楕円	0.30	0.20	0.24				
SP136	隅丸方	0.24	0.23	0.12				
SP137	楕円	0.35	0.28	0.23				
SP138	不成形	0.32	0.31	0.04				
SD139	—	7.18	0.27	0.07		SD 3 に切られている。		
SP140	円	0.52	0.47	0.12		SD 9 を切っている。		
SP141	不成形	0.36	0.26	0.12				
SP142	楕円	0.35	0.23	0.21				
SX143	不成形	3.30	2.42	0.14	土師器 (58・59)		9	6
SK144	円	1.23	(0.40)	0.32		SD 2 を切っている。		
SK145	円	0.64	(0.28)	0.28		SD 2 を切っている。		
SK146	隅丸方	1.13	1.07	1.60	土師器 (60~64)、瀬戸美濃 (65)、木製品 (66)、鉄製品 (67)		8	4
SP147	楕円	0.37	0.27	0.09		SA 2 を構成する柱穴。	7	
SP148	円	0.19	0.18	0.05				
SP149	円	0.40	0.38	0.12		SA 2 を構成する柱穴。	7	
SP150	楕円	0.35	0.13	0.05		SA 1 を構成する柱穴。	7	
SP151	円	0.16	0.14	0.07				
SP152	円	0.30	0.28	0.32		SA 2 を構成する柱穴。	7	
SP153	不成形	0.31	0.29	0.13		SA 1 を構成する柱穴。	7	
SP154	楕円	0.30	0.24	0.04		SA 1 を構成する柱穴。	7	
SP155	楕円	0.21	0.17	0.12		SA 2 を構成する柱穴。	7	
SP156	円	0.26	0.25	0.11				
SP157	不成形	0.30	0.20	0.06				
SP158	円	0.67	0.62	0.17		SA 1 を構成する柱穴。	7	
SP159	隅丸長方	0.37	0.23	0.12		SA 2 を構成する柱穴。 SP160 を切っている。		
SP160	隅丸方	0.26	0.25	0.26		SP159 に切られている。		
SP161	円	0.20	0.18	0.10		SA 2 を構成する柱穴。	7	
SP162	円	0.26	0.21	0.25				
SP163	不成形	0.30	0.23	0.06		SA 1 を構成する柱穴。	7	
SP164	円	0.40	0.34	0.04		根石。		
SP165	楕円形	0.55	0.26	0.17				
SP166	不成形	0.50	0.40	0.26		SA 1 を構成する柱穴。	7	
SP167	不成形	1.09	0.35	0.06				
SP168	円	0.30	0.29	0.37				
SP169	円	0.25	0.21	0.06				
SP170	円	0.22	0.19	0.04				
SP171	円	0.55	0.51	0.35				
SK172	隅丸方	0.79	0.77	0.26	土師器 (68)、瀬戸美濃 (69)	底部礫敷き。	8	6
SP173	楕円形	0.32	0.22	0.12		SA 2 を構成する柱穴。柱根。	7	

() 内は残存長、又は復元数値

表 4-5 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SK174	隅丸方	0.94	0.92	0.83	骨角器 (70)		8	5
SK175	隅丸方	1.26	1.24	0.82			8	
SP176	—	(0.41)	0.29	0.11		SD 1 に切られている。		
SP177	楕円	0.35	0.25	0.14				
SD178	—	5.17	0.28	0.03				
SD179	—	3.55	0.25	0.05				
SK180	不整形	0.88	0.60	0.19				
SK181	不整形	1.18	0.59	0.54				
SP182	円	0.14	0.13	0.19				
SP183	円	0.47	0.40	0.13				
SP184	円	0.12	0.09	0.15				
SP185	隅丸方	0.32	0.26	0.38				
SP186	円	0.27	0.23	0.19				
SP187	円	0.20	0.18	0.40				
SP188	楕円	0.39	0.30	0.46		SA 4 を構成する柱穴。	6	
SP189	円	0.40	0.34	0.21	越前 (71)	SA 4 を構成する柱穴。	6	7
SP190	円	0.17	0.16	0.08				
SP191	円	0.28	0.26	0.32				
SP192	円	0.20	0.19	0.17				
SP193	円	0.24	0.22	0.12				
SP194	円	0.23	0.20	0.19				
SP195	楕円	0.35	0.23	0.25				
SP196	円	0.21	0.20	0.08				
SP197	円	0.27	0.21	0.16				
SP198	円	0.41	0.35	0.09				
SP199	円	0.36	0.35	0.17				
SP200	円	0.40	0.33	0.18				
SP201	円	0.38	0.35	0.46				
SP202	円	0.25	0.23	0.38				
SP203	円	0.30	0.25	0.26				
SP204	—	0.80	0.32	0.06				
SP205	不整形	0.25	0.18	0.10				
SP206	不整形	0.24	0.08	0.05				
SD207	不整形	2.49	0.24	0.04				
SP208	楕円	0.35	0.26	0.12				
SP209	不整形	0.59	0.23	0.22		SA 4 を構成する柱穴。	6	
SP210	円	0.28	0.25	0.40		SA 4 を構成する柱穴。	6	
SP211	円	0.14	0.11	0.03				
SP212	楕円	0.43	0.26	0.08		SA 4 を構成する柱穴。	6	
SP213	円	0.18	0.15	0.08				
SP214	円	0.37	0.30	0.11				
SP215	不整形	0.35	0.26	0.26		SA 4 を構成する柱穴。	6	
SP216	円	0.28	0.25	0.23				
SP217	—	(1.98)	0.29	0.04		SP221 に切られている。		
SP218	隅丸方	0.61	0.43	0.29				
SP219	円	0.55	0.54	0.32				
SP220	円	0.65	0.57	0.20	土師器 (72・73)	柱根。		
SP221	円	0.87	0.73	0.48	土師器 (74)	SB 1 を構成する柱穴。根石。 SD217 を切っている。	5	3
SP222	円	0.32	0.27	0.08				
SP223	楕円	0.30	0.10	0.04				

() 内は残存長、又は復元数値

表 4-6 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SP224	楕円	0.25	0.17	0.10				
SP225	円	0.58	0.50	0.19				
SP226	円	0.58	0.49	0.13				
SP227	楕円	0.65	0.43	0.19		SB 1 を構成する柱穴。	5	3
SP228	円	0.39	0.38	0.13				
SP229	—	0.90	0.20	0.03				
SD230	—	1.20	0.23	0.03		SP231に切られている。		
SP231	円	0.41	0.37	0.14	木製品 (85)	SD230を切っている。		7
SP232	楕円	0.50	0.40	0.25		粘土塊混じる。		
SD233	不成形	0.55	0.12	0.07				
SP234	楕円	0.20	0.15	0.06				
SP235	楕円	0.20	0.16	0.15				
SP236	円	0.43	0.38	0.15				
SP237	円	0.27	0.25	0.10				
SP238	不成形	0.89	0.70	0.34		SB 1 を構成する柱穴。SK241 とは一体 根石。	5	3
SP239	楕円	0.66	0.48	0.32	土師器 (75)	SK241を切っている。	5	
SP240	楕円	0.57	0.45	0.42		SB 1 を構成する柱穴。	5	3
SK241	隅丸方	2.53	1.87	0.18	土師器 (76・77)	SB 1 を構成する土坑。 SP238・244とは一体。	5	3
SP242	円	0.60	0.48	0.16		SP243を切っている。		
SP243	不成形	0.63	(0.57)	0.07		SP242に切られている。		
SP244	不成形	0.80	0.55	0.46	土師器 (78)	SB 1 を構成する柱穴。 SK241とは一体。	5	3
SP245	楕円	0.38	0.27	0.08		SK241を切っている。	5	
SP246	円	0.42	0.38	0.13	土師器 (79)	SK241を切っている。	5	
SP247	円	0.50	0.43	0.21		SB 1 を構成する柱穴。 SP249を切っている。	5	3
SP248	円	0.35	0.34	0.13		SP249を切っている。		
SP249	円	(0.39)	(0.35)	0.18		SP247・248に切られている。		
SP250	円	0.30	0.26	0.05		SA 2 を構成する柱穴。		
SP251	円	0.24	0.21	0.08				
SP252	楕円	0.39	0.31	0.11				
SP253	楕円	0.49	0.35	0.23		SB 1 を構成する柱穴。根石。	5	3
SP254	楕円	0.20	0.17	0.14				
SP255	不成形	0.58	0.43	0.16				
SP256	楕円	1.01	0.67	0.46		SB 1 を構成する柱穴。根石。	5	3
SP257	楕円	0.90	0.55	0.61	土師器 (80)			
SP258	不成形	0.52	0.26	0.01				
SP259	円	0.43	0.40	0.17				
SP260	楕円	0.74	0.61	0.43		SB 1 を構成する柱穴。根石。	5	3
SP261	円	0.40	0.36	0.37				
SP262	円	0.16	0.14	0.33				
SP263	楕円	0.48	0.38	0.13		SA 3 を構成する柱穴。	6	3
SP264	円	0.30	0.29	0.22				
SP265	楕円	0.92	0.64	0.22	土師器 (81)	SB 1 を構成する柱穴。	5	3
SP266	円	0.45	0.43	0.52				
SP267	円	0.23	0.20	0.15		SA 3 を構成する柱穴。	6	3
SP268	円	0.14	0.13	0.06		SP269を切っている。		
SP269	円	0.30	0.30	0.19		SA 2 を構成する柱穴。 SP268に切られている。		

() 内は残存長、又は復元数値

表4-7 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SP270	橢円	0.51	0.42	0.11		SB 1 を構成する柱穴。	5	3
SP271	隅丸方	0.28	0.27	0.45				
SP272	橢円	0.75	0.56	0.17				
SP273	橢円	(0.42)	0.32	0.04		SP274に切られている。		
SP274	円	0.44	0.41	0.20		SP273を切っている。		
SP275	不成形	0.30	0.25	0.21				
SP276	隅丸方	0.31	0.27	0.14				
SP277	円	0.20	0.19	0.15				
SP278	橢円	0.22	0.08	0.04				
SP279	円	0.30	0.28	0.36				
SP280	不成形	0.34	0.25	0.24				
SP281	円	0.25	0.22	0.27				
SP282	円	0.30	0.29	0.39				
SP283	円	0.13	0.12	0.07				
SP284	円	0.14	0.13	0.27				
SP285	円	0.14	0.13	0.06		SP286を切っている。		
SP286	隅丸方	0.44	0.33	0.39		SP285に切られている。		
SD287	橢円	0.30	0.15	0.05				
SD288	—	(0.67)	0.20	0.04		SP289に切られている。		
SP289	円	0.60	0.57	0.84		SD288を切っている。		
SP290	不成形	0.55	0.48	0.26		SA 3 を構成する柱穴。	6	3
SP291	円	0.44	0.39	0.16				
SP292	橢円	0.25	0.17	0.04		SA 3 を構成する柱穴。	6	3
SP293	橢円	0.49	0.42	0.43				
SP294	隅丸方	0.67	0.41	0.03	土師器 (82)			
SP295	円	0.36	0.34	0.11				
SP296	円	0.35	0.32	0.37	土師器 (83)			
SP297	橢円	0.28	0.21	0.29				
SP298	橢円	0.48	0.38	0.31	山茶碗 (84)			
SP299	円	0.41	0.39	0.27		SA 3 を構成する柱穴。	6	3
SP300	円	0.16	0.15	0.13				
SP301	円	0.29	0.26	0.24				
SP302	橢円	0.52	0.40	0.29		SP303を切っている。		
SP303	橢円	0.49	0.38	0.38		SP302に切られている。		
SP304	円	0.43	0.38	0.35		SP305を切っている。 地下式礎石、柱根。		
SP305	円	0.25	(0.23)	0.15		SP304に切られている。		
SP306	円	0.26	0.25	0.33				
SP307	橢円	0.38	0.29	0.39				
SP308	橢円	0.40	0.33	0.15				
SP309	隅丸方	0.35	0.32	0.37				
SP310	円	0.33	0.30	0.09				
SP311	橢円	0.75	0.35	0.21				
SP312	橢円	0.31	0.22	0.30				
SP313	円	0.20	0.19	0.12				
SP314	円	0.35	0.30	0.40				
SP315	橢円	0.26	0.20	0.04				
SP316	橢円	0.50	0.30	0.33				
SP317	円	0.91	0.32	0.29				
SP318	橢円	0.46	0.38	0.39				
SP319	円	0.41	0.37	0.29				

() 内は残存長、又は復元数値

表 4-8 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SP320	楕円	0.50	0.40	0.11				
SP321	円	0.47	0.37	0.47				
SP322	楕円	0.38	0.28	0.10				
SP323	楕円	0.41	0.34	0.23				
SP324	円	0.20	0.18	0.34				
SP325	円	0.23	0.18	0.27				
SP326	円	0.22	0.21	0.28				
SP327	楕円	0.35	0.30	0.49				
SE328	隅丸方	1.63	1.61	2.05	土師器 (86~90)、山茶碗 (91)、石製品 (92)、木製品 (93・94)	SD339を切っている。	8	6
SP329	楕円	0.26	0.19	0.32				
SP330	楕円	0.41	0.36	0.25				
SP331	円	0.49	0.46	0.18				
SP332	円	0.17	0.16	0.08				
SP333	円	0.37	0.33	0.08				
SP334	円	0.28	0.26	0.31				
SP335	円	0.14	0.13	0.26				
SP336	円	0.36	0.33	0.76				
SP337	円	0.18	0.17	0.15				
SP338	円	0.33	0.30	0.28				
SP339	—	3.00	0.30	0.08		SE328に切られている。		
SP340	円	0.53	0.49	0.43				
SP341	円	0.20	0.17	0.21		SD79を切っている。		
SP342	円	0.38	0.36	0.17				
SD343	—	2.86	0.27	0.07	信楽 (95)			
SK344	—	1.41	0.89	0.37		SD362を切っている。	9	3
SP345	—	(1.71)	0.41	0.12			9	
SD346	—	4.55	0.34	0.08		SD362に切られている。		
SP347	円	0.39	0.38	0.34				
SP348	—	5.03	0.53	0.12		SD346を切っている。 SD 2・3に切られている。		
SD349	—	5.02	0.28	0.07	土師器 (96~98)、木製品 (99)	SD 2・3に切られている。		
SP350	円	0.40	0.38	0.38				
SP351	楕円	0.55	0.40	0.38				
SP352	楕円	0.65	0.56	0.21				
SP353	円	0.29	0.28	0.21				
SP354	楕円	0.54	0.32	0.31				
SP355	楕円	0.38	0.25	0.25		SP356を切っている。		
SP356	円	(0.48)	0.45	0.36		SP355に切られている。		
SP357	円	0.53	0.48	0.42				
SP358	楕円	0.25	0.19	0.15				
SP359	円	0.23	0.22	0.16				
SP360	円	0.32	0.30	0.23		SK82に切られている。		
SP361	不整形	0.32	0.21	0.25				
SD362	—	(2.18)	0.39	0.05		SD345を切っている。 SK344に切られている。	9	

() 内は残存長、又は復元数値

表5 掘立柱建物一覧

建物	梁行×桁行 (間)	梁行長 (m)	桁行長 (m)	床面積 (㎡)	主軸方位	挿図	写真 図版
SB 1	2 × 3	4	6	24	N-34°-E	5	2・3
SB 2	2 × 2	2.9	4.3	12.5	N-35°-E	6	

表6 掘立柱建物・柵柱穴一覧

建物	遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
			長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SB 1	SP221	円	0.87	0.73	0.48	土師器 (74)	SB 1を構成する柱穴。根石。SD217を切っている。	5	3
	SP227	楕円	0.65	0.43	0.19		SB 1を構成する柱穴。	5	3
	SP238	不成形	0.89	0.70	0.34		SB 1を構成する柱穴。SK241とは一体。根石。	5	3
	SP240	楕円	0.57	0.45	0.42		SB 1を構成する柱穴。	5	3
	SP244	不成形	0.80	0.55	0.46	土師器 (78)	SB 1を構成する柱穴。 SK241とは一体。	5	3
	SP247	円	0.50	0.43	0.21		SB 1を構成する柱穴。 SP249を切っている。	5	3
	SP253	楕円	0.49	0.35	0.23		SB 1を構成する柱穴。根石。	5	3
	SP256	楕円	1.01	0.67	0.46		SB 1を構成する柱穴。根石。	5	3
	SP260	楕円	0.74	0.61	0.43		SB 1を構成する柱穴。根石。	5	3
	SP265	楕円	0.92	0.64	0.22	土師器 (81)	SB 1を構成する柱穴。	5	3
SP270	楕円	0.51	0.42	0.11		SB 1を構成する柱穴。	5	3	
SB 2	SP63	円	0.38	0.35	0.25		SB 2を構成する柱穴。	6	
	SP65	楕円	0.42	0.19	0.06		SB 2を構成する柱穴。	6	
	SP66	円	0.27	0.25	0.14		SB 2を構成する柱穴。	6	
	SP67	円	0.40	0.38	0.15		SB 2を構成する柱穴。	6	
	SP70	円	0.38	0.32	0.13		SB 2を構成する柱穴。	6	
	SP77	円	0.37	0.30	0.11		SB 2を構成する柱穴。 SD59を切っている。	6	
	SP78	円	0.25	0.23	0.12		SB 2を構成する柱穴。 SD59を切っている。	6	
SA 1	SP150	楕円	0.35	0.13	0.05		SA 1を構成する柱穴。	7	
	SP153	不成形	0.31	0.29	0.13		SA 1を構成する柱穴。	7	
	SP154	楕円	0.30	0.24	0.04		SA 1を構成する柱穴。	7	
	SP158	円	0.67	0.62	0.17		SA 1を構成する柱穴。	7	
	SP163	不成形	0.30	0.23	0.06		SA 1を構成する柱穴。	7	
	SP166	不成形	0.50	0.40	0.26		SA 1を構成する柱穴。	7	
SA 2	SP147	楕円	0.37	0.27	0.09		SA 2を構成する柱穴。	7	
	SP149	円	0.40	0.38	0.12		SA 2を構成する柱穴。	7	
	SP152	円	0.30	0.28	0.32		SA 2を構成する柱穴。	7	
	SP155	楕円	0.21	0.17	0.12		SA 2を構成する柱穴。	7	
	SP161	円	0.20	0.18	0.10		SA 2を構成する柱穴。	7	
	SP173	楕円形	0.32	0.22	0.12		SA 2を構成する柱穴。柱根。	7	
SA 3	SP263	楕円	0.48	0.38	0.13		SA 3を構成する柱穴。	6	3
	SP267	円	0.23	0.20	0.15		SA 3を構成する柱穴。	6	3
	SP290	不成形	0.55	0.48	0.26		SA 3を構成する柱穴。	6	3
	SP292	楕円	0.25	0.17	0.04		SA 3を構成する柱穴。	6	3
	SP299	円	0.41	0.39	0.27		SA 3を構成する柱穴。	6	3
SA 4	SP188	楕円	0.39	0.30	0.46		SA 4を構成する柱穴。	6	
	SP189	円	0.40	0.34	0.21	越前 (71)	SA 4を構成する柱穴。	6	7
	SP209	不成形	0.59	0.23	0.22		SA 4を構成する柱穴。	6	
	SP210	円	0.28	0.25	0.40		SA 4を構成する柱穴。	6	
	SP212	楕円	0.43	0.26	0.08		SA 4を構成する柱穴。	6	
	SP215	不成形	0.35	0.26	0.26		SA 4を構成する柱穴。	6	

表7-1 出土遺物観察表

遺物 番号	遺構 番号	層位	種別(産地)	器種	口径 長さ (cm)	器高 幅 (cm)	底径 厚さ (cm)	胎土 重量(g)	焼成	色調	備考
1	SD 1	2	土師器	皿	8.8	2.0	—	密	良好	灰黄褐色	
2	SD 1	2	土師器	皿	9.8	1.8	—	密	良好	にぶい黄橙色	
3	SD 1	1	土師器	皿	13.8	2.2	—	密	良好	灰白色	
4	SD 1	2	瀬戸美濃	播鉢	—	2.5	—	密	良好	にぶい橙色	
5	SD 1	2	白磁	椀	17.5	6.4	—	密	良好	灰白色	
6	SD 1	2	瓦質土器	羽釜	19.0	6.1	—	密	良好	にぶい黄橙色	
7	SD 2	2	土師器	皿	7.7	1.8	—	密	良好	にぶい橙色	
8	SD 2	1	土師器	皿	9.0	2.3	—	密	良好	にぶい橙色	
9	SD 2	1	土師器	皿	9.8	1.7	—	密	良好	にぶい黄橙色	
10	SD 2	2	瀬戸美濃	平碗	13.8	4.4	—	密	良好	灰白色	
11	SD 2	2	瀬戸美濃	天目茶碗	—	0.8	4.3	密	良好	にぶい黄橙色	
12	SD 2	2	瀬戸美濃	天目茶碗	—	1.3	4.2	密	良好	にぶい黄橙色	
13	SD 2	2	青磁	椀	11.6	4.8	—	密	良好	灰白色	
14	SD 2	1	瀬戸美濃	播鉢	—	6.7	10.8	密	良好	にぶい黄橙色	播目13条1単位
15	SD 2	1	瀬戸美濃	播鉢	—	9.1	9.6	密	良好	灰黄色	播目8条1単位
16	SD 2	1	瀬戸美濃	直縁大皿	38.2	3.6	—	密	良好	灰白色	
17	SD 2	2	瀬戸美濃	折縁大皿	32.2	7.2	—	密	良好	灰白色	
18	SD 2	1	越前	播鉢	31.4	7.9	—	密	やや軟	にぶい橙色	播目8条1単位
19	SD 2	2	越前	播鉢	—	4.9	—	密	良好	にぶい橙色	播目7条1単位
20	SD 2	1	越前	播鉢	31.6	6.0	—	密	やや軟	にぶい黄橙色	播目6条以上
21	SD 2	2	越前	播鉢	31.6	12.4	—	密	やや軟	にぶい黄橙色	播目7条1単位
22	SD 2	1	越前	播鉢	32.4	7.9	—	密	やや軟	にぶい橙色	
23	SD 2	1	信楽	播鉢	33.3	9.2	—	密	やや軟	灰白色	
24	SD 2	2	産地不明	壺(甕)	—	6.7	15.0	密	良好	にぶい黄橙色	
25	SD 2	1	信楽	壺(甕)	—	3.2	12.2	密	やや軟	褐灰色	
26	SD 2	1	瓦質土器	仏華瓶	4.9	18.7	8.4	密	良好	暗灰色	
27	SD 2	1	木製品	不明	10.4	1.4	1.2	—	—	—	
28	SD 2	2	金属製品	不明	8.1	0.5	0.5	6.0	—	—	
29	SD 3	2	土師器	皿	7.9	1.3	—	密	良好	黒褐色	
30	SD 3	2	土師器	皿	9.7	2.1	—	密	良好	橙色	
31	SD 3	2	土師器	皿	—	1.9	—	密	良好	灰黄褐色	
32	SD 3	2	土師器	皿	13.5	2.2	—	密	良好	灰白色	
33	SD 3	2	土師器	皿	15.8	2.6	—	密	良好	灰黄褐色	
34	SD 3	3	瀬戸美濃	丸碗	11.4	5.1	—	密	良好	灰白色	
35	SK 4	2	土師器	皿	13.7	3.0	—	密	良好	にぶい橙色	
36	SK 4	2	土師器	皿	8.8	2.0	—	密	良好	にぶい橙色	
37	SK 4	2	土師器	皿	14.8	3.1	—	密	良好	灰黄褐色	
38	SK 4	2	土師器	皿	—	1.3	—	密	良好	灰黄褐色	
39	SK 4	2	土師器	焙烙	—	2.2	—	密	良好	にぶい橙色	外面煤付着
40	SK 4	1	染付	椀	—	1.3	6.0	密	良好	灰白色	
41	SK 4	2	木製品	下駄	20.8	7.6	2.4	—	—	—	
42	SK 4	1	木製品	板材	42.9	10.4	0.9	—	—	—	
43	SD 9	2	土師器	皿	10.8	1.9	—	密	良好	にぶい黄橙色	灯明皿
44	SP33	2	土師器	皿	8.7	1.7	—	密	良好	橙色	
45	SP33	1	越前	播鉢	—	3.2	—	密	良好	にぶい橙色	
46	SP34	2	漆器	椀	15.7	4.2	—	—	—	—	
47	SD50	1	土師器	皿	9.9	2.2	—	密	良好	にぶい黄橙色	
48	SP56	2	土師器	皿	9.1	1.9	—	密	良好	にぶい橙色	
49	SK82	1	漆器	皿	13.8	2.8	8.8	—	—	—	
50	SK92	2	山茶碗	碗	—	3.3	—	密	良好	灰白色	
51	SK94	1	山茶碗	碗	—	2.1	8.0	密	良好	灰白色	
52	SP105	2	土師器	皿	6.6	1.8	—	密	良好	灰黄褐色	
53	SP105	2	土師器	皿	8.9	1.7	—	密	良好	灰黄褐色	
54	SP105	2	土師器	皿	12.0	2.1	—	密	良好	にぶい黄橙色	

色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

表7-2 出土遺物観察表

遺物番号	遺構番号	層位	種別(産地)	器種	口径長さ(cm)	器高幅(cm)	底径厚さ(cm)	胎土重量(g)	焼成	色調	備考
55	SP105	2	土師器	皿	—	2.4	—	密	良好	にぶい黄橙色	
56	SK114	1	土師器	皿	8.3	1.7	—	密	良好	灰黄褐色	
57	SK126	1	信楽	播鉢	—	3.6	13.0	密	良好	灰白色	
58	SK143	1	土師器	皿	7.6	2.0	—	密	良好	にぶい黄橙色	
59	SK143	1	土師器	皿	11.9	2.0	—	密	良好	黒褐色	灯明皿
60	SK146	2	土師器	皿	7.9	2.0	—	密	良好	にぶい黄橙色	
61	SK146	2	土師器	皿	8.5	1.9	—	密	良好	にぶい黄橙色	
62	SK146	2	土師器	皿	8.9	1.9	—	密	良好	にぶい黄橙色	
63	SK146	2	土師器	皿	—	1.6	—	密	良好	にぶい黄橙色	
64	SK146	2	土師器	皿	—	2.6	—	密	良好	褐灰色	灯明皿
65	SK146	2	瀬戸美濃	直縁大皿	—	2.4	—	密	良好	灰白色	
66	SK146	5	木製品	不明	15.7	1.0	0.4	—	—	—	
67	SK146	2	鉄製品	火打金	11.4	2.7	0.8	41.5	—	—	
68	SK172	1	土師器	皿	10.3	2.0	—	密	良好	灰白色	
69	SK172	1	瀬戸美濃	皿	—	1.5	3.0	密	良好	灰白色	
70	SK174	3	骨格器	筭	9.3	1.0	0.2	—	—	褐色	上部欠損
71	SP189	1	越前	播鉢	33.6	19.0	—	密	良好	にぶい黄橙色	
72	SP220	2	土師器	皿	6.9	1.9	—	密	良好	褐灰色	
73	SP220	2	土師器	皿	9.5	1.9	—	密	良好	褐灰色	
74	SP221	2	土師器	皿	8.8	1.8	—	密	良好	灰黄褐色	
75	SP239	2	土師器	皿	—	1.5	—	密	良好	にぶい黄橙色	
76	SK241	1	土師器	皿	14.8	2.0	—	密	良好	にぶい黄橙色	
77	SK241	1	土師器	皿	—	1.3	—	密	良好	にぶい橙色	
78	SP244	1	土師器	皿	7.8	1.3	—	やや粗	良好	灰黄褐色	
79	SP246	1	土師器	皿	—	2.5	—	密	良好	褐灰色	
80	SP257	1	土師器	焙烙	—	3.7	—	密	良好	灰白色	内外面煤付着
81	SP265	2	土師器	皿	8.2	2.0	—	密	良好	にぶい橙色	
82	SP294	2	土師器	皿	—	4.3	—	密	良好	にぶい黄橙色	
83	SP296	2	土師器	皿	7.9	1.5	—	密	良好	にぶい黄橙色	
84	SP298	2	山茶碗	碗	—	1.6	—	密	良好	灰白色	
85	SP231	1	木製品	建築部材	13.2	13.0	9.4	—	—	—	
86	SE328	2	土師器	皿	7.3	2.0	—	密	良好	褐灰色	
87	SE328	2	土師器	皿	9.1	2.4	—	密	良好	にぶい橙色	
88	SE328	3	土師器	皿	7.8	1.6	—	密	良好	褐灰色	
89	SE328	3	土師器	皿	—	1.3	—	密	良好	灰白色	
90	SE328	13	土師器	焙烙	—	2.7	—	密	良好	にぶい橙色	内面煤付着
91	SE328	14	山茶碗	碗	—	2.3	9.0	密	良好	灰白色	
92	SE328	15	石器	磨製石斧	7.5	4.7	0.9	59.0	—	オリーブ黄色	
93	SE328	14	木製品	板材	17.7	7.0	0.8	—	—	—	
94	SE328	14	木製品	板材	15.4	6.6	1.0	—	—	—	
95	SD343	1	信楽	壺(甕)	—	4.8	15.0	やや粗	良好	灰白色	
96	SD349	2	土師器	皿	6.9	2.0	—	密	良好	にぶい黄橙色	
97	SD349	1	土師器	皿	—	2.0	—	密	良好	にぶい黄橙色	
98	SD349	2	土師器	皿	11.7	2.2	—	密	良好	にぶい黄橙色	
99	SD349	2	木製品	箸	17.9	0.6	0.5	—	—	—	
100	遺構面精査時	—	土師器	皿	9.8	1.8	—	密	良好	にぶい黄橙色	
101	遺構面精査時	—	青磁	椀	—	2.1	—	密	良好	灰白色	
102	遺構面精査時	—	越前	播鉢	—	4.7	12.0	密	良好	にぶい橙色	
103	SK344	2	石製品	一字一石経	3.6	2.3	0.8	9.5	—	灰色	「厭」
104	SK344	2	石製品	一字一石経	3.6	2.8	0.9	10.0	—	オリーブ灰色	「不」
105	SK344	2	石製品	一字一石経	3.6	2.7	0.9	12.5	—	灰色	「薩」
106	SK344	2	石製品	一字一石経	2.8	2.7	1.0	9.5	—	灰色	「由」
107	SK344	2	石製品	一字一石経	3.7	2.6	0.9	13.5	—	灰色	「所」
108	SK344	2	石製品	一字一石経	2.9	2.9	1.1	12.0	—	灰色	「九」

色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

表7-3 出土遺物観察表

遺物 番号	遺構 番号	層位	種別 (産地)	器種	口径 長さ (cm)	器高 幅 (cm)	底径 厚さ (cm)	胎土 重量 (g)	焼成	色調	備考
109	SK344	2	石製品	一字一石経	3.2	2.1	1.2	12.0	—	灰色	「毎」
110	SK344	2	石製品	一字一石経	3.3	2.0	1.2	11.0	—	灰色	「量」
111	SK344	2	石製品	一字一石経	3.2	2.6	1.2	14.5	—	灰色	「見」
112	SK344	2	石製品	一字一石経	3.6	3.2	1.4	19.0	—	灰色	「羅」
113	SK344	2	石製品	一字一石経	4.1	2.0	1.1	13.0	—	灰色	「得」
114	SK344	2	石製品	一字一石経	2.6	2.3	0.9	6.5	—	オリーブ灰色	「各」
115	SK344	2	石製品	一字一石経	2.7	2.4	0.8	8.0	—	オリーブ灰色	「轉」
116	SK344	2	石製品	一字一石経	3.0	2.8	1.2	11.5	—	灰色	「坐」
117	SK344	2	石製品	一字一石経	2.7	1.9	0.8	5.5	—	灰色	「得」
118	SK344	2	石製品	一字一石経	2.6	2.6	1.3	11.5	—	灰色	表「絨」裏「絨」
119	SK344	2	石製品	一字一石経	2.9	2.6	1.4	12.5	—	灰白色	「済」
120	SK344	2	石製品	一字一石経	3.5	2.0	0.9	9.5	—	灰白色	「王」
121	SK344	2	石製品	一字一石経	3.5	3.5	1.3	22.0	—	灰白色	「出」
122	SK344	2	石製品	一字一石経	2.7	1.8	0.9	5.5	—	灰色	「生」
123	SK344	2	石製品	一字一石経	3.2	2.2	1.2	11.5	—	オリーブ灰色	「利」
124	SK344	2	石製品	一字一石経	3.5	1.9	0.6	5.5	—	灰色	「經」
125	SK344	2	石製品	一字一石経	3.3	2.3	1.0	13.0	—	灰色	「蔵」
126	SK344	2	石製品	一字一石経	3.8	2.9	0.6	9.5	—	灰色	「幢」
127	SK344	2	石製品	一字一石経	2.4	2.4	0.9	7.5	—	灰白色	「無」
128	SK344	2	石製品	一字一石経	3.6	2.7	1.6	16.0	—	オリーブ灰色	「阿」
129	SK344	2	石製品	一字一石経	2.9	2.1	1.3	10.0	—	灰色	「知」
130	SK344	2	石製品	一字一石経	3.1	1.7	0.4	3.0	—	オリーブ灰色	「羊」
131	SK344	2	石製品	一字一石経	3.2	3.0	0.8	9.0	—	明オリーブ灰色	「數」
132	SK344	2	石製品	一字一石経	3.1	2.3	1.4	14.0	—	青灰色	「卒」
133	SK344	2	石製品	一字一石経	3.2	2.0	0.7	7.5	—	灰色	「及」
134	SK344	2	石製品	一字一石経	3.3	3.1	1.2	15.0	—	オリーブ灰色	
135	SK344	2	石製品	一字一石経	3.0	2.6	1.4	14.0	—	灰色	
136	SK344	2	石製品	一字一石経	2.7	2.4	0.9	7.0	—	灰色	
137	SK344	2	石製品	一字一石経	2.3	2.0	0.8	4.5	—	灰色	
138	SK344	2	石製品	一字一石経	3.3	1.6	0.8	6.5	—	オリーブ灰色	
139	SK344	2	石製品	一字一石経	3.0	2.8	1.0	9.0	—	灰色	
140	SK344	2	石製品	一字一石経	3.4	2.4	1.2	12.5	—	オリーブ灰色	
141	SK344	2	石製品	一字一石経	3.4	2.1	1.4	16.0	—	緑灰色	
142	SK344	2	石製品	一字一石経	3.4	3.4	1.0	17.5	—	灰色	
143	SK344	2	石製品	一字一石経	3.1	2.2	1.4	12.5	—	オリーブ灰色	
144	SK344	2	石製品	一字一石経	3.2	1.7	0.8	4.5	—	灰色	
145	SK344	2	石製品	一字一石経	3.0	2.5	1.1	11.0	—	緑灰色	
146	SK344	2	石製品	一字一石経	2.7	2.6	1.2	10.5	—	灰色	
147	SK344	2	石製品	一字一石経	3.0	2.7	0.9	10.0	—	オリーブ灰色	
148	SK344	2	石製品	一字一石経	3.1	2.6	0.8	13.5	—	暗灰色	
149	SK344	2	石製品	一字一石経	2.6	2.0	1.2	9.5	—	暗青灰色	
150	SK344	2	石製品	一字一石経	3.5	2.2	0.7	10.5	—	暗青灰色	
151	SK344	2	石製品	一字一石経	3.2	2.7	1.2	15.0	—	暗灰色	
152	SK344	2	石製品	一字一石経	2.9	1.9	0.7	6.5	—	暗灰色	
153	SK344	2	石製品	一字一石経	3.0	2.2	1.5	14.0	—	青灰色	
154	SK344	2	石製品	一字一石経	2.4	1.7	1.1	6.0	—	青灰色	
155	SK344	2	石製品	一字一石経	2.3	1.5	0.7	3.5	—	暗緑灰色	
156	SK344	2	石製品	一字一石経	2.7	2.1	1.3	12.0	—	暗緑灰色	
157	SK344	2	石製品	一字一石経	2.4	2.1	1.3	10.5	—	暗緑灰色	

色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠



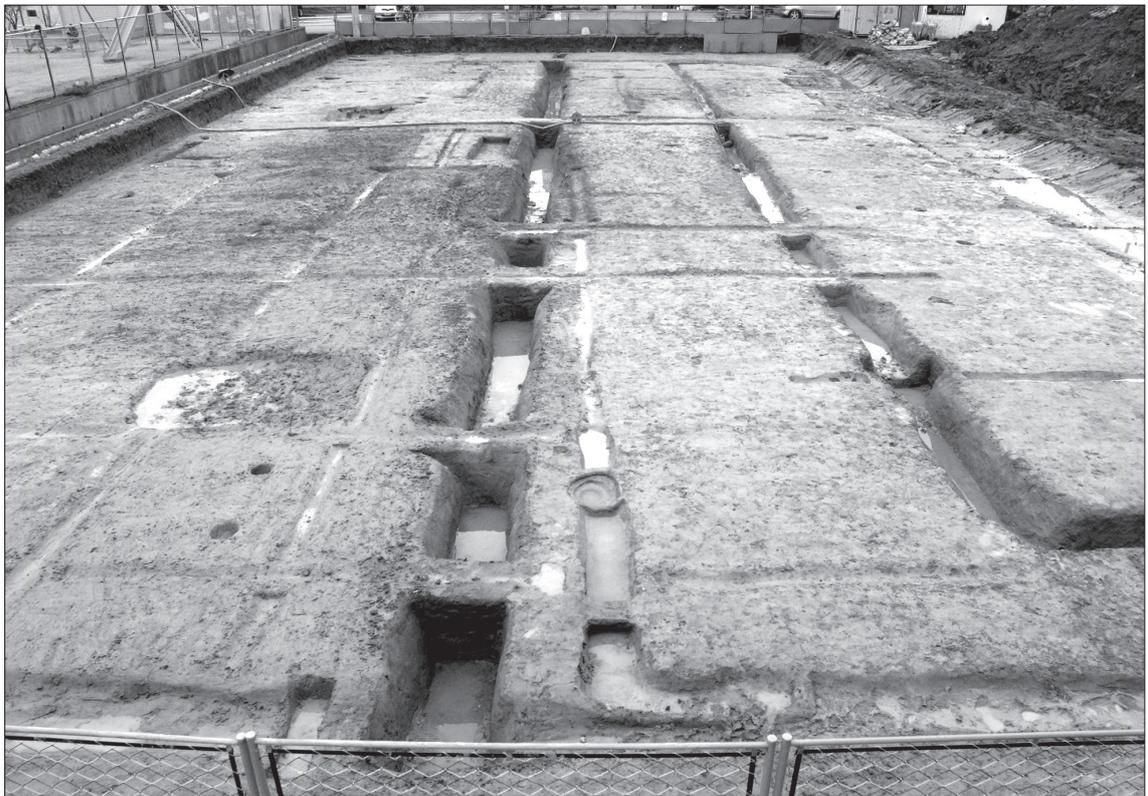
調査前風景〔南西より〕



西調査区全景〔南西より〕



東調査区全景〔北東より〕



区画溝 (SD2・SD3)〔南西より〕



掘立柱建物（SB1）〔南東より〕



一字一石経出土状況（SK344）〔南東より〕

北東壁土層断面〔南より〕

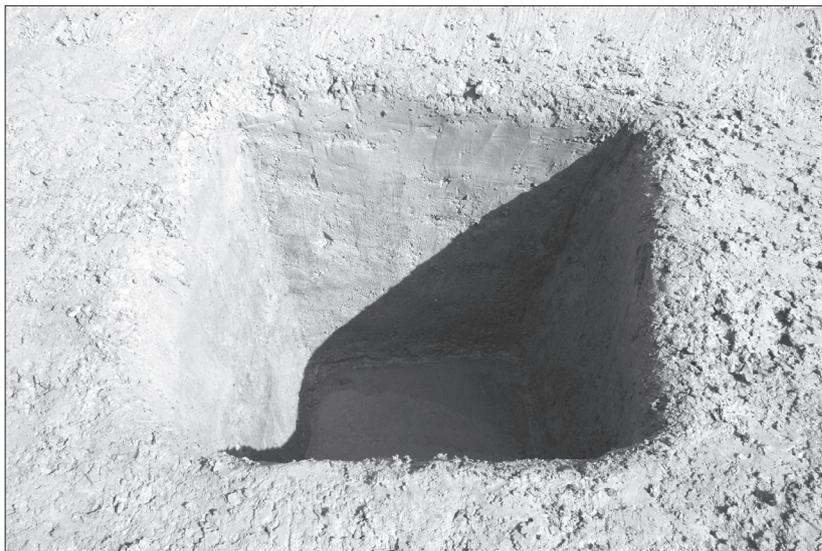


耕作地検出状況〔南東より〕



土坑 (SK146) 〔南西より〕





土坑 (SK174) [南西より]



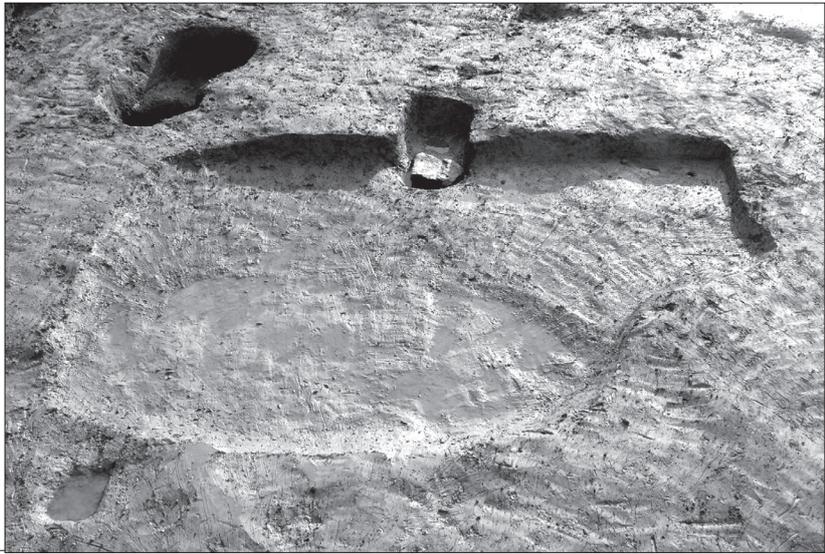
土坑 (SK4) [南東より]



しがらみ遺構 (SK4) [南西より]



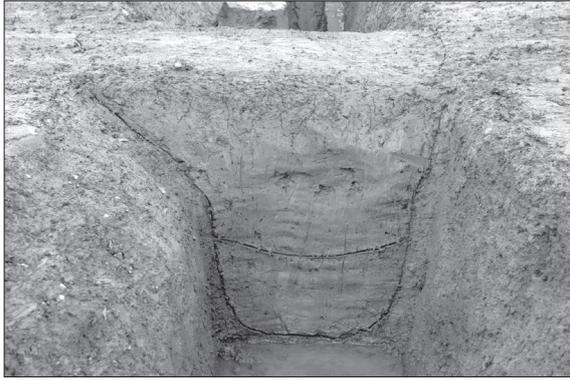
井戸 (SE328) [南西より]



土坑 (SK143) [北東より]



土坑 (SK172) [北東より]



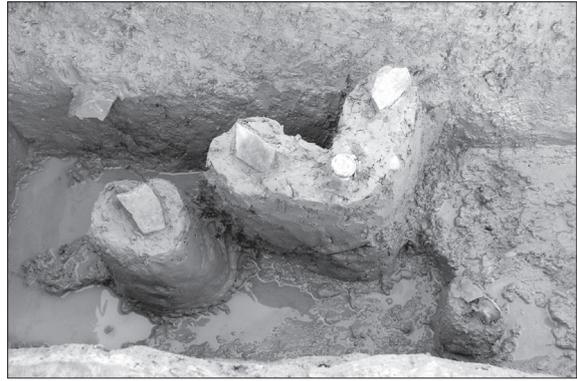
区画溝土層 b-b' 断面 (SD 2) [南西より]



区画溝土層 b-b' 断面 (SD 3) [南西より]



遺物出土状況 (SD 2) [北西より]



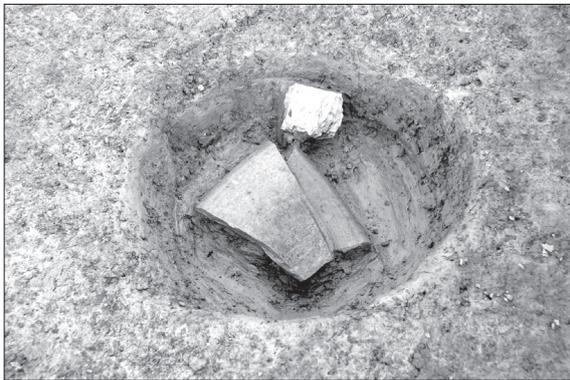
遺物出土状況 (SD 2) [南東より]



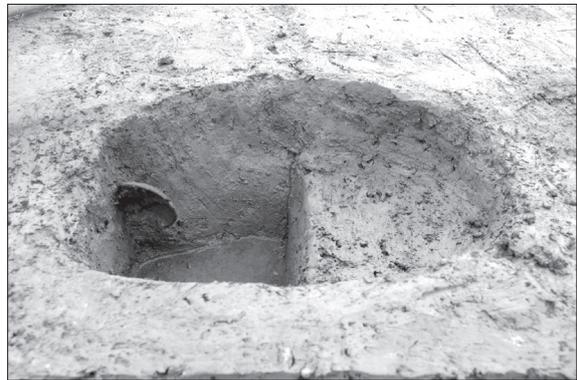
遺物出土状況 (SD 9) [東より]



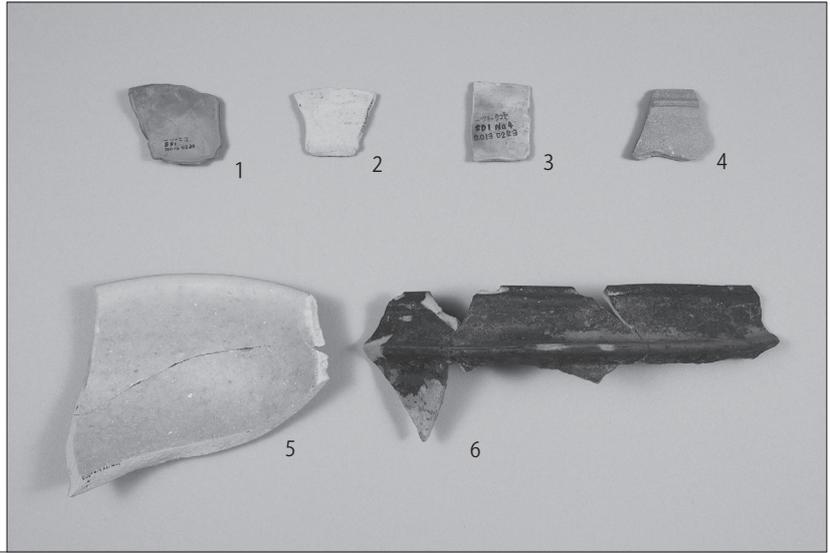
建築部材出土状況 (SP231) [南西より]



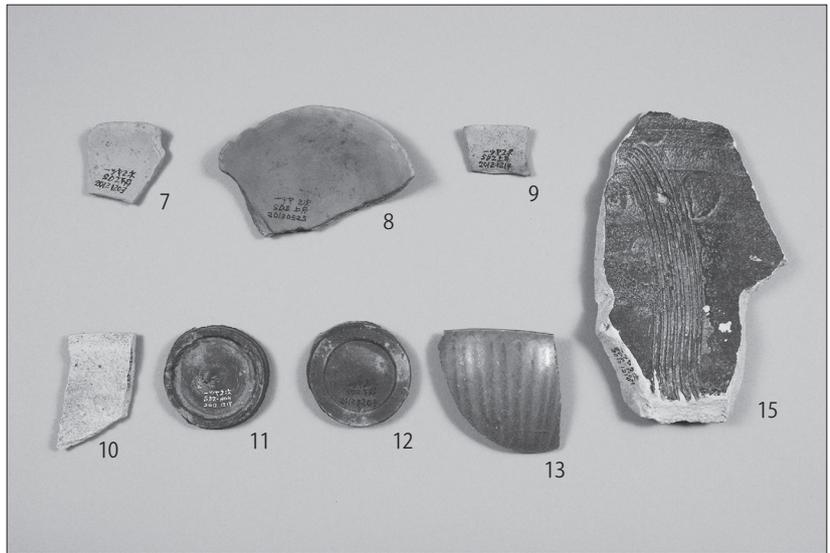
遺物出土状況 (SP189) [南西より]



遺物出土状況 (SK56) [北東より]



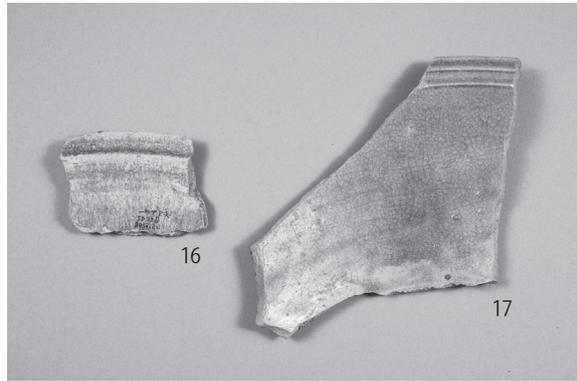
SD 1



SD 2

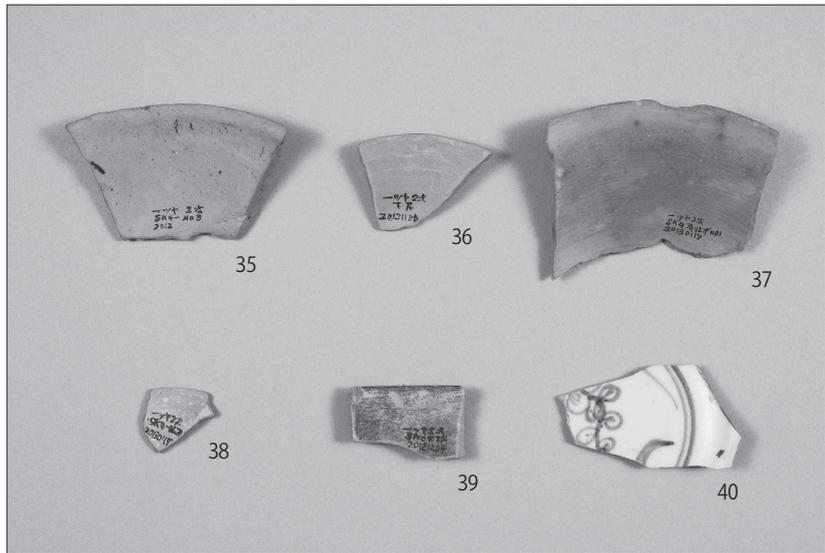


SD 2





SD 3



SK 4



SK 4



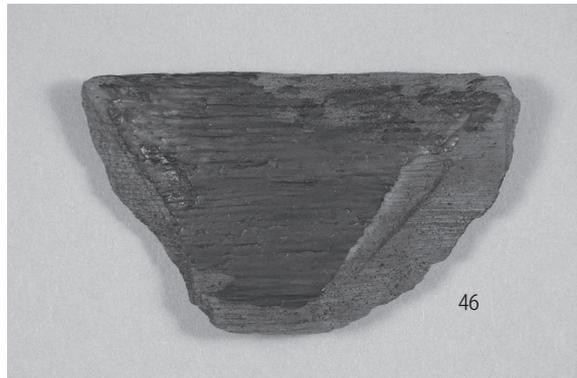
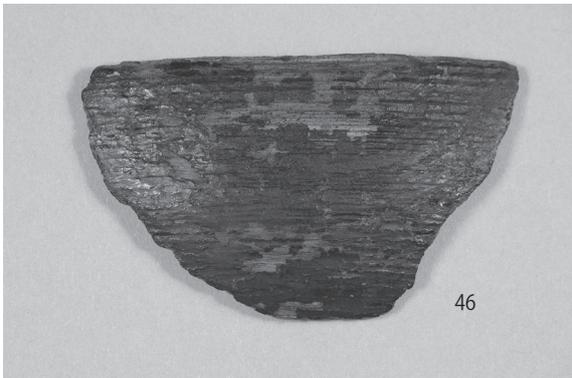
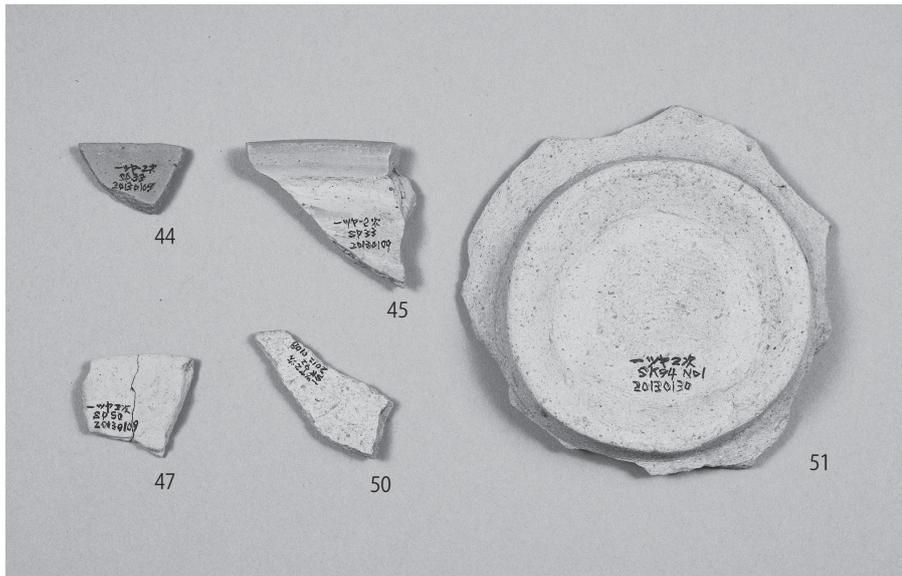
41



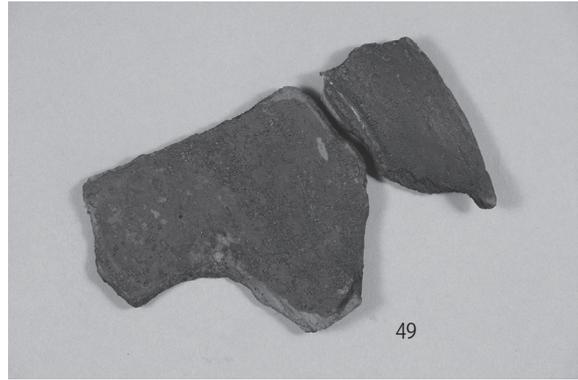
SK 4

SD 9 : 43 SP56 : 48

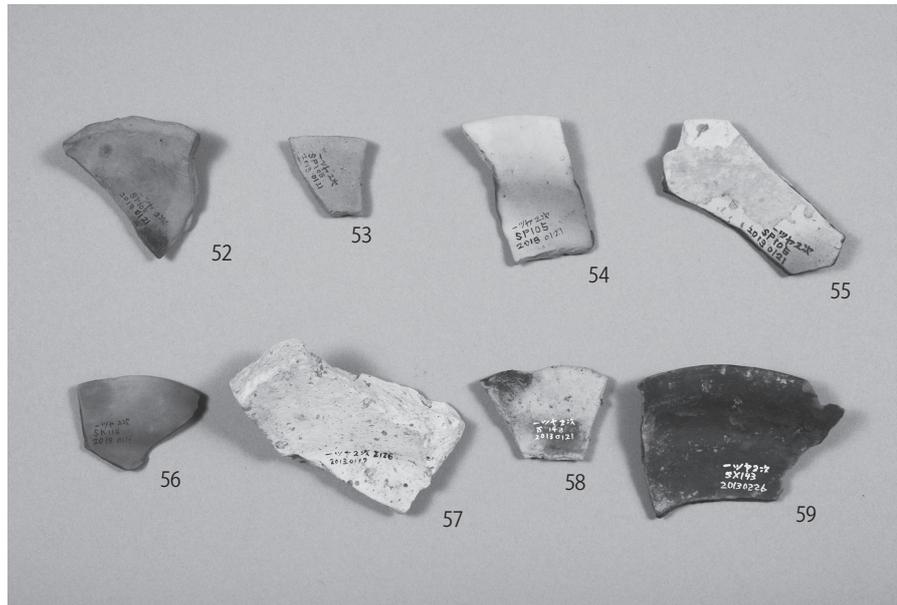
SP33 : 44、45
SD50 : 47
SK92 : 50
SK94 : 51



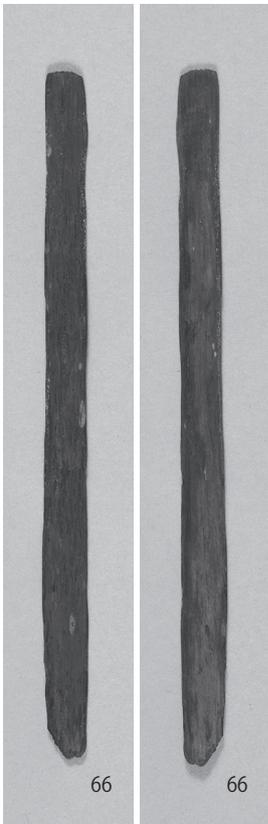
SP34



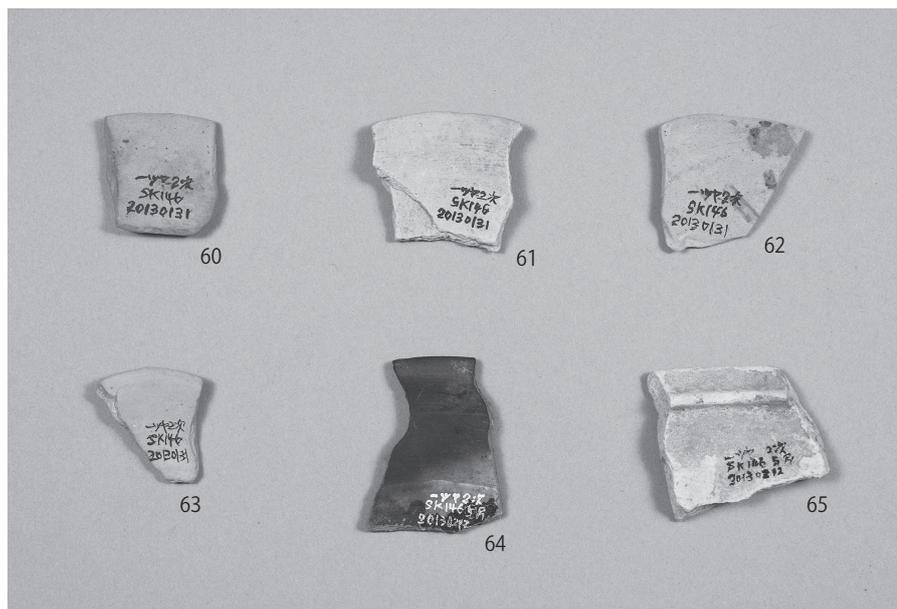
SK82



SP105 : 52~55 SK114 : 56 SK126 : 57 SX143 : 58、59

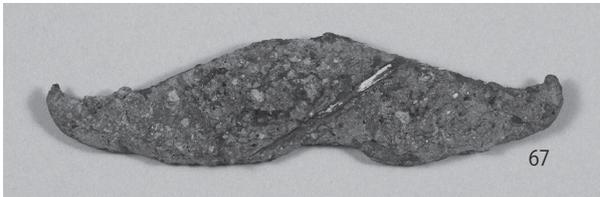
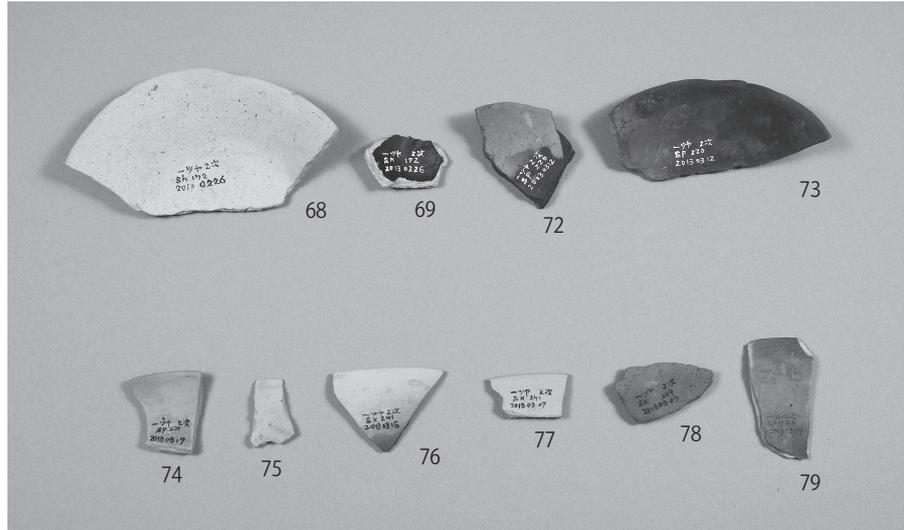


SK146

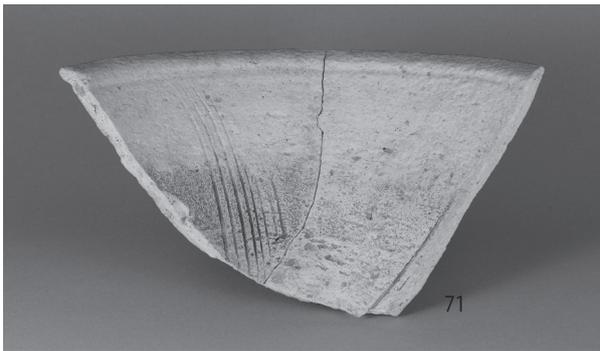


SK146

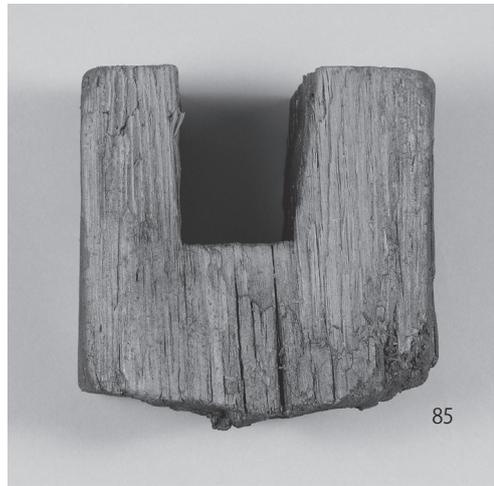
SP172 : 68、69
 SP220 : 72、73
 SP221 : 74
 SP239 : 75
 SP241 : 76、77
 SK244 : 78
 SP246 : 79



SK146



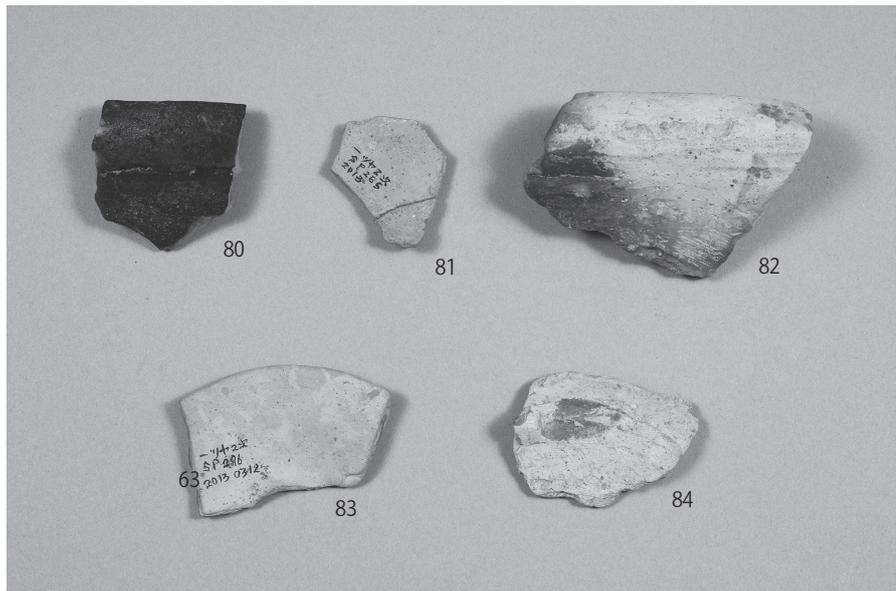
SP189



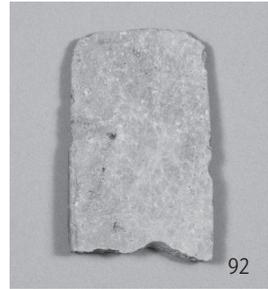
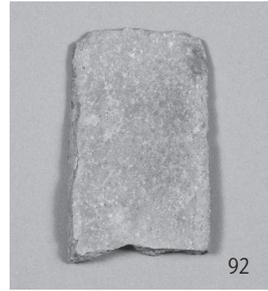
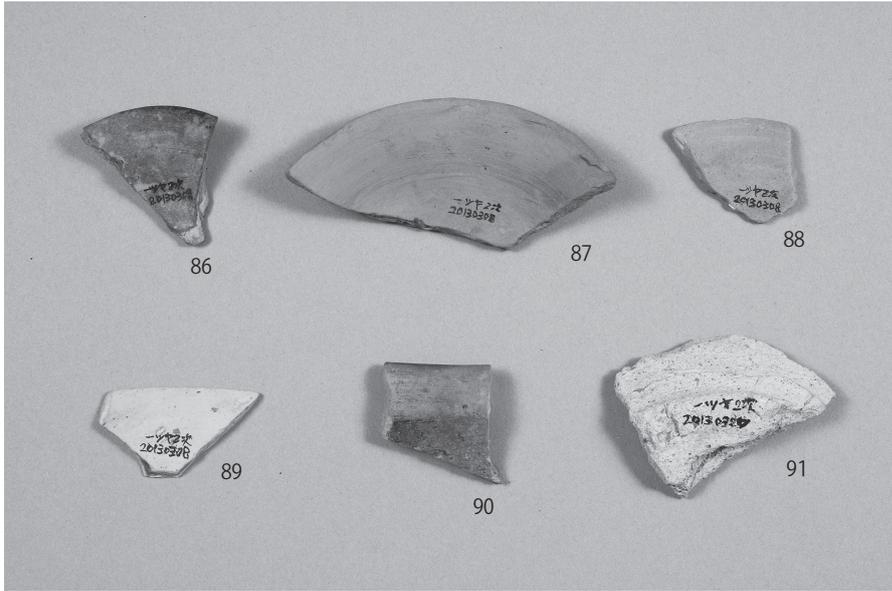
SP231



SK174



SD257 : SP265 : 81 SK294 : 82 SP296 : 83 SD298 : 84



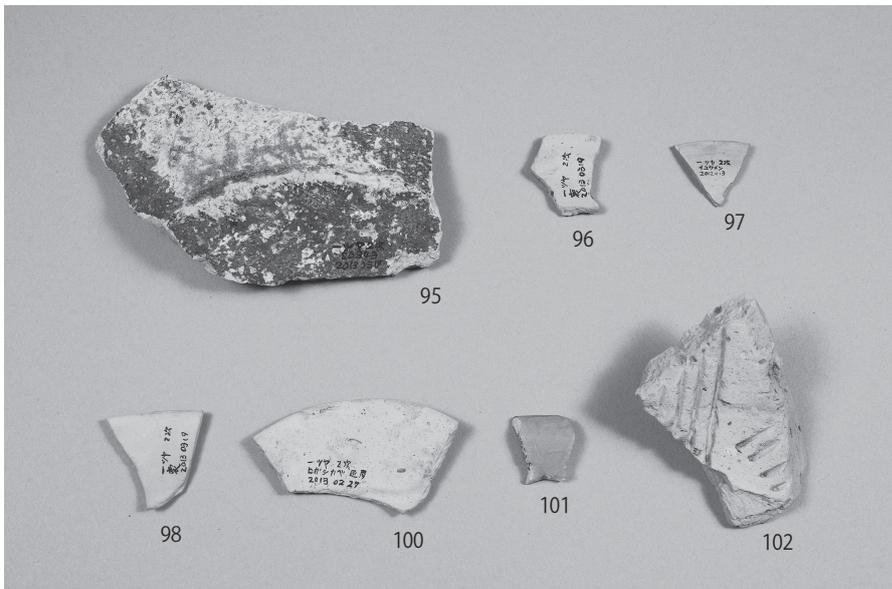
SE328

SE328



SE328

SE328



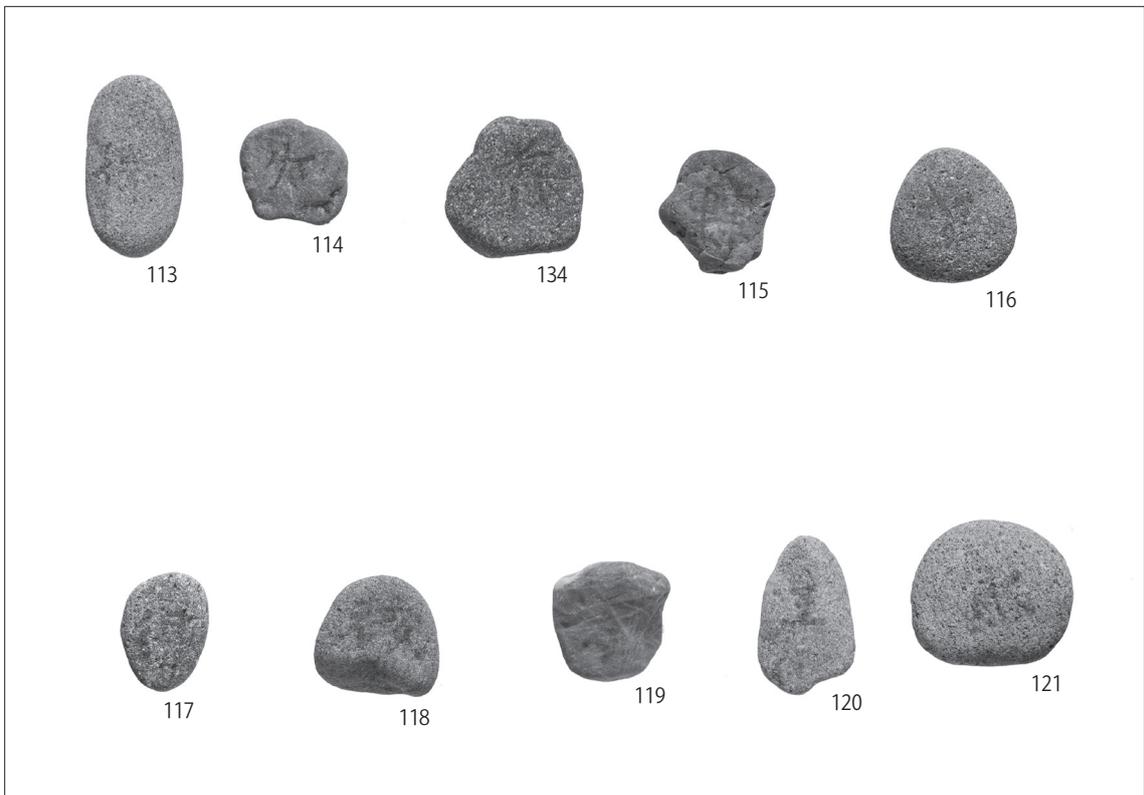
SD343 : 95
SD349 :
96~98
遺構面 :
100~102



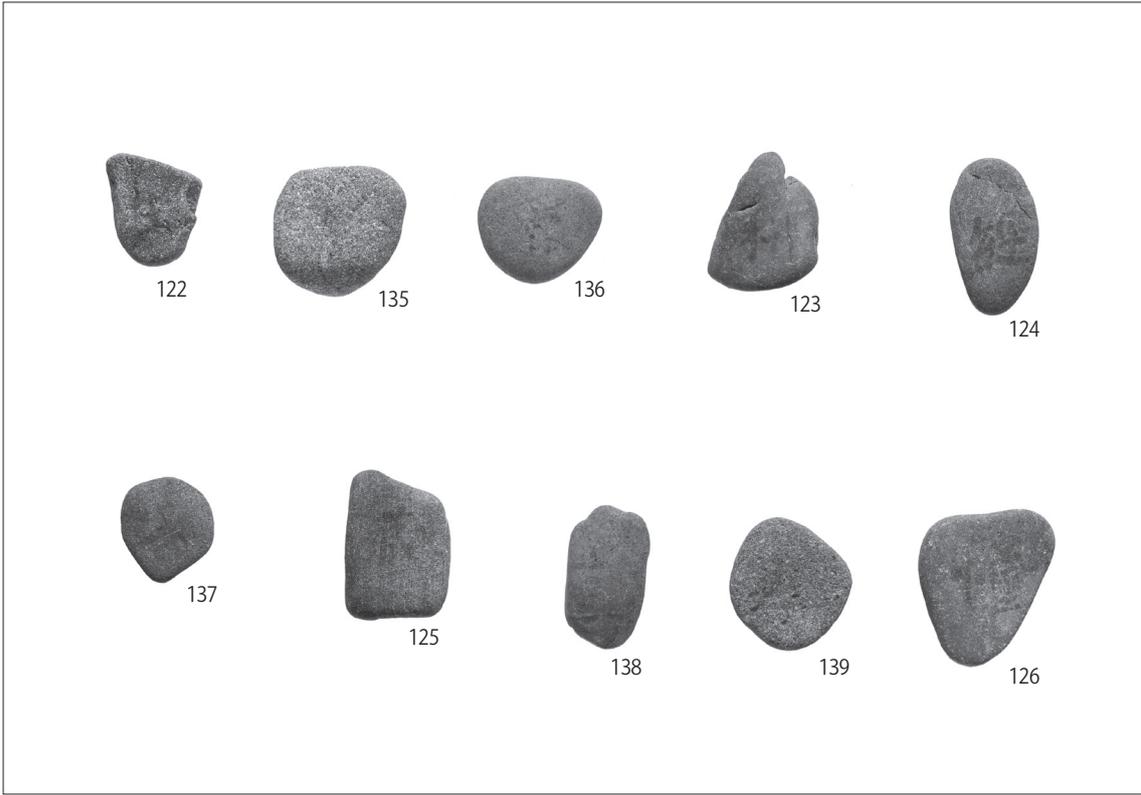
99



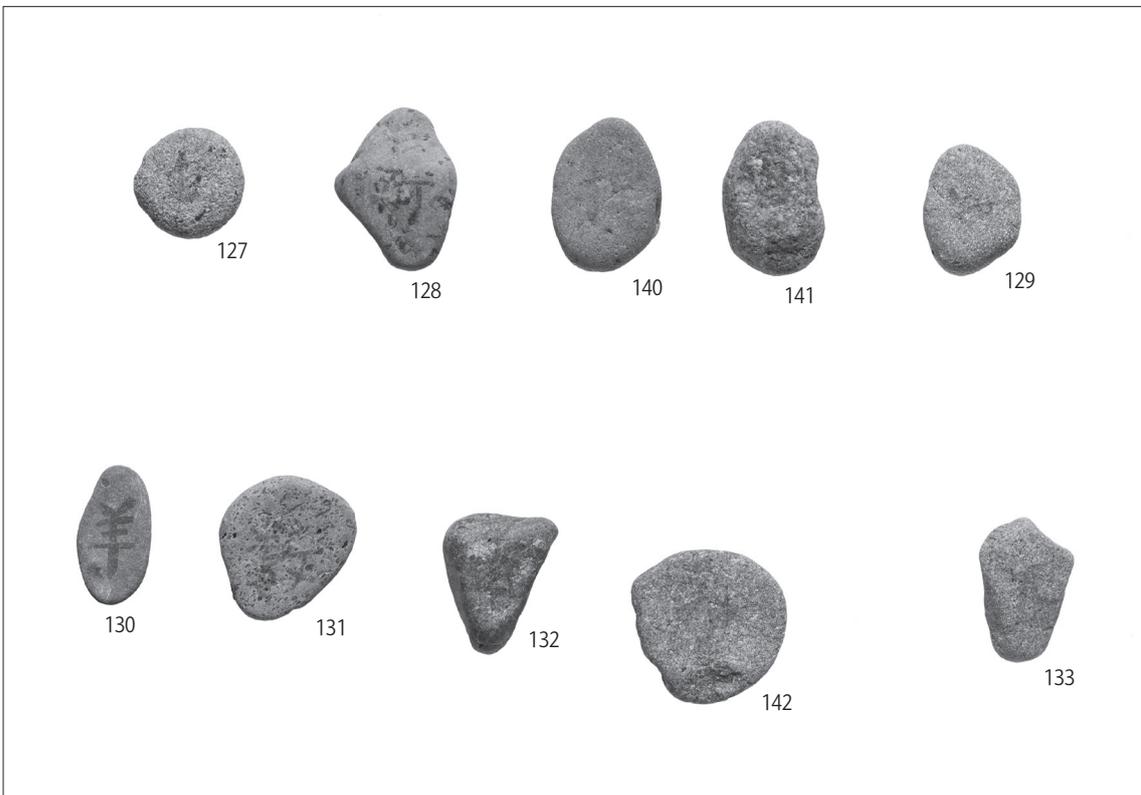
SK344



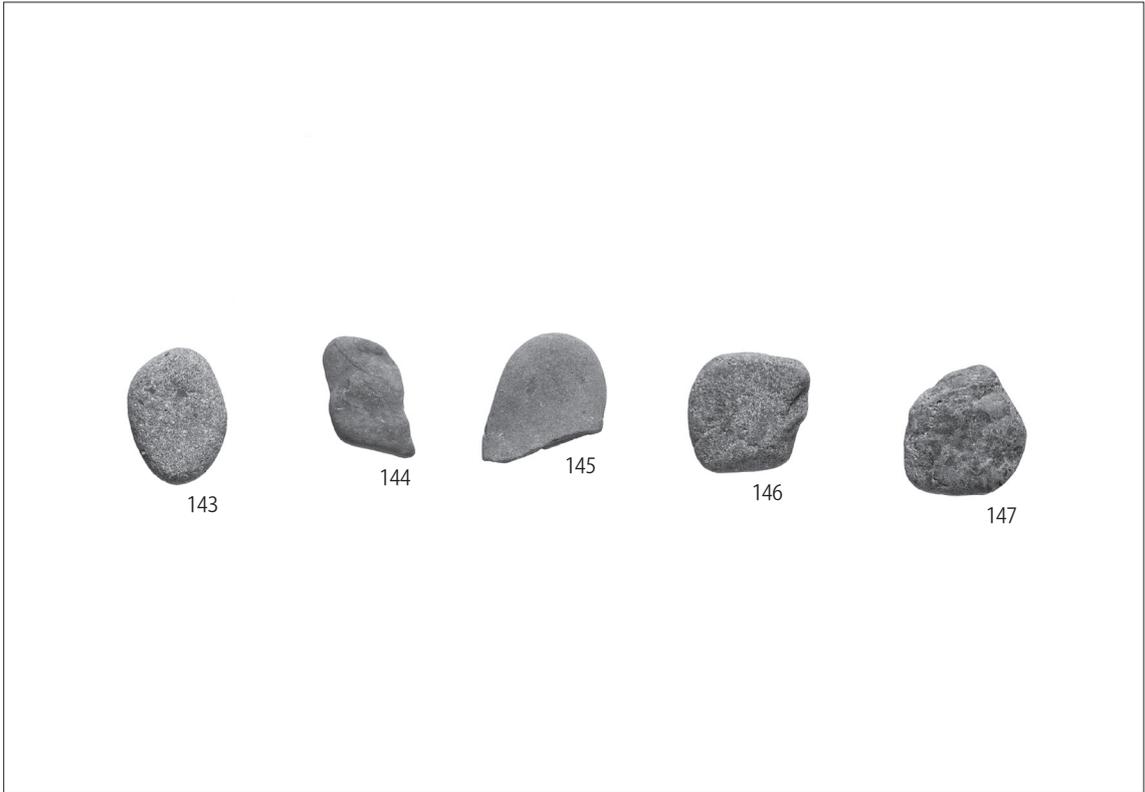
SK344



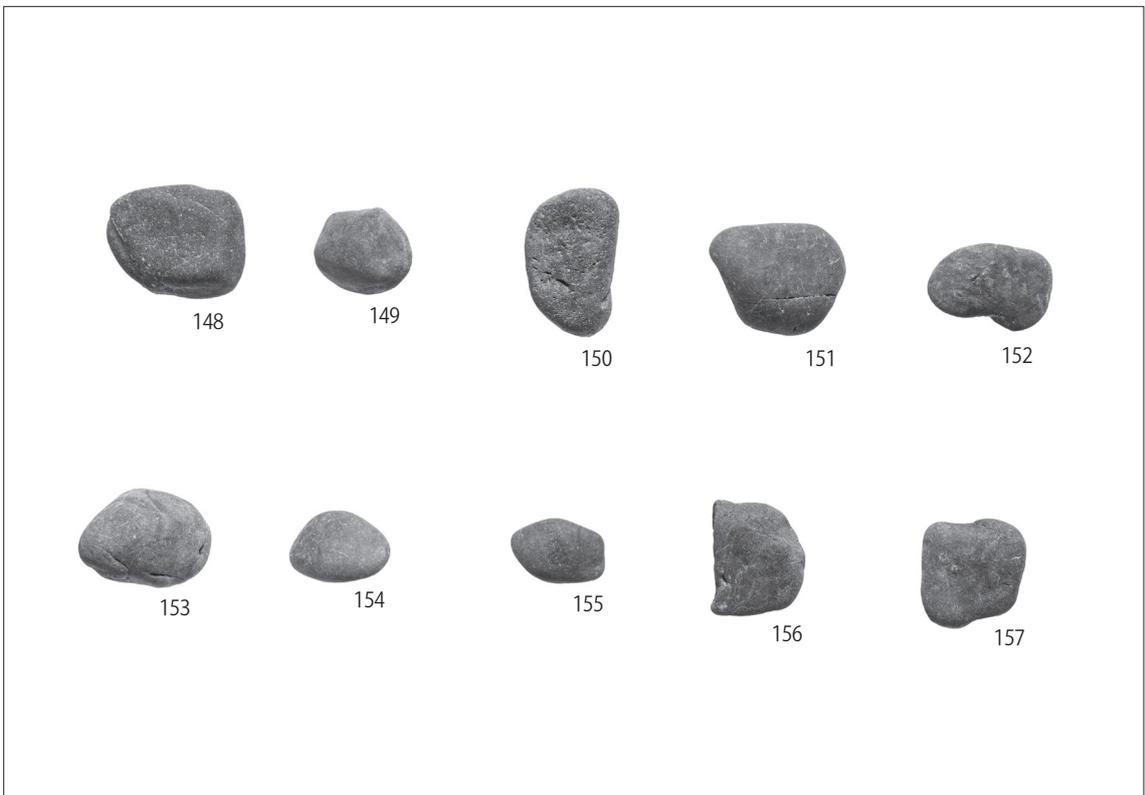
SK344



SK344



SK344



SK344

報告書抄録

ふりがな	ひとつやいせき2							
書名	一ツヤ遺跡Ⅱ							
副書名	彦根市立平田幼稚園運動場拡張工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	56							
編著者名	林 昭男							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財部 文化財課							
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL0749-26-5833							
発行年月日	20140331							
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ひとつやいせき 一ツヤ遺跡	ひこねし 彦根市 ひらたちょう 平田町 地先	25202	007	35度 15分 29秒	136度 14分 46秒	1,546㎡	20121017 ～ 20130329	彦根市立 平田幼稚園 運動場 拡張工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
一ツヤ遺跡	集落	中世後期	掘立柱建物・溝・柱穴・土坑・井戸・柵	瀬戸美濃・越前・信楽・土師器・瓦質土器・青磁・白磁・木製品・石製品・漆器				

彦根市埋蔵文化財調査報告第56集

一ツヤ遺跡Ⅱ

－彦根市立平田幼稚園運動場拡張に伴う発掘調査－

平成26年（2014年）3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会
文化財部文化財課
彦根市尾末町1番38号
TEL 0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社
岐阜市七軒町15番地
TEL 058-263-4101